

きて目出たき男ぞと。下野守に任せられ假に許さる指貫も。折にあひたる小豆色大納言の下にぞつけらる。御賀も納まる折柄。調下野の國司より注進の早使。陣頭に謹んで。扱も當國の住人。相馬の小二郎將門と申す者關東に威を振ひ。桓武天皇五代の孫。王位何事かあらんと己れと平親王と名乗り。相馬の郡に都作り内裡を建て。一門家人等に卿相雲客の官位を與へ近國を靡け。狂威惡逆以ての外に候故。其の伯父陸奥守平貞盛親子是を鎮めんと。軍勢を催し攻め戦ひ候所に。如何なる神變魔法にや一人の將門。七人の姿に顯れ立居動靜は申すに及ばず。怒れば七人一度に怒り笑へば七人一度に笑ひ。何を實の將門とは凡人の目に知り難く。七人の將門を一時に討たん事人力に叶はず。貞盛一戦に打負け父の國香討死し朝敵日々に勢募り候。地御誅罰延引に於てはゆゑしき御大事と存じ。將門が異相を繪圖に寫させ觀覽に入れ候と。大幅の一軸オクリ空に柱にかけたりける。地けにも七人別體にて五體六根一點變らぬ異人の相。詞に傳へ給に見るさへ。魂愕くばかりなり。地主上幼くましませども。奇怪の逆臣世に在ること朕が不徳に似たり。はやく節度使を以て征伐すべしとの勅詔。詞攝政忠平承り。かゝる不思議をあらはす將門。武勇の力ばかりにては叶ふべからず。如何に武家の輩。七人の將

門を討つべき謀あらば申し上げよ。大將軍の宣旨あるべきぞと宣へば。俵藤太秀郷進出でさん候。將門天下を覆し王位を奪はんと。思ふ程の企只者ならず。世上の耳目を驚かす爲。且は用心のため己れに能く似たる人を六人揃へて。將門は神通ありと世を欺くか是一つ。又は飯綱の幻術を行ふか是一つ。地よし何にもせよ生れし時は一人なるべし。敵に智あれば味方にも智あり強敵は勇士の願ふ所。七人は愚か千人に變ずるとも。將門が首は只一つ討取る者は此の秀郷。將軍の宣旨賜るべしと。フシ詞を放つて奏せらる。地茲に常陸の大掾藤原忠文。常々秀郷の武勇を猜みしがつと出でて。調ヤア秀郷口。脇の黄なる雛子が鬨に蹴爪をとぐ如く人もなけなる廣言聞き惡し。三上山にて蜈蚣とやら蜘蛛とやら殺せしとは事かはり。是ぞ天下の御大事かろくしき奏聞推參至極。將門討手の大將軍は忠文に賜るべしと遮つて。奏聞す。秀郷休へぬ若武者。ム、御邊が武勇は腰拔猫。拵走る鼠に眼を噴らすばかりにて。手に覺えなき廣言傍痛し事をかし。將門を大事の敵とは勇力より勢より。身を七人に變ずるといふがむつかしし。此の所にも氣を付けず何ぞかろくしく。討手の大將賜らんとは粗忽千萬とひやう者。サア一人の將門七人に顯はる、はいかなる仔細と存するぞ。申せ聞かん言へ聞かんと座を打つ

て問ひかくれば。ヲ、大將軍を望む身がさ程の心得あるまじきか。唐土の僂師といふ者人形を作つて。手足を働き物を言はする機械にて敵を騙りし例あり。將門も其の學び時今冬の始鼻息見ゆるは眞の將門それを標に討つべきに。なんの仔細かあるべきと嚴しけなる物識顔。秀郷嘲笑ひこれ。さ程淺々しき將門を。關東歴々の弓取どもが攻めあぐんで。遙々帝都へ言上すべきか。御分が其の眼にて將門が分身を見出さんとは覺束なし。あれ見よ鳥は何れも眞黒なり。地物は試し稽古の爲。十日も廿日も空をまぶつて一々鳥を見別けて見よと、フシかんら。くくと笑はる。調忠文大きにせいて。イヤ鳥を見別くる眼は持たず。御分が目玉抉り抜いて我に貸せと。太刀の柄に手をかくる。ヲ、易い事貸すべきが秀郷が。大の目の玉汝が眼には入るまじ。頼けた迄切明けんと鰐元抜きかけ膝立直し。地直垂の袖しほり上げ飛びかゝらんとしたりしが。御簾の方をきつと見て恐れとや思ひけん。莞爾と笑うてまつこの如く勇みかかつて。朝敵將門が首を振つて取つて。亥の子の餅の御祝儀萬々歳と取直す。フシ氣轉の。程こそゆゝしけれ。地攝政忠平公笏直し。今度の大将兩人挑み争ふ段。神妙々々さりながら縦へ武勇は勝るゝとも。正身の將門を儘に見分くる。智恵才覺なき者は大将に定め難し。さるによつて兩人が智恵を計

り見る事あり。萩の戸の大床に伺候して相待つべし。聰明叡智才覺勝れし方に大將軍の宣旨あり。則ち其のしるしとして禁中一の美人。錦木の内侍を其の身の妻に賜るべしと。主上の入りに隨ひて繪障子の座に着き給ふ。今日の亥の子を弓取の。敵にかちんと壽きて女は末の縁付きに。威のある男餅ぞと契る。嘉例や三重代々久し。フシ常陸大掾。忠文智恵争にも武勇にも秀郷に負くべきかと。萩の戸の大床に眩を張つて座しける所に。郎黨養輪の彌五郎御庭に忍び入り。高欄の下より主人の袖をひかへこれ申し。調今日御前にて將門討手の大将を。俵藤太と御争に付き智恵試しある由。若輩なれども俵藤太は和漢の學者。君はいろはさへ讀め兼ねる御身負け給はんは必定。其の時は飛びかゝつて一刀刺し返す刀に御腹召し生きて還らんと思召すなと叫べば。ア、調幸先悪い起縁が悪い。秀郷なればとて文珠でもあらばこそ。殊にかねく音に聞く。錦木の内侍を女房に下されんとの勅詔。地若し智恵較べに某が負になり。秀郷大将蒙り女房迄取らるゝならば。某は將門に内通し裏反つて本望遂げん。かう胴骨が据つたからは負ける事はあるまい。調さりながら一つ氣遣は。常に某は嫌ひ茗荷好き。某は利根草茗荷は鈍根草。しかも此の秋したゝかしてやつた。地どうでも茗荷の妄執が退きにくからうと呟やけ

ば。あれはや秀郷参つたり。お心を磨かれよと。フシ袈輪は表に出でにけり。地藤太は廿三歳の智仁を兼ねたる勇者にて。装束改め同じく大床に坐し給ふ。忠文きつと見これ藤太。詞御分は烏帽子直垂脱ぎたるか。帝の御前ばかりを大内と思はるゝかしかも爰は萩の戸。紫宸殿清涼殿に續いての御殿。袴所ではあるまい。其の文旨で此の文忠との智恵争ひ。太い和郎ぢやと笑ひける。されば、文旨なる此の秀郷。何事につけて智恵を試さるゝも知らず。御殿も多きに萩の戸に相詰めよとの仰。古歌の詞を考ふれば萩の錦と詠じたり。地將門追討の大將に萩の錦の直垂を賜る時。直に物の具取つて打ちかけ時を移さず打つ立つため。身を軽く致せしが。して御分装束を改めぬも。深き心候か承らんとありければ。忠文は返答なく南無三。茗荷の験がはや見えた。フシ獨言して居たりけり。奥の御簾を。押し遣りて。二十許りの上藤の。三方に盃据ゑ持つたる手つき。むつちりとしてすらりして。柳襲の縫箔に。輝く額の眉墨も。フシ愛敬深き聲作り。地これ兩人の衆。面々の智恵次第討手の大將仰付けられ。妻をも授け下さるゝ。詞それに付き女房を可愛がる風俗か。又さうも無ささうなか。此の盃にて試みよとの宣旨なりと。地二人が中にふうわりと咽ぶばかりの空柱に。忠文は氣を奪はれうつとりとせし顔付。藤太は是から大

事と思ひ。詞愚痴文旨の我等。内裏上藤の御挨拶何と申してよい事やら。して先づ御名は何と申すぞ。されば自らはお二人の中智恵の勝れしお方の妻になる。錦木の内侍と聞くより忠文挿こそ。禁中一の美人とはこれであらうと。一目見て違はぬなんと藤太。お銚子もなく盃ばりか出されしも智恵試し。浅い智恵ではちつと合点いくまいの。大事の討手に向ふ大將。盃は見るとも酒たべなどの叡慮。なんとくサア地智恵くらべに勝ちたると奏聞あれ。今日よりは我が妻智恵で持つたる女房妹背の床を暖まる。智恵ほとほりの新枕。フシ深い御縁と抱き付く。地御簾の彼方に人音して一際勝る髪容姿。年の齡丈ころはひ同じ出立の衣裳の裾。フシ長柄の銚子携へて。詞これなう御兩人。地如何に大將なればとて九献飲まぬも頑なり。一つ羞めよとの勅説。自らたべて差しませうかとありければ。地秀郷手をつき勅説と申しお酌と申しお辭儀致す筈ならねど。お名も知らずの盃は戴かれず。何とかな申すぞ。詞ア、自らはお二人の中の妻になる。錦木の内侍といふより忠文と胸を衝き。ハツ早まつた走り智恵。地近頃面目失うた顔顔を赤めて俯向けば。二人の女中指ざしてさつても赤い顔かな。あれが誠の猿智恵と。フシ一度にしつゝと笑はるゝ。地又梅壺の妻戸より五人連れ立つ上藤たち。始めに變らぬ五つ衣五つ

の袖に軍配圓扇。金の采配滋藤の弓。筋切文の鍔矢金作りの御太刀。てんでに捧け欄干に並べ詞を揃へ。詞これく秀郷忠文。此の度平親王將門討手の大將たるべき人。此の弓矢太刀をはき團扇采配を持つて。軍兵に下知せられよ。鎧は肌身に添ふ物なれば。則ち赤地の錦木の内侍。寢物語の詞。戦花軍相手はそれと目利して。しつほりと引つ組んで勝負あれとの勅説。其の錦木の内侍とは自ら。次も同じく錦木我等も錦木。我が名もく錦木の内侍と。地始め二人の錦木に立並びて七人の。髪結びぶり衣の色容顔勝り劣りなく。智恵を試しの智恵鏡。フシ影を映せる如くなり。地秀郷是ぞ大事の所智恵試しとは此の事と。思案をめぐらしおはすれば忠文はうろくと。詞扱小澤山な錦木よし何本ありとも。禁中第一の美人錦木は只一本。忠文が智恵にて見付け出して見せ申さん。地鼻の先に汗の溜るは美人の相と七人の上藤の鼻をきよろきよろ見て廻る。フシ鼻の先智恵是ならん。地稍あつて攝政殿秋の戸に御出あり。如何に秀郷忠文。詞心外にあらはる。女中をさへ見分けぬ程の才覺にて。智謀計略兼ね備へたる將門が。七人の變身を顯す事は叶ふまじ武勇の外とは此の事。地如何に猛く勇むとも案の外の後れを取り。恥辱を朝家に止めんより退出せよと宣へば。秀郷つと出で。詞イヤ遠き將門を討たんより御

側に近き敵の候。上には聞召されずや。錦木の内侍將門が内通あり帝を密に害し申せ。其の身國王となつて錦木を女御に立てんと約束にて。肌を放さず玉篋を窺ひ奉る由。秀郷隨に承る。あの錦木を高手小手に縛め水責火責に拷問せられば。將門七人の次第明かに知れ申さん。大惡無道の女朝敵とはあれ。地あの錦木の内侍と女中に向つて指させば。眞中の上藤氣色を變へ秀郷の前につつと寄りエ、さもしい俵藤太武士に似合はぬ偽り。將門といふ名さへ今日聞き始めの此の錦木。地水責火責逆様に吊り下げ。づだくゝに刻まれてもつゆ程も覺えなし。詞但し朝敵と一味せしは我ならで外の錦木か。詞サア錦木の内侍が二人あるかと急ぎ給へばそれれく。其の二人無い錦木を。地顯す爲の當座の偽り其の段は眞平御免。俵藤太秀郷が方寸の智恵を以て七人の。將門が實否をあらはす試みの氣轉まづ此の通りに候と。袖搔合せ申さるれば内侍もほつと溜息つき。攝政殿を始めまるらせ御簾の内侍候の男女。扱も頼智の氣の働き。軍の智略さぞあらんと。フシ一度にあつとぞ感ぜらる。地重ねて仰ありけるは。それ侍は一事を聞いて十事を知るが故に。武士の士の字を十一と書くといへり。即座に錦木を見出す才智輕きに發して重きに渡る。軍慮頼もしく武勇最も他に異り。朝敵退治の大將軍に任せられ。錦木の

内侍も賜る條。吉日を選び勇んで發向致すべしと。手づから内侍の左の袂を取つてたびければ。秀郷も右の袖を取り頭を座につけ。詞凡そ弓馬の家に生れ大將軍を賜るは定まる譽。殿上に於て宮女を妻に賜る事。地古今秀郷一人弓矢取る人々さぞ羨しかるらん。關東に馳せ向ひ將門が首提けて凱陣の。故郷に歸る錦木に盃は其の時それ迄は。恐れながら御所に預け奉りお暇申すと述べければ。内侍も嬉しさ包み兼ね。折角上より下されし女房。今宵は宿所へ連れ立ち稽古のため一軍。門出が祝ひ度いにつこと笑顔を忠文が。睨みつめたる無念顔それも構はず萬事を捨て。敵を討つべき軍の手段。謀ある俵藤太威勢。ゆゑしく。三重へうつ立ちけり。フシ頃は中冬。地上旬越路は寒氣烈しくて敵の油断を討つべしと。數千騎の軍兵を越後路に押廻し。馬物の具をも脇道に送らせ。大將秀郷は家の子鐵銅丸といふ童。弓矢ばかり擔けさせ若黨少々相具して。京家の青侍の物詣の體にして。忍びて下る東路や打渡す。瀬田の長橋も。フシ冬の日短く暮れにけり。地龍神の宮に幣奉り禮拜し。秀郷苟もかゝる武運につのる事。一年三上山の毒蟲を滅せしより。併しながら龍神の擁護によつてなり。いよく感應力を添へ。朝敵將門が首を得せしめ給へとスエテ暫く祈誓ある所に。地土民と思しき老若二三十人むらくと。秀郷の前に匍

ひつひ。これは秀郷様にて候か。我々は勢田二川矢橋草津の百姓にて候。當月始め頃より此の湖に鬼とも蛇とも知れぬもの。夜毎に顯れ往來を惱し。近郷の女童を取殺す事數を知らず。これ龍神の祟と存じ此の社へ。御湯を上げ候へば神輿に乗移り。俵藤太秀郷は龍宮の乙の姫と。夫婦の契ある所に錦木の内侍といふ妻を持つ。地其の恨五衰三熱の苦みを晴さんため。三上山にて滅びたる蜈蚣の魂魄を借つて。湖水を干潟となし青山を枯山とし。一國の青人草の命を取盡さんとの御託宣。彼の上臈と離別の一筆を社に籠め。龍神を和め我々が命を御助け候は。今生後生の御慈悲と泣き口説きてぞ訴へける。詞秀郷からくと笑ひ。やあら格氣深い乙姫殿。如何に格氣召さるゝとて此の秀郷が。一生男鏢にて暮すべきか。やれ百姓ども。乙姫といふも龍神何條さる事のあるべき。湖水の化物とは河伯河瀬などの業なるを。地巫女觀が物取りに神託とてたぶらかす。秀郷が手を下す迄もなく是なる童に申し付け。今宵の中に締殺させて取らせんず。詞時分は何時ぞと宣へば。更けて出づる時もあり又宵の中只今時分といふ折柄。地比良の嶺嵐一しきり一村時雨颯々。木の葉吹き立て降る雨に小波騒ぐ橋の下。水に映ふ電光松明を振る如く。廿尋餘りの百足の形。背甲は漆に塗つたる如くコハッ火燄の様なる舌を振り。欄干

行桁橋柱卷上り卷下り。地藤太を目がけてかゝりけるは、フシ凄じかりける勢なり。地藤太ちつとも騒がす例の滋藤大の雁股打ち番へば、鐵銅丸押し止め君は先年本體を遊ばしたり。是は其の亡魂悴めに仰付けらるべしと。いふより早く飛びかゝれば。百足は數千の足を立て劍の牙を振立て。捲いつ解いつ戦ひしは人間業とは、三重へ見えざりし。フシ力は元より。地鐵銅丸眞甲にひらりと乗り。首際を四つ五つ續け打ちに切付くれば。胸の中より大の男腰骨を斬下けられ。朱になつてよろほひ出で。詞抑我は常陸の大掾忠文が執權。義輪の彌五郎重成。主君忠文此の度の遺恨によつて帝を恨み。依藤太が首取つて平親王將門へ降人に參らんとす。餘すまじ秀郷と廣言吐いてつつ立つ所を。地番へる矢なればよつ引いてひやうど射る。彌五郎が細首。ふつつと射切つて橋の下。フシ眞逆様に落ちてけり。地此の勢に恐れをなし橋の下より軍兵ども。松明提げ百姓と偽りしも。一つになつてむらくと八方に逃げ廻る。鐵銅續いて追つかくれば。地エ、殺して得なし生けても損なし捨てて置け。百足遣ひに一曲せさせどつと笑つて門出せんと。主從擱んで湖水にどうど打込めば。百足の胸にも耐られず色々の装束して。深い沈んづ流れ行く欄干叩いて打笑ひ。花を流すは吉野川紅葉を流すは、フシ立田川。地月代割つて髪結ひ

し。百足を流すは琵琶の湖。琵琶に撥あり是も亦。龍神の罰天子の罰しるしを見せた手なみを見せた。力見せたの長橋をとんどろとろ。とろろと踏み鳴らし東の空に打つ立つて。世に秀でたる秀郷と譽は。四海に輝けり。

中之卷

地臣命を受けし日より寢れども席を安んぜず。食すれども味を甘んぜずと言ひし孔明が跡を追ひ。依藤太秀郷敵國に忍び入り。要害を窺はんと様々に身を窺し給へども。忠文が内通にや將門早く聞付け。旅人は言ふに及ばず親類知音たりとも一夜の宿をも禁制と。下野一國に觸をなしければ。夜は野原の草の枕に地の利を察し。明くれば朝立市人に立交り。民の離合を鑿み敵を討つべき謀。フシ軍慮に身をぞ盡さる。水れる霜をつめた所に踏分けて來る女姿。髮容袂外れ如何なる人ぞ世を捨てて。身をも衣裳も惜氣なく裾踏み汚す唐綾の。怪しや下女の供もなくしと、と立寄りて。詞卒爾な申し事ながら。豫て聞しに違はず御目の中に腫が二つあるかは。疑なく將門討手の大將軍。依藤太秀郷様にてましますな。一國の民百姓將門を疎み果て。君の御下りを悦ばぬ者は候はず。取分き自らが爲には夫の敵。鬼を欺く將門なりともなんのそ

のとは存すれども、地近寄るべきたよりもなし。女なれども御馬の口に付けられれば將門が陣に向ひ。胸に迫る恨のたけ高々と罵つて。討死せさせてたび給へとスエテ思ひ込つたる顔ばせも、地二十餘りに美しく盛過ぎ行く山櫻。嵐を憎む如くなり。秀郷打笑み給ひ。詞先づ女の降人とは珍しし。若しは敵の計略か何にもせよ。味方に降るは吉左右。扱夫の假名將門を敵といふ。仔細は如何にと宣へば。さん候妾が夫は將門が譜代相傳の侍大將。村岡の六郎公連と申す人。主人の悪逆を常々諫言致せども聞入れず。大酒の癖色好み。濫皮とれし女房は主ある人の妻子をも。奪取つて手かけ足かけ剩へ。地妾をも閨の伽に差上げよ。其の代りには今の所領三層倍の加増せんと。使度々重れども夫の公連義を堅く。返答も致さぬを。無理非道の將門大きに怒り無體に搦め手にかけて。敢なくも討つて棄て死骸も見せぬ此の怨。口惜しとも無念とも夫の最期の心入れ。思ひやつて悼はしく。せめて將門を睨んでなりとも死にたいと。思ふもかひなき女の身。憐と思召されよとさめなく。とぞ泣き居たる。詞秀郷聞き給ひ。敵將門が家にこそ。六郎公連といふ忠義の弓取りありと聞きしがお事が夫なりけるか。さ程忠ある侍を手討などとはしやつが運の盡き始め。地押寄せて攻破らん何事かあるべき。されども彼奴が姿七人に現す

る由。神變か魔法か但し人の質物か。此の辨なくしては粗忽に軍成り難く。人馬を隠し延引に及ぶ所にお事は千萬騎の加勢も同然。身を捨てても夫の恨遂げんと思ふ所存からは。今一度偽つて將門が館に出で。詞夫公連存生には世間を憚り。御心に背きし其の科を御免あり御側近く召されかすと打しをれ誑らば。色に耽る將門はつこりと迷はされ。心許して閨に入るは必定。地如何なる神變通力にも女一人に七人の將門が。妹背の枕を交されまじ。其の時正體顯るべし見届け逃けて歸られよ。詞此の童は鐵銅丸とて強力者。幸に髪長し下女に作つて附け置かば。地鐵の楯なるぞや鐵銅丸用意せよ。豫て近邊の百姓どもを語らひ置きし事もあり。遅きは事の漏るゝ端はやく思ひ立たれよと宣へば。詞有難き御言葉。近づき寄つて面骨に喰付いても。此の恨晴さんとは存すれども。地我が夫ならで餘の男に笑顔さへ見せぬ身が。如何に智略なればとて敵と二人閨に入り。つんふんともなるまいし誠らしうあしらはば。いやらしい濡かけ音に聞ゆる力強。無理無體な事しくさるか。エ、悲しやとばかりにて涙を流せば鐵銅丸。詞夫は餘り案じ置き。無理無體な目に逢ふとても女は何の悲しい事。下女になる此の鐵銅鳴る雷をも取拉がんとは存すれども。地若し誠の女と見て物喰のよい將門。無理無體な事しくさるか。エ

エ悲しやと地泣く眞似もはや女の眞似身振とりなり手ばしかく。平親王が都と聞く猿島の郷へと三重へ急ぎける。フシ内裡をうつす。地城郭の本丸に紫宸清凉殿。十二の局后町東の追手を陽明門。搦手を待賢門郁芳門と名付け。執權御厨の三郎將頼大芦原の四郎將平。常に城中を巡つて出入を改め。關八州の百姓を虐げ。毎日一萬俵づつ兵糧の米麥馬大豆を運ばせて。籠城堅固の要害は。日本國が攻むるとも落つべきやうこそ。三重へなかりけれフシいつ落ちそめて。みなの川。身は憂き事ぞ積り行く。公連の北の方心に染まぬ薄化粧。姿の色も偽りの。フシ繪に書く花と引繕ひ。地鐵銅丸が後帶腰をよぢらす文字摺や。フシ忍ぶ體にて入りにけり。地御厨の三郎不思議さうに。同ム、見なれぬ好い女中。局方への見舞ならば通り札あるかといへば。ハウ御見知りなきは御尤。いつぞや御機嫌に違ひお手討に逢ひし。村岡の六郎公連が女房清瀧と申す者。地嘘誠か親王様我等風情にお心をかけらるゝとは。女と生れし本望と飛立つばかりに存せしに。同夫の公連情氣深く。其の身を失ふばかりか女房迄狼狽へ。浮世に竹む蔭もなく。嫁入せうと申しても御殿の聞えを憚り。誰よばうと言ふ者なく死ぬも死なれす存らへて。地路頭にさまよひ往き來の人の袖に纏るは今の事。小町程の美人さへ百歳の姥となり給ひしを。思へば女の味

氣な。さ果敢なさ。御憎しみを御免ありせめてお寢間の上げ下し。お湯殿の御用でもお執成頼み参らすると。につこらしけに誠しくフシ打しをれてご涙ぐむ。同ハテしをらしい能い言ひやう。物ごしといひ眉目といひ。公連が惜んだも道理。上にお心かけられたも道理なう折に幸かな。此の頃都の内裏に錦木内侍といふ美女ある由聞及ばれ。見ぬ戀に焦れ給ふ故何がな代りの忘れ草と思ふ壺。地伺ふ迄なし直に御前へ伴はん。フシいざ此方へと言ひければ。これはく冥加に叶ひお嬉しや。内裏上藤内侍とやらの代りには。憚り乍ら兎も角もお鐵おじやや。あゝいと答へ入らんとするを將頼止めて。同ムウ供の下女か。扱あらくましき面つき。賤しき下司を御前近くは叶はぬ。そんなら何處に寝ませうぞ。左様の事迄身は知らぬ。厩の隅にでも臥せつて居れ。ア、あのさんわいの。まだ殿御とさへ寝ぬものあのあいたてない馬と枕が交さりよか。ア、地はもじやとしほの目に。フシ跡を見送り居たりけり。地はや入相の土圭の聲お庭廻りの下郎ども。つまりくの戸を閉めて。ヤアウ同よい食ひ加減な物がある。これ見ろやいと二人側にすれ寄つてなんと君。こゝはがいに寒かんべい肌は冷えは致さぬか。ハテ冷えるとどうしませう暖めてくれる男はなし。只賤が身を恨みるぢやとなぶればしたゝかなぶられて。いや

是は忝い。身が部屋へ同道して一汗かゝせて暖めう。いや身が部屋へと訝り合へばエ、露しい。地なんほ程せり合うても賤が好いた男でなければ靡かぬ。荒男二人かゝつていと花車な自らがフシ身が續かぬと顔を振る。是は至極尤。偶然らば二人の中お氣に入つた男を。手付にちよつと抱付いて貰ひたい。地それならいつそ片恨みの無いやうに二人を一つに抱締めて。思ふと思はぬと締め加減で見さんせ。サアござんせと引寄せて二人が腰骨ひん抱へ。ゑいやうんと締付くるなう苦しや息が出ぬ。骨が碎ける眼球が抜けて出るやうな許せくと泣き喚く。地許せとは譯が悪いの。歌こんな弱みそめはこちや好かないさやんれ俺や好かないさと地二三間どうど投げ付けられ。フシ泣くく逃けて出でにけり。地寒夜の月も傾きて稍更け渡る廣庭の。奥に燈火きらめきて幽に聞ゆる酒宴の聲。あら心許なや女業。若し仕損せば駆入つて敵に先は越されじと。懐中の九寸五分袖口に抜きかけ。裾小短かく掻い挟み椽に手をかけ障子の隙間。妻戸のはづれ身をかゝめつ伸び上つつ。すかし覗きて立つたる所に。北の方差足してするくと走り出で。なう鐵銅殿そにか。ア、すさまじやと縄付き。フシ身を顛はしたるばかりなり。詞ム、扱は將門に色を覺られ給ひしか。いやくなく覺られず。如何にも機嫌はよけれど

も聞きしに違はず。七人の姿面魂髭のかゝり皆一樣にて。物いふ聲も同音にて。公連が女房も。今宵我に靡く上は浮世に叶はぬ戀もなし。枕並べてしつほりと閨で思を語らんと。地しなだれかゝる恐ろしさ最早盃納り。あれあの長障子の高廊下あれこそ閨の通路と。指させば燈火の障子に映つて將門が。七つの影の凄じく。閨を指して通りしは天魔の所爲とも神變とも。流石の鐵銅身の毛を立て。フシあきれ。果てしも理なり。地時に奥より人音して御厨の三郎大青原の四郎用ありけに立出づる。南無三寶見付けられては一大事。そりやく其處へと兵糧のオクリ俵の陰にぞ隠れける。地程なく兩人庭に出で。何かは知らず築山の据石取つて退けたる其の下は。穴藏と思しき土の牢。詞これく上よりの仰あり。サア出でよと引出す。繩付は如何なる深き科人ぞや。地髪はおどろの如くにて日を見ぬ顔の土色に。目の中黄ばみ衰へてよろほひ出でしも足立たず。かつばと轉ぶを兩人抱へ引起せば。漸うと起直り。ハアウ長夜の闇を出でたれば晝かところ思ひしに。月夜にてありけるよと振り仰向きたる面影は。地二世と契りし我が夫の公連なり。ヤアまだ命のありけるか。是は誠か夢なるかと走出づるを鐵銅丸先づ待ち給へと引止め。押しめても止らぬ忍び涙の包み泣きいとしの。姿やあさましや。地村岡の六郎

公連とて百萬騎の侍大將。烏帽子直垂尋常に馬引寄せ乗つたる器量。並ぶ人もなかりしに。餓鬼とも人とも、フシ見え別かぬ。何の科もなき人を如何なる屋焼人殺も。斯程の縛ある事かと。思へば胸もせき返り。聲を立てじと兩袖を口に掩へば目に涙。スエラ絞り。かねてぞ泣き給ふ。
詞 兩人詞を揃へ如何に公連。かく長々土の牢に押籠め。世間は御手討と披露ありし故。御邊の妻思ひ切り君の御心に従はんとて參られし上は。御慈悲を以て命を助け放さるゝ。有難く思はれよと言ひも敢ぬにム、ウ。何と女めは心變りしとや。してそれは必定か。問ふ迄もなし今夜御酒宴の座に連り御寵愛淺からず。只今御寢間へ入り給ふと言ひければ。地はつとばかりに頭を下け。無念涙と恨の涙スエテ齒をくひしめて咽せ返る。妻は心の誠をも。言ふに岩根の苦清水。フシ涙かへほす如くなり。稍あつて公連涙を抑へ。詞 なう大青原殿御厨殿。侍の妻女はよつく心を知るべき事。思はぬ響不覺を取るも一つは妻の心にあり。地公連程の忠臣が譜代の主君の御意を背き。全く女を惜むにあらす。詞 平親王將門こそ惡逆超過し色に耽り。地譜代の家來の女房を奪ひ取つたりなんとと末代の御恥辱。當代一天下の誹とならんうたてさに。御機嫌に逆ひしは忠義の上の忠孝世上の人はそは知らず。十餘年馴染みし夫婦の仲。かゝるさもしき心底の女

とも知らず絆され。惜みたる科によつて土の底に埋まれ。下司下郎の臈にかけ頭の上を踏みさがされ。土を戴き身に泥をかぶつても命は惜しき物なるか。蚯蚓に劣りし侍と。指さゝれ笑はれて人に面も合されぬ。此の命助かるはさらくお慈悲と存せばこそ。誠お慈悲とあるならば心の腐りし女めが。平親王のお后顔御簾几帳にまつはれ見物する目の前にて。首討たるゝが御慈悲ぞや此の通申してたべ。さりとは人々傍輩の好み情ぞと。頭を振つて聲を上げ手を縛られて羽拔鳥。膝に涙を抑へ兼ね大地に顔を打付けく。人目も分かず歎きしは、フシ目もあてられず哀れなり。地兩人今は詮方なく是非助かるまじ。首討たれんとの願ひ上意をもだすに似たれども。先づ其の通り言上せんと、フシ打連れ奥に入りければ、地女房あこがれ走り出で。なうなつかしの我が夫やと。抱き付けばはつたと睨み。詞 我が夫とは誰が事。土まぶれに成つたれども公連は弓取。心の穢れし女は持たぬと、地よろほひ退くを繩りとめ。サア弓取の妻なればこそ殺されしと聞きし夫の恨み晴さん爲に此の有様。夫を頼むは女の習ひ憐むは男の道。如何に弓取なればとて不便とも哀れとも。思召さぬか恨めしやと泣けば夫もわつと泣き。ヲ、女房を不便とも哀れとも思はぬ侍が。女房故に此の如く土の底に繋がれしが。眼に見えぬ女房は踏殺

さんと立上り。足を上ぐればよろ／＼。嘯いとしやとだき起す。其の手を踏めばよろ／＼よろ。足弱車力無くスエテどうど伏してぞ泣き居たる。鐵鋼丸四邊を見廻し立寄つて。某は依藤太秀郷が召使ひ鐵鋼丸と申す者。夫を無體に殺されし事主人ながら此の恨を報じ度き由。北の方の志秀郷深く感じ。先づ城中の要害等を窺ふため騙り同道致す所。地命全う候上は將門には何の怨みもなく。其の儘元の主従。我等が主人秀郷とは何の好みも思もなく。其の儘元の敵味方御身達者に健だつて。戰場にて勝負なされうか。但し只今勝負望みならば。北の方の懷中に守刀用意あり。我等も懷に九寸五分を貯へしと。縛り繩すん／＼に引きちぎりサア。後日か只今か心次第に仕らんと。飛びしさつてぞ控へける。地公連涙をはらく／＼と流し。武士の身と生れ出でとても主を持つならば。秀郷公の如くなる仁義ある大將の下人ともなりはせて。地情も知らぬ無道人將門が下人と生れたる。身の宿世こそ果敢なけれ。非法の科を言ひかけ夜晝分かぬ土の底に。半年ばかり縛り付け月日の光も見せばこそ。竹の筒にて食事を仕掛け宛然鷹の落し餌に死なねば死なぬ命かや。恨みは重々盡させねども。なう主といふ字はフシ削られず。地君君たらずとも臣臣たるは弓矢取。恨みありとて將門に弓引くべき様もなし。

情ありとて秀郷に甲を脱ぐべき道もなし。さりながら女房女なれども一旦頼み奉りし秀郷は主君にて。將門は敵成るぞ。地必ず／＼忘るゝな。いたはしや將門天罰天の責をうけ。秀郷の矢先にかゝり屍を曝し給はん事。日を數へて待つ如しあさましき主君の果て。見盡して何かせん是迄なりと女房の。守刀奪ひ取り弓手の小脇に突き立つる。わつと叫び取付けば。此れ侍の腹に一分なりとも刀を突き立て。又抜くといふ法やある。地將門には義理の死秀郷には情の死。武士はかうぞする物よゑい／＼。ゑいと引けども半年ばかり縛られし。手の筋弱り弱る刀を取直し。切先咬へ眞逆様にかつばと伏して長き夜をフシ見果てぬ夢と消えにけり。地女房前後も辨へず共に消えんと抱付きスエテ聲も惜まず泣沈む。地奥に相圖の太鼓の音どう／＼と鳴り渡れば。受けて答ふる鐘の聲御厨の三郎高樓につつ立つて。彼奴等は秀郷が忍びの者。討取れやつと言ふより早く當番の武者百騎ばかり餘すまじきと取卷いたり。地腕も心も鐵鋼丸願ふ所といふまゝに。九寸五分を閃かし胸腹太腹横つ腹。小鬘眞甲脊骨胸板嫌ひなく突き立て突き立て。三重追ひまはる。地曲者は女めと。既に危く見えし所に積んだる俵ぐわら／＼。崩れかゝつて取卷く敵の足元に。ころ／＼／＼／＼と繩はね切り。地依に籠りし鎧武者

一度に手足をぐつと伸し。地小太刀を揃へつつ立つたる。軍兵何儀あるぞとも、フシ量つて知るべきやうぞなき。地城中震ひ騒ぎ立ちやあゝ、寄手の奴ばらが。調百姓と心を合せ儀に入つて忍んだり。地油断して怪我するなとしどろになつて見えたるを。コハリ此處に揉み立て彼處に追込め蜘蛛手つるかけますかけ渡し。十文字に斬立てられ風に小糠の散る如く。フシむらくばつとぞ逃けたりける。調鐵鋼丸勇みをなし。ヲ、進めや軍兵勇めや勇め敵は無二無様儀。地ッ、これ武士のほんだはら手柄から白早速を踏み。北の方を先に立てしんづ。ノと立歸る依藤太の儀の智略。敵を討つ事易い事譽を得ること易い事。まだ新まいの鐵鋼丸。心ひねたる大將軍末たの。もしくぞおほえける。

下之卷

地鶴千里に翔れども地を離れず。鷺雲に到れども天の外に出でずとかや。人一皮の偽萬劫にも消え失せず。常陸の大掾忠文將門に諂ひ。錦木の内侍を奪取つて參らせんと間に合せの内通。中々力に叶はねば末の咎め怖ものなり。地都に名高き傾城白拍子の。噂を語つて遊女に心を移させ。金銀を以て美女を買取り。將門に捧げ機嫌を取らんと分別し。都九條に隠れなく遊君數

多抱へ持つ。大文字の長を伴ひ。夜を日について下野や。フ玉田の横野に着きにけり。地人里遠く野は暮れて吹來る風に誘はれ。尺八とも笛とも聞分け難き竹の音の。頻りに近く聞えたり。調忠文耳を翫て。やら不思議や。人家も見えぬ野中にて珍しい筒の音。なんと長尺八と聞いたか笛と聞いたか。何者であらう推して見よといひければ。我等の商賣をそれにて。里は諸人の遊び所。お客達にも御器用人幫間衆にも藝者多く。一節切にて笙篳篥吹分くるを承れども。かゝる音色は今が始め。地かゝる東の果迄も色の當世。風を好むあち者めが。戀の相圖の呼子鳥か此の度は將門公へ。色賣に行く道中殿も我等も門目出度し。聲をしるべに尋ね寄りて御覽あれ。面白いく、笛による鹿妻戀ふ鹿。狩場の鹿は明日をも知らぬ。歌戯れ遊べやあれの。調これなう此處ぢやと立寄れば。地一木の柳枝垂れて亂れ合うたる柳の絲。忠文をうち絡み蜘蛛の巢かけたる如くにて。引きまつひ引き止め更に五體を働かせず。調こは何事と振上げ見ればハア恐ろしや。地梢に一つの髑髏笛尺八と聞えしは。目口の穴より吹通す。嵐の響風の聲忠文主従長諸共。はつと消入り地に喰ひ付きスエテ生きたる心地はなかりけり。調時に髑髏聲を出し如何に忠文。我を誰とか思ふ。將門が父平將軍良將なり。地七年以前病死せし時。我

が子の將門惡逆の餘り。親たる我が死骸の兩眼を抉り出し。詞石南花の葉に包み。耳鼻を削いで白膠木の葉に包み。舌を抜いて烏頭の葉に包み守にかけて千日が間。多身通の法を行ひし故親子の血筋の悲しさは。地魔法に引かれ兩眼兩耳鼻と舌。六人の佛と顯れ。本身共に七人の將門とは變ずるなり。詞再び娑婆に形を顯し上を苦しめ下を惱まし。同じく惡業を作る事。此の死屍に應へて無數の苦患を受くる上。地柳の根ざし頭の鉢を生え抜いて。風吹き木の根揺ぐ時頭にこたゆる其の苦み。我が泣き悲む聲なるを。笛尺八と聞きなして謠ひ樂む事恨みありやうらめしや。詞刺へ汝遊女をすゝめ。惡に惡を添へんとする汝亦大惡人。六人は影の如し。誠の將門には額の蟬谷に脈筋あり。地それを標に近付き此の有様を語つて諫言を加へ。惡心を止め我が苦患を助くるか。是より都へ立歸るか。是を違へば汝にも同じ憂き目を見すべきぞと。怒りの。ほのほ烈々と揺めく響にさしもの大木。只大風の揉む如く茫々ばつと鳴渡る。夜半の嵐にさそはれて。ナホス獨樓は。消えて失せにけり。地忠文死入る心地にて地に這付きて居たりしが。詞長は猶も顛ひ聲なう恐ろしや凄じや。持丸長者になるとも此のお供はなういやや。我等はお暇々と立歸れば忠文引止め。エ、如何に遊女屋風情とて卑怯千萬。これよつく聞け。

今の詞が恐ろしとて都へ歸つても。朝敵將門に一味せし叛逆人と。帝よりのめくとよも生けては置かれまじ。又將門に近付き父御の獨樓。まつ斯様の御苦みと語つても。忠文などが意見にてよう暖かに惡心を翻さう。地生中意見だてしてなんのにべもしややりもなう。一討にしてやらるゝは定の物。地先へも行かれず都へも歸られず。爰に一つの思案あり。詞先づ依藤太秀郷めが首取つて。それを土産に持參して諫言したらば。十が十ながら聞入れらるゝは必定。長は何と思ふと言へば。サア其の依藤太の首取る事が危なもの。あつちの首を取りだてして此方の首を取られうより。地獨樓に喰付かれたが。フシ御分別ぢやといひければ。詞エ、流石町人臆病者。さういうて武士が立つものか。一先づ道を急いで藤太めが在所を捜すべし。地皆来いくと出て立つ所に。一村笹の茂みよりやあく忠文。詞在所を捜す迄もなく依藤太秀郷是に在り。若黨二人左右に立てつと寄つて。忠文が元首抑へて捻付くる。地此の勢ひに郎黨ども。フシ行き方知らず落失せけり。詞其の町人に仔細あり。荷持め共に逃すなど。下知すれば若黨共に腕取つて引据ゆる。藤太忠文が顔を打守り。エ、御邊は不所存千萬。此の秀郷には如何なる猜みあればとて。將門に降參し朝家に敵し奉らんとは。弓取の道に外れたる不忠の侍。地只

今、鶴の詞にて將門七人の因縁明かに聞くからは。押寄せて討取るは案の内。御邊昔の好み助けても遣り度いが。詞勢多の橋の百足遣ひ。又役にも立たぬ戯談かはば忙しい中邪魔になる。今時明けて其方も此方も隙にせんと。引起して續けさまに三刀刺いてがはと投げ。地長が側に立寄り給へば。南無三寶是へお銚子が廻つた。もうたべた同然御免あれとぞ泣き居たる。詞いやく己れは殺さず。今度忠文と同道したる仔細を語れと宣へば。ア、申しましょく。我等は都九條の遊女屋大文字の長と申す者。忠文様の仰には。錦木の内侍を奪ひ取る事叶はず。その代りに傾城の風俗品々一通り繪に寫し。傾城掛物と名付け將門のお目につけ。御機嫌取り度き願ひなり。地拙者に罷下り其の繪解致せとの御意によつてお供を仕る。詞則ちあの荷物に掛物もあるからは。微塵も嘘は申さずと、フシ泣き顔してぞ申しける。地秀郷大きに悦喜あり。幸は友を引く日本一の吉左右。然らば汝忠文が使になり。忠文は風氣によつて道中に逗留し。我ばかり参りしと辯舌に任せて言ひ入れなば。遊興好む將門掛物を見物せん。傾城傾國の繪姿繪解に心を奪はれ。戯れ浮かる、最中に八方より押寄せ。易々と討取るべし。其の時は己れにも御褒美申し與ふべし。何にても願あらば言ひ聞かせよと宣へば。詞イヤ深き願ひも候はず。

龍宮より受け給ふ。取つてもく跡の減らぬ俵有りと承る。御褒美にはたつた三十日俵御貸し下されば。地二三萬石量り出し。跡は返進致さんと俵に寄せしよねの色。詞色どる掛物の上下。勇ひて 三重

けいせい掛物揃

フシ 都の色を。東路に。地皆寫し繪と奏すれば。親王御覽あるべしと。御簾の前に掛け渡す心も。詞もハルフシ及ばれず。先づ一番に掛けたるは十ばかりなる這ひ出の子。出山の釋迦頭をぞ掛けにける。此の禿と申すは常貧大王の御子質札太子と申せしが。十二より賣られ来て女郎さん達の手入れにて。あら、遣手に宮仕へ。もみち袋に洗粉に。難行苦行研ぎ磨き。三十二相の御新造。丸十年の初花と。一切衆生なづませて。一佛上々太夫さん、フシとろりの。目許に釣られつゝ。十悪五逆のうつ人。石部金吉に至る迄。ほつかりはまつて何の事一夜買はずに置かうかと。忝も吝嗇坊。戸棚を明けさせ給へば。知るも知らぬも一同に。皆巾着をぞ。搜しける。第二番の掛物はしんぞ逢ふ夜の緋縮緬。龍紋の幅廣を戀に解いたる勢ひなり。そもく彼の里と申すは其の廣さ方四町。色どる籬門並をたまくと、覗き廻るうろくも。忽ちに粹と化して。流

れの君に浮かるゝ故に。瓢箪町とは名付けたらされば借上を鼻にかけ。紋目を跡から逃げさんすは偏に此の瓢箪にて鯨を押ゆる如くなれば。コハリやあ嘘つかぬ殿達は。取分げ。いとしい思ひますとの御事なり。第三番にはしやうくの夜の間夫。三番太鼓ほのくくとせきてやもじが逢はせぬに。引舟かへる折柄に。袖から落つる隠し文嚙んで捨てたる口許は。聞きしにまさる鐵漿の。フシ筆をつくして見えにけり。第四番に掛けたるは。己が手でだのいたづらで。身は北向に下けられて破れ暖簾破れ窓。憂きふししけき呉竹の。煙管くはへて。のら。くくと立出で見れば油火や。炭火のかげに焦け付きしふすほり顔は恥かしや。贅がいやさにしやうくの。客を振る日も振らぬ日も。ハツミ見世をさす日も。フシさゝぬ日も。刻煙草の通帳。紙屑賣りて身上がりし。ウタヒ世間さばきし其の報い。あはれけに古へは。花のはきゝとナホス言はれし身と人の思はぬ我を張りて。揚屋々々の付け届け。師走節季の断りもはや目の。前とぞ。フシ見えにける。舞扱又五番には。園の中より名を取りてわしは梅とぞ成りにける。床待つ迄と貸す座敷。幫間に移す。目遣ひは譯知り。顔の風情なり。六番には我が水あけの昔より。ぎえんの御かどと逢ひそめて。正月買ひの贈り物。江戸の近江が繼ぎ棹で。朝酒見事盃の出口の茶屋や昇夫に

も。紙を花とぞ名づけたる。長持あけて夜着布團。フシ褌とくを打重ね。明日も續けてかはすらん。扱七番には何の花より。松づくし大野蕪に半太夫露おひ。まなき君ならば。ちよつと柏木小さん呼びましやハツミお立ちなされませは。しなや。忍び逢ふ夜は大門の明くを待つ間もフシ。三千年に。彼の御意見も不首尾をも。酒に忘るゝ人間の。オクリくすの。野風の寒き夜は。乾き上戸のいらち酒飲んで差せよと鳴く蟲も。咽にあるかと疑はれ。フシ酔はぬ風情をつくしけり。扱は血判の神おろし。彼の假名書きの筆の跡オクリふじを。とはせの。一包。フシ二階の上を。見上ぐれば。鹿子斑に降る一步。跡をいたまぬ面影は。三國一の大盡と言はれしも理なり。格子叩く相圖にて。門立ち見れば花崎や。フシ吾妻紫さらりと。井筒奥州連れ立つて清見がせきぞ八文字。お杉が襟のむらちぎれ繻子の帯をや貰ふらん。七介六介かきつれて。フシ運ぶ長持忙はし。コハリ九番目の口説には。炬燵の下に寝るとらが。踏みこかされて灰まぶれ。身震ひしたる有様は。けに張強き全盛なり。扱十番には是も先づ。始めの内は手かけにて。後には奥様と言ひし人。忝くも借銭にて摺み出すと承る。蓬萊の下屋敷なり錢や小判の其の中に。群れ居て遊ぶ女夫あひ。渚の龜にたはふれて。つい孕ませて姫小松。母屋はそれに譲らん四海揚

錢納まりて。枝を鳴らさぬ松と梅。いとしき例是なるわと。ちかみ、御見待ちまする扱。フシ目出度くかしくぞ目出たけれ。地かゝる所に八方より攻鼓攻太鼓。天地も響くばかりにて関をどつとぞ上げたりける。城中には酒宴真最中馬よ弓よと舞いて。関を合する者もなく上を下へと返す中にも。御厨の三郎大昔原の四郎大手の門に進み出で。詞只今寄せたるは俵藤太秀郷な。聞く程もなきさもしき軍の仕様かな。数万騎の大將蒙り討手に來ると聞きし故。今日や寄する今宵や寄すると待ちたりしに。平親王の御威勢に恐れ此處彼處と忍び隠れ。時こそあれ御酒宴の折柄推參千萬誰かある。地一々に首取つて御酒宴の御看仕れと氣色込うで立つたる處に。詞公連が妻の清瀧花やかに出立つて。ヤア道知らずの將門。天の責を受くるは今の事と言ひ置きし夫の未來記。思へばいたはしく別れの涙乾く間もなく。せめて宗徒の郎黨一人討つて地手向けんと願ひしに。二人迄は過分の至り餘さじ物と長刀取延べ。弓手がかり馬手ばらひ、フシ受けつ開いつ戦ひしが。地一人の女業二人の敵に切立てられ。既に危く見えし所に。鐵銅丸一文字に飛んでかゝりかい潜りく。敵の打物はらりくくと癩ぎ落し。二人の上帶兩手に搦んで突出し。詞これ女中へ向つて男二人の進上は。無遠慮ながらサア遊ばせと打笑ふ。イヤ二人が三

人でも後家の身には憚なし。地忝しと飛びかゝりはらりくと首打落し。城中深く切つて入る勝に乗つたる寄手の軍兵。かけ入りく息をもつかず花をみ。だして三重、戦ひける。地秀郷は弓と矢番ひ將門を只一矢と。隙間く物あひに心を配つて見給へば。遙か御簾の奥深く七人の姿ちらりと。火影に透きてほの見えたり。地元より秀郷二つの眼に四つの瞳天眼通を得給へば。蟬谷に脈あるを是ぞ誠の將門と。矢壺を定めかなぐり放しに放つ矢が。御簾を射抜き手應へしてはつしと中ると覚えしが。地ありつる鬮體は虚空より我が目を返せ耳返せ。我が舌返せ鼻返せと生きたる人の物いふ如く。喚いて入れば忽ちに。フシ簾中騒ぎ鳴動して。地平親王將門額に矢を受けながら。鬮體をひつ掴み庭上に躍り出で。詞エ、く無念や腹立や我日本を覆し。六十餘州の大王と仰がれんと。死したる親の六根を守りとなし。多身通を行ひ七人の形を見せけるに。恨めしき親の懺悔によつて本體を見付けられ。鏑矢にかゝりし口惜しさよ。善因は善果となり悪因は悪の果を引けり。我が悪は親の悪報いも親の報いなれば。地親にはあらで七世の敵今こそ仇を報ずれと。立上つて鬮體微塵になれと踏碎き。詞神武以來我が朝にたんだ一人の曲者。平親王將門が首取る者は誰ならん。地サア來いと地に跨り天を睨んでつつ立つ所を。

ヲ、將門が首取る者は俵藤大秀郷と。走りかゝつて打落す。フシ頭は雲井に分け入つて。朝敵滅び君が代は文を以て民を撫で武を以て邪を防ぐ。武州神田の明神と神に齋ひ世を祝ひ。國を祝ひ名を祝ひ君を祝ひ身を祝ふ。其の悦びの末長き。竹の萬代松の千代變らぬ。宿とぞ榮えける。

(奥書缺)

弘徽殿鶉羽産家

(七行九十丁本・十一行卅二丁本参照)
近松門左衛門作

序詞 佳人盡く晨粧を飾り。魏宮鐘動いて遊子猶殘月に行く。九重五舎の后町。關々と相和らぎ。羽を竝ぶる水鳥は君子の好き迷。爰にたぐへて我が國の天津日嗣六十五代。花山院の御在位のオロシへ都ぞ花の。都なる。地君立坊の始より。後宮の佳麗多き中に。正二位爲光が娘を弘徽殿に召入れて。芙蓉帳の内に比翼の衾を重ね給ひ。又官務忠平が娘を藤壺にすゑ置て。珠箔銀屏の陰に連理の枕を並べ給へば。弘徽殿も藤壺も優劣なき御寵愛。御情に隔てなく月日も同じ相孕み。帯の祝に青梅も共に。擇食のフシ六月稜。此の神事の序を以て二人の女御の御懐胎。男女の間を考へ。殊には變成男子の懇祈を致すべしと。弘徽殿の祈の師は當時天文に名を得たる蘆屋道満。無官なれども内縁の沙汰によつて相勤む。扱藤壺の祈は陰陽頭阿倍晴明。火水を改め齋して加茂の河瀬に夏越の稜。二人の女御の御車岸を隔てて遣りつゞけ女中ばかりの

忍びのお供。あはれこなたを若宮こなたが皇子であれかしと。聲もそよ／＼風そよぐ。櫛の小川の夕暮はオクリ禊ぞ。夏のしるしなる。地兩博上は兩壇に注連引廻し齋申立て。道満は冥道供一字金輪の法を修す。晴明は大元三種の大稜。北斗七星元亨利貞四徳の法。行者は無雙修法は無上勝劣更になかりし時。道満幣串逆手に取り瀬見の小川を一文字。横に當てて切りければ川水二つにさつと別れ。上と下とへ流れしは、フシ絹を断つたる如くなり。道満いかめしげに御覽候へ。祈の驗川水左右へ流るゝは。弘徽殿の御懷妊皇子誕生疑なし。如何に晴明。御邊が祈何の驗も見えざるは。藤壺の懷妊は姫宮に極つたり壇をさがれと言ひければ。晴明ちつとも臆せず、ヤさは言はれず。御分が祈る川水中断れて兩方へ別るゝは。これ坤の卦の形。晴明が祈る川水直に離れず流るゝは乾の卦の形。所謂乾道は男となり坤道は女となる。天地未分の一大極の妙理誰か是を争はん。地然れば御分が祈る弘徽殿は姫宮御懷妊。我が祈る藤壺は遣に皇子御懷妊。正しき徴と幣押取り。投ぐれば幣串川瀬に立ちくる／＼と纏れて。幣串變じて玉の冠。あり／＼と南面して、フシ皇子の。相をぞ現じける。地負けまじものと道満續いて投ぐる幣串。同じく川瀬に立ち乍ら幣帛長く打ちしなへ。水の縁の振分髪女の鬘と。現じたり。地す

は弘徽殿の懷妊は姫宮なりとひそめければ。道満荷つて葎高數珠七鬼神の索にかけて、地責め伏せ／＼祈り祈られ。コハリ二本の幣帛はつしと打てばさつと散り揉合ひ打合ひ互に怒り。地大幣の波の白木綿打亂れ。流るゝ幣に道満はフシ猶引添うて祈り行く。晴明聲をあけ乾に乾を重ねるは。亢龍悔あり藤壺の御身過あらん。地危し／＼。慎み給へと言ひ捨ててオクリ幣帛へ慕うて走り行くフシけに禍は。地下女兩方共にぎしみ合ひ。ヤアあれは誰が車。只今時めく弘徽殿の御車に。立並べしは慮外なり。あれ引退けよと浮氣ざかりのお仲居腰元。牛も車もいはせばこそゑいや。／＼と押遣つたり。地藤壺の乳兄弟清瀧といふ男勝り。詞負けてるやるな女房達あの車押割つて。地お車やれと下女婢女牛追つ立てて轟かす。弘徽殿のお腰元因幡といふ我武者もの。飛懸つて牛の鼻づら轆を掴んで押戻す。遣れば抑へ戻せば遣る牛の啼く聲ゑいやや。因幡は汗に手の内滑り足を躓き横投けに。どうと伏したる腰骨に遣りかけたる車の轍。胴中さつと敷き断られ。血煙散つてわつとばかり、フシ即時に空しく成つてけり。弘徽殿の伯父按察使の大將早岑。何處にか忍びけん大きに怒つてかけ付け。皇子懷妊の弘徽殿の御車上へ慮外も同然。地其の女遁すなと清瀧を搦めさせ。車打割り藤壺を引摺り出せと特く所へ。地糺の森より放免雜

色具したる勇士つと出で。ヤア、粗忽なり早岑公。某は源の頼光が家臣渡邊の綱。是程の大禮には。武家に警固仰付けらるゝ前例を背き。各ばかりの御計らひはお公家方の私。主人頼光帝都守護の當職ゆゑ。密に某を越されし所案に違はず此の騒動。兩方御懷妊の女御は同じ位。藤壺に慮外あれば弘徽殿にも慮外ありいづれ理非はつけ難し。但し清瀧を搦められしは因幡が死したる下手人な。然らば先づ彼が母。則ち藤壺のお乳の人治部卿にきつと預け置き。重ねて公家武家詮議の上の御沙汰たるべし。サア此の上にも御非難あらば承らんと言ひければ。大將不興げに。ム、然らば公家武家立合の番をせさすべし。地扱兩方同じ懷胎の女御大内一所のお住居は。下女め等迄か猜み合ひ禁中騒動の基。誕生迄は藤壺是も乳人に預け置く。詞必ずく、參内無用。なんと渡邊。大内の掟いふ事あらば差出て見ぬかと。睨めつくれば渡邊しさつて。侍風情の我等上をはからふには候はず。主人の命を蒙るからは綱が詞は頼光が詞。總じて文を守る。公家方は風儀優しく詩歌管絃の御嗜が肝要。是に違ふ無道人は如何なる高位高官も。地きつといましめ制するは武家の役に候と。前後を抑へて立歸る。文武兩輪の小車もめぐる。日影や三重、西の京、ギン壬生は木立も。物ふりて。何にか、らん藤壺の。父母の形見の、フシ古館、地

左大將が計らひにて參内叶はぬ里住居。乳兄弟の清瀧はスエテ庭の枯木に猿縛り。ウタヒ壬生寺の入相も。フシ姿の花や散すらん。地藤壺堪へ兼ね走寄りなういまくしい此の有様。よし自らが誤にて女御の位を追下され。憂き目に逢はば逢ふ迄よ。繩を解かんと寄り給へばア、氣弱な上藤様。詞其の美しいお心中故弘徽殿が我儘。殊に伯父の左大將我が姪一人女御に立て。己れが威勢を振はんと占屋算の。道満迄ぐるになつてなす業。御一門とてもなくお力になる。母治部卿は言ひがひなき年寄。エ、かくあらうと知るならば疾にも夫持たうもの。お身になる者がないこれ。賢女だても事による弘徽殿に負けまいと。お心に我を持つて科を私一人に負け。切られうが撲たれうが振捨てて參内なされ。お位は王様でも明けていへばお前の男。恪氣嫉妬に法度はなし生き乍ら蛇になつて。觸體に角の生えた習ひもある。角こそ生えずとせめて瘤でも生やさうと思召せ。エ、はがい、上藤やと。スエテ身を顛して泣きければ。詞否々見かけこそぐつしやり。人こそ知らね心の鱗玉體に纏ひ付き。弘徽殿に喰付いても恪氣つくには負けぬ負けぬと。地思はず高聲洩れ聞えてや番所より。あれく人かと藤壺はフシ隠れて奥に入り給ふ。地公家方の當番平次兵衛盛重聲を怒らし。ヤア、不敵なる囚人。公家武家立合の番をも恐れず

高聲に上の御噂。所詮物を言はする故と。地袖引きちぎり清瀧が口。捻込み／＼股立紐にてくるくる巻きて猿轡。繩を枝に釣上げられ。毘にかゝりし狩場の鳥。フシ忍び音に鳴く如くなり。地武家方の番つと出で。詞これ／＼盛重殿とやら今日相番ながらしみ／＼とも御意得ず。我等は源氏の被官相模の國の住人。小餘綾新左衛門尉景春と申す者。四五日以前に参勤の所主人頼光此の番を申し付けらるる。長道中の疲勞と申し上方無案内の我等。大事の御番と辭退せしに女中といひ輕き科。嚴しく守るに及ばず。捨身などなき様にいたはり勤めよとの事なるに。拷問同然の縛。心得難く候といふ。けに尤の御不審。公家方武家方立合の番。御分は頼光の下知を受けられよ。此の平次兵衛は公家方の仰に任せ候と。地言へば小餘綾東武士。大内の作法さもこそと。フシ打連れ番所に入りけり。地清瀧は爪先も着かぬばかりに吊上げられ。息も通はぬ縛は。左大將めが計らひ藤壺様へのあたりよな。詞たとへ手足を挽がれてもお身代りと思へば厭はぬ。エ、凡夫の目に見えぬとて。佛神無いと思ふかや。地心の底迄見通しの天に目もあり耳もある。世の中の善惡を見分け聞分け給はぬかと。見上ぐる月も山の端に。フシはや入り。果てて更けにけり。フシ燈火細き。お寢間の内。お側には我が母の八十に餘る治部卿何を力に

おいとしやと。涙も共にはらく／＼とスエテ桐の葉落ちて飛ぶ螢。思ひ悄然たる深更に。地廊下の障子に影映り忍びの者と思しき二人。拔足して藤壺の寢所をさして窺ひ寄る。追つ續いて直垂の袖高結び。拔刀提けそり／＼と忍び込む。影はあれ／＼南無三寶すは事こそ。よい／＼此の清瀧が見付けしもの汝生けて置かうかと。心は先へ我が身を忘れ駈出でん。／＼と身を揉んでハアさうぢや。身は縛られて居るものをなう御番衆。／＼と叫んでも聲立たず忍びは寢所に早入つたり。エ、お枕長刀あるものを母上は寢入つてか。地なんの事縛繩引きちぎらんと捻ぢつ。しやくつつ我が力。我が腕首に喰入つて心ばかりに繋ぎ犬。フシ柱をめぐるに異らず。地寢間に太刀音はた／＼／＼。血は飛んでさつ／＼と紅葉を盡くが如くなり。障子押開け母治部卿。詞何者か忍び入り藤壺様を切殺し。地妾も深手とばかりにてかつばと伏して絶入れば。地狼藉者も逃げ散る影館には下女ばかり。あるにかひなき牛童あわて騒いで番所を叩き。詞狼藉者が忍び入り。藤壺様とお乳の人治部卿殿を殺した。先づ此の通り頼光様へ注進といひ捨ててかけ出す。地小餘綾は旅の疲寝耳にはつと枕を上げ。見れば相番盛重も前後も知らず高敷。詞これ平次兵衛殿。狼藉者が藤壺と。お乳の人を切つたるとや起き合ひ給へと揺り起され。地心得たりと枕の

刀おつ取つて奥を指して走り入る。小餘綾も刀取つて脇挟み股立かき上げ。駈出でんと我が身を見ればこは如何に。指いたる刀は鞘ばかり弓矢八幡こりやどうぢや。若し相番と替りしかと見れどもく磯千鳥の。毛彫の金物指料の鞘に極つたり。ハツしなしたり。狼藉者の仕業か。遠國武士に恥與へんと意地わる者の猜みかと。地胸も騒ぎ前後を忘じ天を仰ぎ地を走り。奥の一間にかけ込んで藤壺の死骸を見れば。刺捨てたる止めの刀白銀造りの三枚鏝。ワアウ是が身が刀と。調拔かんとせしがいや。検使も待たず抜取つて。血刀詮議に言譯も卑怯至極。此の儘置いては斬手我に極つて。罪科遁れず命を失ふ。又某が言譯立ち斬手外にある時は。武士の魂たる枕の刀取るをも知らぬ痴漢と。小餘綾新左衛門尉景春が武名長く朽ち果つる。命を捨てうか名を捨てうか。地一世の不覺一期の浮沈とやせんかくやと心もくらみ。我が身で見えぬ我が身の料簡情ある武士の。料簡あらば借り度いエ、武運に盡きし口惜しやと。拳を握り牙を噛みスエテ無念泣きにぞ泣きわたる。地門外に人馬の聲御檢使と呼ばはつて。坂田の公時真先に碓井の貞光卜部の季武。高提灯差上げさせ。フツツまりに目を配り。地三人立寄り死骸を見届け。季武止めをぐつと抜き。調公時貞光これ見られよ。刃の光切れ口天晴銘の物と見え。

目貫金物慥に武士の指料。是程の刀指す者が止めを刺し捨て。刀を置いて逃げたるは狼狽者。察するに人の刀を盗んで斬つたるに紛なし。然れば切手は腰抜け盗まれ手は日本一の。うつけ侍と見え申すと。言へば貞光打領き。これ御番衆。堀を乗つたる跡もあり斯程になる迄知らぬとは。地油断々々と言ひければ平次兵衛つと出で。調いや我々は繩付清瀧が番は承る。藤壺の番は仕らす。なう小餘綾殿。御分は腰には鞘ばかり見えたるが。刀の身は何とせられしぞ。チ、あの止めこそ身が刀よ。ム、扱は御邊が斬つたよな。ハテ斬る斬らぬ詮議は檢使のお役。刀の主は此の小餘綾景春と地いふ所を。公時飛びかかり取つて引つ伏せ高手小手に締めつくる。兩人取付き實否も糺さず大事の侍。例の荒氣が無分別と制すれば。調いや無分別か上分別か仕上を見よ。こりや小餘綾。御邊が斬つたに極れば罪科のがれず命が廢る。刀は我が刀で。斬らぬとの分疏立てば命は助かり名が廢る。命を捨てるか名を捨てるか。命が惜しくば解いてやろ名が惜しくば繩か。れ。地心次第と言ひけれ小餘綾大聲上げて。ハア、調天晴公時。情ある詮議の仕やう過分。如何にも仔細あつて藤壺治部卿は此の小餘綾が害したり。地いかなる罪にも行はれよ。腰刀盗まる、狼狽た武士でない。本國に一子もあり忤が名をも腐さぬは。公

時のお情と莞爾と笑へば公時いきつて。チ、詞氣味のよい白狀武士はさうぢや。出来したく。なんと季武貞光。白狀させた公時が分別我を折つたか。地まだ能い分別見せうかと清瀧が縛捻切りく。心のまゝに死骸を葬り後世弔へと引立つる。清瀧悦び。詞ヤイ抜刀の影法師は己れであつたな。こゝな平次兵衛に猿轡かけられて。聲は立たずお主と母とをやみくくと斬らせた。地拳を一つと飛びかゝる公時抑へて其の恨は私。もう是からは天下の囚人ならぬく。地體こいつが猿轡かけた故。其の拳で彼奴が面くらはせいと。言へば平次大きに怒り。詞ヤア公時忝くも左大將早岑公の仰を受けたる。平次兵衛盛重知らぬかと反を打つ。ヤアいたいけな事よ。うするなあ。公時に反打つて何とせうと思ふ。己れ武家の侍なれば仕様もある奴。サア清瀧に撲たるゝか。それが否なら公時が此の拳を戴くか。たつた一つで素頭はり砕いてくれんと。地睥め付けられて顛ひく。顔差上ぐれば清瀧よう猿轡かけをつた。覺えくされくくと握拳二三十。まだ所望ま一つか。是で二つまた所望。三つ眉間に四つ横面。五ついき額六つ無性な大黒舞。七つ繩付引立てて御館を指してぞ。三重へ立初むる。フシ世は秋風に。時ならぬ。弘徽殿の軒端の松。枯れたる藤の一夜が中に。花咲き亂れ春にも優る濃紫。白妙色を争へば雲かと見ゆ

る雲の上。殿上人上藤達是には歌の御會もがな。管絃の御遊もあれかしとスエテすゝめさゝめき給ひしが。地如何はしけん弘徽殿ぞつと寒氣の瘧。肌熱して苦み給へば。地お脈を伺ふ御典藥。君も行幸ましくして綸言汗の匙加減。中を補ふ人蔘も。フシ醫者も心を刻みけり。地左大將早岑は藤壺の最期の次第。態と包んで奏聞せず。疑もなき藤壺の怨念なりと恐ろしく。詞御病氣の體残る暑さの御痛みとは見え候へども。世に勝れし御寵愛人の妬み。此の時の邪氣。虚に乗ずると承る。地廣屋の道満を召して護身の加持。申し付け候はんと。フシ御前をこそ立ちにけれ。地其の時帝も御心に思ししめたる二思ひ。彼方を思へば此方の恨み此方を思へば藤壺がうら紫に咲く藤の。名の花色もなつかしと立寄り給へば弘徽殿。ワキ自らとても隔てなく共に馴れたる雲の上。君が所縁は紫の草の袂も我が袖も。露ふれそめて立寄れば。此の花恨みたる氣色にて。風も吹かぬに靡きのき。立退けば。フシ又元の如し。二人爰を以て遍昭も。フシ餘所に見て歸らん。人に藤の花。匂ひまつはれよ。纏へとよみし言の葉も。人の姿も。フシなつかしや。シテいや懐しとは偽りの。人の心の裏表。裏葉を見せて藤壺が。スエテ恨み晴れんと來りたり。忘れもやらず水無月の。賀茂の禊の車争ひ。御身も思ひしら露の所隔てて立竝ぶる。物見車を

如何なれば。君が情を弘微殿の御車とて人を拂ひ。侮られたる自らが。誑身は小車のやる方もなしと答へて立て置きたる。車の前後にばつと寄つて。人々轅に取付きつゝ後乗の奥に。押遣られて物見車の力もなき身の程を。ナホス思ひ知らすべし。ワキ詞あら心得すや。物見車の下簾下と下との争は。夢にも我は白糸の筋なき事な恨み給ひそ。シテ詞いや憂きには堪へぬ我が命。刃にかけしは誰がなす業ぞ。ワキ地扱は此の世に亡き魂かと。怖れ驚く枕がみ。シテ恐るゝ君もワギ。うかりし身の仇人も。二人共にしがらむ花葛刃にかゝる藤葛からみくゝて。フシいざ連れ行かん。シテ誑戀には人目も恥をも。戀には人目も恥をも。思ひ思はず只身一つの妬みの罪や。夜な夜なの引。歌浮名を包むも戀しき君故。提子の水の。焰となり。身は陽炎のあるかなき。春秋知らぬ。夏の蟬。昨日の花は今日の夢。身に驚かぬ悔しやな引。世のうさに。人のつらさの。猶添ひて。浮みもやらぬ妄執の。フシ藤の裏葉に。木隠れて。スエカ、リ再び現れ。フシ来るぞや。地あしかれと思はぬ山の峯にだに。歎生ふなり。フシ歎生ふなり。人の歎は生ふなりとよ。思ひ出づれば。フシ古への。地蘭省の花の時。共に交せし盃も蘆山の雨と降る涙。袖に積りの海士ならば恨むとだにも。フシ知らすべき。使をとづる。八重葎。地茂れる宿におし。押し籠められて

あつとばかりの劍の影。光のまにも忘れぬよなう。誑詞傳へ聞く唐土の。秦の始皇の御顔に。地巫山の神女が吐きかけし。唾の花の。フシ仇心。戀には王位も恐れまじ。我は賤しく人数ならぬ蟲ともなつて野原に棲まん。其の野は如何に人は仇し野浮世の嵯峨野。裳裾に縋り袂を穿ち。ハツミフシ。飛付きく飛びかゝり。コハリ噴患の刃は蠶螂機織。騒きりはたりちやう。きりはたりちやう。つゞりさせてふきりくゝす。鯛にくや我ならで。誰まつ蟲の聲りんくゝりんくゝとして怒の涙。フシ欄干たり。シテア、腹立や生きても死しても恨はつきす弘微殿。につくし憎し此の黒髪を手にからまいて打つや宇津の山。夢か現か死霊の形玉殿。玉階踏みとゞろかしフシ。御殿頻りに鳴動す。キ地蘆屋の道満コハリ数珠おし揉んで。唵呼魯々々聞茶利摩當羯くりかけ。く祈りわけたる聲の中。シテあら事をかし如何に道満。汝にこそ恨あれ。いで物見せんと梢に登るとナホス地見えけるが。二人芙蓉の顔容柳の眉變じて毒蛇の眼の光。二十尋餘りに藤葛花は鱗と忽に。雲に聳え風を捲き。道満目がけ追廻す恨の念力。三重。恐しき地さしもの道満行力盡き。フシ命からく逃出づる。地則ち勅使立つて阿倍の晴明宣旨に任せ。即座の祕法祕密の加持。一色五色の幣を振立て。コハリ宗廟社稷の天神地神明王部天童部。九曜七星二十八宿

五行の靈。三十七禽驚かし奉り祈り祈られ怨靈怒りの力も失せ。恐ろしや幣に。卅番神まし／＼て。ナホス。魍魎鬼神は穢はし出でよ。／＼と責め給ふぞや。よし／＼今は敵はずとも。又立返る藤波の終には思ひ知らせんと。夕べの藤に夕嵐ばう。／＼。どう／＼さつ／＼と形は失せて松青く。夕陽西に紅の。フシ空明。々と晴れにけり。地猶晴明に宣旨あり靈化の道切御殿の清め。玉體鎮護の御守十二の御門に十二の札。南殿中殿温明殿殿上秋の戸臺盤所。大歌所御書所。十二の局の隈々迄残らず。餘さず。幣帛取つて振立て／＼。拂ひ清め奉れば目に見ぬ毒氣不正の邪氣。止まる方もあらたなる晴明が白木綿に。道滿が赤恥を格別不思議の行力やと御褒美。賜り出でにけり。

第二

地夜々は我もこがれて人戀ふる。衛士の又五郎義長といふ者あり。下郎には似ぬ心ざま清瀧に思ひをかけ。大内のお暇申し母治部卿に奉公も。戀のためとて尻がるに立居にちよつと手をしめつ。身振で知らせ目で知らす心の奥手穂にあらはれて。慮外者として追出され奉公も構はれ。浮世を忍ぶ菅笠や。フシ近江あたりを彷徨ひしが。故主治部卿主の主たる藤壺。敢なき最期と

隠れなく。さぞ清瀧の歎の程。悼しくゆかしく戀といふはこゝらぞと都に歸り。便の風も懐しく毎日洛中洛外を。一跨ぎにする又五郎が。フシ心の中ぞやるせなき。地折しも左大将早岑公には庭普請。若しや清瀧の行方聞出すしるべもと。數多入込む人足と共に雇はれ今日も亦。館に來れば雜掌黒壁權の太夫鼻をしかめ。詞ヤアうぬめは横着者。昨日も今日も晝から來て取る賃は一日分。急ぎの御普請人が足らぬ。はや／＼お庭へ廻れ／＼と叱られ。御尤では御座れども。夜の商賣が過ぎましてどうでも朝寢致します。なんぢや夜の商賣とは。飲み込まぬ／＼。いやいや夜の商賣とお氣遣は無いもの。私は女房も持たず裏長屋の一人住。お聞きなされ東隣に此の頃若い女房呼ぶ。西隣には餘所の乳母が男持つて宿這入り。壁一重後は奉公人の出合宿。まア向ひは後家のお針。絹屋の息子が泊りに來る。すは夜半の鐘がごとんと鳴り。世間の人は静つてこちの近所は商賣最中。地三方四方から責めかけては。五戒を保つ長老でも。朝寢せねば叶はぬとオケリ笑はせ／＼てこそ入りにけれ。地時に蘆屋の道滿參上し。取次かくと披露すれば左大将。寢殿に立出でて是へ／＼と招きける。詞道滿膝元にすり寄つて。扱も弘徽殿の御座なさる。白河のお茶屋へ参りお目にかゝり。尤御養生の爲とは申し乍ら。京離れたる山際朝夕の御

寂しき。結句御養生にもなるまじと伯父君様にも御案じ。殊に斯様の所には。藤壺の怨念又來る事も候べし。平に左大將公の御館へ移り給へと。色々御意見申せども。地いやく伯父姪一所にゐて。窮屈耐へる程なれば内裏にゐて養生する。藤壺の怨靈も我が身に曇なき故。晴明が祈の驗具の後は見え給はず。帝様も夜なく御見廻として忍びの行幸。別に淋しい事もなし。伯父御の方はいやくと御承引候はず。詞それ故某才覺にて。清所の瓜茄子の類。魂を入れよくよく加持し歸りしが。地今宵夜更けて色々の形現れなば。夜の明くるを待兼ねて。明日是へ御遷りは目前。フシ御安堵。あれとぞ申しける。地先づ以て大儀さり乍らそれ迄もなく。屈竟の相談ありと近く寄つて小聲になり。詞尤弘徽殿御寵愛と雖も。色好みの帝如何なる者にも御心移り。若し脇腹に皇子誕生などある時は。我が本望は達し難し屈竟とは茲の事。弘徽殿見廻のため夜更けて白河へ行幸あるとは。誠に天の與を取らざれば却て其の罪を受け。時到るを行はざれば却て其の殃を受くるといふ。地途中に待伏せ密に害し奉らば。脇腹の障なく弘徽殿の誕生。皇子ならば勿論姫宮ならば女帝と仰ぎ。女御は國母我は外戚の權を執り。萬機の政務心のまゝ。日本を掌に廻さんと思ふは如何にと叫べば。詞道滿席を打つて。ハア、思案もあれば

あるもの。なに此の上の候べき。地三百六十四爻の占形時の一字につめたり。時刻移さず今宵思召し立ち給へ。詞扱討手は誰とか思召す。ナ、それも思案我を折らせう。地それく今來たる人足。是へ召せと呼出せば又五郎。日傭の鉢巻お公家の冠。御免なれと揉手をして椽先に蹲へば。詞許すく近う寄れ。己れは能く見知つた面。先年節會拜賀などに陣の小庭で箒を焚きし衛士の又五郎よな。藤壺の乳兄弟清瀧に心をかけ。お暇取つて清瀧母に奉公し。主に戀する慮外者と追出されしと云事仔細あつて聞いたるが此の頃此の邊身を襲して徘徊するは。主の敵を討たんと思ふ面魂頼もしく。しつかと胸を据ゑたらば。左大將が地方人して討たせんす討つか討つか。思ひがけなき又五郎とほけ顔して。我等生れて以來。一文二文さへ打つた覚えなければども。相手によつて打つても見ましょ。先づ藤壺の敵とは何者かな斬りましたぞ。さればく。汝に語るも恨めしい。皆帝の御心より起りし事。さる女中を御寵愛その嫉妬によつて。小餘綾新左衛門といふ武士に勅諭あつて治部卿共に害せらる。それさへあるに我が姪弘徽殿。彼の女中の嫉妬にて散々煩ひ。白河の館に隠れる。地帝忍んで行幸なる是も害せんとの御巧み。我が爲には姪の敵汝が爲には主の敵。心をかけし清瀧には親の敵主の敵。彼といひ是とい

ひ帝を討たずば男ではあるまじ。地某もかゝる大事を言ひ聞かせ。討つまいといふからは汝は又此の左大將が遁されぬと。太刀引寄せれば道満も同じく柄に手をかけ。家來の雜掌青侍。氣色だつたる有様。又五郎喫驚せしがいや／＼爰は上手の入る所と。調ハア、御意迄もない事。主の敵と見るからは。帝様でも王様でも討ち兼ねは致さず。さりながら勝負ははなれ物。運つきて死したらば。又五郎は一日が百づつの軽い命。お前のお名は千萬貫に代へられず。まそつと御思案はあるまいか。ホ、よい念／＼。それにこそ祕密あれ。則ち汝を源の頼光が郎黨。渡邊でも公時でもいづれになりとも扮装せ。地頼光よりの宿直の番と宵より白河の館に入れ置くべし。帝行幸と見るならば。頼光が郎黨四天王の誰と名乗つて打ちかけよ。時には假令仕損じても。頼光が科に落ち此方の崇なし。加之我が家來、黒壁權の太夫に。腕こきの侍ども相添へ館の周圍に置くからは。仕損ずる事よもあるまじ胸を据ゑて討つ所存かと。退引させぬあたりの氣色。是非に及ばぬ一寸遁れと思ひ定め。詞エ、天晴一段の御分別。然らば拙者坂田の公時になりません。いや／＼四天王の中にも公時は強力の荒者。第一其の生白い面では公時にはうつるまい。ア、愚かな御意。夜目遠目といふ事あり。紅粉でも丹でも塗りちらし。澁面作つ

て目を見出し脰を張つて握拳。歩きやうはまづ此の通り。のつさ／＼。のつさ地／＼と踏んばちかりの又五郎。畢竟公時は仁王ぢやと合點すれば。仕損ひはござらぬ。ッシ呑込みましたと言ひければ。地テ、神妙／＼。それ／＼烏帽子装束太刀刀取らせよと。廣蓋に盛り並べさせ。詞こりや汝が身にも隠し目付數多付け置くぞ。我が前で間に合せ。道より外しだてなどするならば。汝を直に討棄と覺悟せい。扱別しての心得。今宵夜更けて様々の變化の形現るべし。必ず／＼恐るるな。皆道満が呪にて正體は瓜茄子。一々に打斬り／＼手並を見せ。弘徽殿女子どもに至る迄誠の公時と思はせ。必ず色を悟られな。地罷歸つて用意せよ急け／＼とありければ。是非にかなはず又五郎装束取つて押戴き。アウ誠身代につれる心と世話にいふも理。此の太刀刀烏帽子装束賜つて。今迄日傭の又五郎もう公時の氣になつた。いかな王でも帝でも狙ふ敵は只一人。たつた一討根筈に霰。在りあふ奴ばら胴切。縦割捻首貫き人間は朝腹。變化でも化物でも鬼神と組んで手柄がしたい。エ、鬼神と組み度い／＼と。力足をどう／＼と。どうと踏んだる其の勢頼もし／＼。口ばつかりは坂田の公時。心は鬼味憎鬼より怖き左大將。瘡の落ちたる心地にて一散。かけてぞ三重歸りける。ッ雪にはあらぬ。里の名の。白河の山寄せに弘徽

殿の下屋敷。庭に草花遣水に。寛しかけてしよろ／＼流れ。君が忍びの御幸道打渡したる岩橋も。夜の契のフシ便かや。地上藤頭大炊の局お前に出で。二三日はお薬も相應お心も軽さうなり。勿體なや帝様夜なく玉體を寢され。お徒歩で行幸なる事御身の冥加も恐ろしし。地是へお出でなさるゝは何時も易い事。一先づ大内へお歸り叡慮を休め給へば。又一つの御奉公とさま／＼諫め参らす。女御は稍御涙自らもさは思へども。悼はしや藤壺の自らが所業と。最期に思込み給ふ恨の程の恥しや。いとらしい氣立にて互に隔てず語りし中。怨靈に成る程疑はれ未來迄迷はする。女は互の身の上と。味氣なくも悼はしく今しも。涙にくらすぞや。世間では我が嫉妬ゆゑと鬼の穢にも思ふべし。詞よし人はともいへ自らが身を立てて。胎内の宮御誕生なる迄は内裏へとては歸るまじ。今日も道満が伯父様の方へ参れといふ。地うるさや辛や伯父様の。あのお心ゆるゑ我迄人にうたはるゝ。生きがひもなき我が身やと御涙にくれ給へば。大炊の局腰元中。けにお道理ことわりと。夕べ悲しき秋の日もフシ入りて程なく暮れにけり。又五郎義長は往生すくめの坂田の公時。後さがりの懸烏帽子。直垂のそば高く顔に塗つたるあかつきの。夢にも見ぬ大太刀に腰がつられて。歩めばゑじかり又五郎。若し正身の公時に出逢

はば、捨殺さるゝは定の物。外してくれんと思へども左大將の隠し目付。いづくにあるも白河を三途の川と身を顛ひ。フシやう／＼門に着きけるが。地手で敲いては公時らしうあるまいと。石を拾ひ門の扉ぐわたく／＼と打敲き。爰明け給へと呼ばはつたり。女御を始め女房たちはは何ぢやと身をすくめ。誰そと言ひ手も無き所に。以前より猶荒くぐわたく／＼。とん／＼とん明けよく／＼。地明けすば撲つてぶち崩すとん／＼とんとぞ敲きける。大炊の局こは／＼ながらそつと出で。詞女中の御殿夜夜中慌しい。名を聞かねば明けぬサア何者ぢやと咎められ。是は源の頼光の御内。四天王の随一坂田の公時。此の御殿には藤壺の怨靈に餘の化物が手傳うて。弘微殿を惱し奉る由宿直申して。變化退治仕れと主君頼光の仰を蒙り。坂田の公時公時／＼正身の。公時フシなりとぞ申しける。人々悦びサア鐵の桶が來た。御門を明けて通しませ是へ是へと請ずれば。ゆらり／＼と大跨ぎ。詞下に居つたら響きましょ。地女中方お肝潰されなとどつかとこそは坐りけれ。女御を始め女房達音に聞いたる公時と。目も離さず見給へば。詞扱珍しさうに御覽ある。山姥の子なりとて鬼の様に思召す山姥も本は人間。地産所も産家も山なれば取揚婆に事を缺き。産湯の加減しぞこなひ煤で殺さうとしたけな。其の煤でられた謂

れに面も五體も此の通りに。眞赤いな其の代りに此の腕に千人力。此の腕にも千人力小い時から山に住み。朝晩猪と相撲取り熊と腕押し仕る。其の間の慰み大木を引抜いたり。大磐石で礫打ち友達は天狗ども。羽がひを打折る毛を捲る。鼻を捻ぢて泣かす。七歳の時近江の國高懸山の鬼神を。手とらまへにして蚤殺すやうにひねり殺した此の金時。地怨靈でも變化でもあはれ出て見よかし。さはると微塵にする事今宵ばかりは氣遣なしに。御酒宴でも遊ばし。ゆるりと御寝なりませア、久しう變化に出合はぬ。一二疋撲殺し慰み度う存ずると。口に出るま力話し手柄咄に女房だち。聞及うだより彫弱な弱さうな風俗で。扱もいかい兵とッシ皆々興をさまさる。地夜もしんくと更け渡れば道満が封じ置く。呪の其の驗。家鳴り頻りにどろどろ。ゆさくと鳴渡れば女御ははつとたまぎり給ひ。女房達は氣を失ひ。なう坂田殿公時殿と逃げ惑ふ。又五郎も恐ろしさ身は顛へども齒ぎしみて大事ないく。詞皆寄つて公時にきつと取付いてるさつしやれと。地いふを誠と女房達抱きしむるを力にて。堪へても顛は止まずこれ公時殿。詞此方はいかう顛ふぞや。いや是は武者ぶるひ兵にある事。なんほ身は顛うても變化が出たらば微塵粉灰にしてやると。地詞も未だ終らぬに化したる女の影とも

なく。臍に立つたる面影に女御は猶々消入るばかり。此の公時は何處にぞ。公時くと尋ね廻れば妻戸の陰。ッシ身を縮めてぞ居たりける。詞なんの爲の宿直ぞ口程もない公時と。地恥ぢしめられて氣を取直し。アッア思ひ付いたり道満が呪これなりと。思ひ定めて見廻せば。又現るゝ變化の形右左にすぐくと三幅對の如くなり。ヤア正體は能く知つたりいでく坂田の公時が。姿を顯し見せんすと大音上げ。詞中に立つたる瓜眞顔眞桑の精と見付けたり。姫瓜にてもあらばこそつらは青瓜。地眞瓜のヨハリ粉ふき化粧見たくない。こいつが口の鐵槌を面まで塗つて初なりの。茄子の薺のまひごこなひと見たは僻目か違ひはせじ。彼奴は姿もぬらくと垣には這はず畠にはふ。不便や種をくろめても。身は切瓜の西瓜づら。蓮花割りか車切りか太刀刀にも及ばこそ。薄刃小刀かつふるひ但し又皮むかず。丸かぶりに逢ひ度いかッシ立去れやつとぞねめつくる。行術に責められし一理一氣五行の精。人の面消えくと瓜茄子の形を現じ。一度にけらくどつと笑ふ聲ばかりッシ姿は。失せて無かりけり。地女御やうく御額をあけ給へば。女房達も息出でて扱も公時お手柄く。先づ九献でも夜食でもと皆撫で擦るばかりなり。詞いやこれしきの化物いつもの事。怖いと思召す心から瓜茄子にも性根入つてあ

の通り。今の浮世に無い物は化物と正直者。とかく人が恐しい。地何事も此の公時に御任せ。御心安く御休息と申し上げれば弘徽殿。うらめしや憂き思ひある我が身なれば。弱味の靈怪と様様の。障礙のあるも、フシ理ぞや。詞ついでには夜なく、帝様忍びて是へ行幸なる。地玉飯お怪我もないやうにいよく、頼むと入り給へば。女房達もとりぐにほんにいかい兵や。此方を町家に置いたらば押入の案じはない。ちつと休んで下されと、フシ皆々奥にぞ入りにける。地又五郎は我が身ながら我が身がとんと合點いかず。左大將が恐ろしさ公時に成りは成つたれど。一天の君を討ち奉れといふ左大將。萬々利でも大悪人の朝敵。一日百づつの又五郎が命十善帝王に奉れば本望。隠し目付が見るなら見よ。跡より大勢來うば來い御味方は此の又五郎と。胸を据ゑて待つ所に。山より續く透垣の隙間を潜つて怪しき人影。是ぞ帝の忍びの行幸御衣に縫つて奏聞し。直に落し奉らんとためらふ中に御劔に手をかけ。奥を狙うてそりりと忍びの足許。やら心得すと又五郎跡に續いて拔足し。鼻息もせず窺ひ寄るオクリあやふふかりける有様なり。地既に一間に飛入らんとし給ふをしつかと抱止め。詞御聲ばし立て給ふな。十善天子の御身にて劔戟を帯し。はしたなき御有様は如何なる叡慮に候と。よく見れば戀しゆかしの清瀧な

う清瀧様か。御身は誰そ。あるにもあらぬ此の有様御見忘れは御尤。地お恥しや古への又五郎めとばかりにて。差俯向けばなう又五郎かいの。とうに女夫になつたれば。此の辛い目はせぬものを如何に母様の御機嫌違ひしとて。ようふいと出て往んでそしてそれですむ事か。言うた事は皆嘘かと、フシ戀に先立つ涙なり。地なう日本國に知れた事藤壺様と母上と。一つ刀の御最期其の敵弘徽殿を一太刀と思ひ此の有様。助太刀も討つべき其方が顔真赤いに塗りまはつて。抱止めて今の詞の末心得がたしとありければ。詞是にこそ長物語ひつつまんで申すに。弘徽殿の女御には露ちりも科はなく。伯父左大將が悪心に道満が手傳ひ。剩へ帝様此の所へ忍びの行幸。此の又五郎に坂田の公時と名乗つて害し参らせ。又其の罪を頼光にゆづらんと巧み。我等態と方人して帝も女御も助け参らせ。時節を窺ひ左大將を討取り。地お主の敵天下の敵を滅さんと一心を固めたり。お前も我等とお心を合せられよといひければ。詞エイ何いやる。心ばかり合せたともう女房持つてゐるやうなもの。いや、我等は女房持ちませぬがお前は男持つてか。エイ勿體ない男一人持ちながらなんの二人持つものぞ。其の一人の男はどれどこに。地是爰にありと抱付いて。險しき中の逢ふ瀬こそ、フシいと。身にしむ戀路なれ。地はや無動

寺の夜半の鐘聲吹下す小笹原。搔分けく主上御徒歩跣足にて。慌しけに逃入り給ひ。誰そよう誰そようと宣旨ある。御聲聞き知りあら氣遣はしと女御走り出で給ひ。調何とて義懐惟成は御供には見えざるぞ。此の山中の夜の道。犬狼の咎めもやと地兎角いたはり奉れば。帝御息つがせ給ひいやく。虎狼より恐しき源の頼光が謀叛にて。貞光季武綱保昌と名乗り。多勢にて取巻きし。三種の神器氣づかはしく。義懐惟成兩人は一先づ内裏へ歸したり。地追付け是へ寄せ來らん今は遁れん方もなし。武士の手にかゝり輕びたる名を流さんより。是迄なりと御懷の御劔に御手をかけ給へば。清瀧又五郎飛んで出でア、く直奏恐れに候へども。漫りに玉體をあやめさせ給はんは却つて後代の御恥辱。是全く頼光が謀叛に候はず。左大將早岑が逆心。我等は先年の御垣守衛士の又五郎と申す者。早岑我等を語らひ込み。坂田の公時と名乗つて害し奉れと。是非なく頼まれて候へども天命を恐れ。朝恩を重んじ此の趣を奏聞せんと存する折ふし。地此の女は夫婦の契約仕りし。藤壺の乳兄弟清瀧。参りか、つて一天の君に命を捧げん事屍の上の悦び。爰は夫婦に御任せ。山路にか、つてはやく還幸なるべしと。奏しもあへぬに早岑が雜掌。黒壁權の太夫を先として平次兵衛盛重。爰はの士卒百騎ばかり門先に

どつと取りかけ。如何に公時正しく帝は只今是へ入り給ふ。手に餘つて打兼ねるか。渡邊の綱平井の保昌加勢なりなんとく罵りける。又五郎かけ出でいやさ。これしきに加勢頼む公時にはあらねども。帝御最期に伊勢太神宮へ御暇乞の御拜あり。地暫しくと言ひ捨て立歸つてサア、。事急々存する仔細候へば御衣を脱いで清瀧に下され。主上は女御の小袖を召し。各打連れ落ちさせ給へと兎角しつらひ奉れば。萬事は汝に任ずると。女御諸共山路にかゝり落ち給ふ。御有様ぞ勿體なき。地其の際に又五郎。橡の御衣取つて清瀧に打着せ。うなづけば合點し合掌して待ちかくる。調こりやく綱保昌討奉るこれ見よと。地太刀打上けてはうんとのり。振上げてはうんとのり。二三度四五度振上げくうんというてのり返り。やれく王位は怖いもの。調眼が眩んで討たれぬ罰を受けて無駄死し。主君の忠にならぬ事其の陣引けと呼ばはれば。平次兵衛いやく。近くへ寄つて影を踏めば罰もあり。遠矢に射取れ弓よ矢よと轟けば。地清瀧も是迄なら今は遁れぬ所ぞと。口に念佛目に涙又五郎は氣を碎き。天子に命奉るといひし詞は黙止されず。堪へるだけは堪へもせい。かすり矢でも當つたらそれからそれ迄。己ればら一人も遁さじと汗を握りて立つたる所に。盛重弓矢おつ取つてト三重雨の如くに

射かけけり。フシ誠に日月。山陵を織付けたる天子の御衣。當つても射付けても矢幹碎けて飛返り。フシ岩に射着くる如くなり。地黒壁聲をかけ心得ぬ所あり。装束はづして頭を射よ。心得たりと引つくはへよつ引きひやうと放す矢が。清瀧が右の鬢さき射削つて。髪の鬢にぞ止りける。調扱こそく。装束に當らぬが頭かしらに當るは帝にあらぬ質者しぜもの。地又五郎が二心込入つて討取れと。どつとかゝればどこへく。調左大將などにそだてられ。踊り狂ふ又五郎と思ふが不覺馬鹿者ども。地假りに公時を真似たれば心もずんど公時。女どもは刀でせいと築山に飛んでおり。調山姥の息子には似合うたやうに。調山めぐり。春は梢に咲くかと待ちし。花の梢をゑいやつと捻ぢ折つて山めぐり。秋は清瀧敵を捜して首してやろと山めぐり。夫婦が眼に障るやつばら小鬢をちよつて山めぐり。めぐりくして輪廻を離れぬ猛勢の雜兵ざふひやう。切拂つた山姥が伴。我等が爲にはナホス地しうとめ。姑山姥。フシ手なみを見よとぞ笑ひける。地彼等夫婦に斬立てられ皆散々にぞ逃失せけり。中にも黒壁強力もの庭の石橋兩手に取つて打付くる。向ふさまに待ちかけ直に取つて押す程に。石橋を抱きながら仰向うよのけにつつこかさ。起きんとするを乗りかゝりゑいやゑいやと人の鎧よろい。フシ板の如くになつてけり。サア地夫婦出世の眞始まじはめ。十善天子に忠節は草の

蔭なる藤壺様。母治部卿も御悦び。先づ大内へや参らん頼光へや訴へん。それも出来すぎ出すぎたり過ぎす劣らす能い頃ころ。年もよい頃似合ひごろ。フシ頃しも秋の。地真中頃月の桂の男持つこつちは女房望月の影も。心も曇りなき縁と縁との結び合ひ。手を引き合ひて行く先は。これも男に縁深き桂の。里にぞ忍びける。

第三

次第 治まる花の都とてく風も音せぬ春べかな。地源の頼光四海の安危を掌たなごころの裡にてらし。百王の離亂りらんを心の内にかけて給ひ。二條大宮に評定所を建てさせ棘うらちの殿と名付け。式日を極め四天王の面々此の所に會合し。政事を糺ただし吟味の上にて言上すべしと。平井の保昌大目附の別當季武貞光相談役。綱金時は批判の役各心を一致にして。ウタヒ隔てぬ中の政事まつりごと。頼もしや諸共に。フシ近く居寄つて語るべし。調保昌則ち月番にてなう方々。洛中はしんく不思議の取沙汰致す由。組下の横目附聞付けて注進。彼の去々年藤壺の女御を害したる科によつて。首を刎ね獄門に曝されし小餘綾新左衛門事な。是は頼光の不吟味ゆゑ。成敗の仕損しきまひ正しく斬手きりては外にあり。不詮議ふせんぎにて科なき小餘綾を罪に沈め。本領取上げ妻子迄流浪する。頼光一代の粗忽の

處刑と京中これ沙汰と承る。聞捨に致さんか但し言上せられうや。評定あれと言ひければ。公時居丈高になり何者がさうぬかす。其の時の檢使は貞光季武加勢の役。此の公時が當番にて。眞直に白狀させ君の御前へ引出し。重々御詮議の上罪科紛れなく獄門に斬りかけた。その時分は押し黙つて。あつて過ぎた今に成りいや不詮議な處刑の。成敗の仕損ひのと風説するは。我が君か此の公時に遺恨ある奴。そいつが首引抜いて又獄門にかけてくれう。言ひ手は誰ぢや其の名を言へサア保昌と詰めかくる。扱は某評定所にて偽りを申すと思はるか。大目附の役なれば組子の横目の申す通り。洛中洛外聞き傳へ言ひ傳へ。沙汰をする程の者片はし首も抜かれまじ。心を鎮めてとつくと評定せられよといへば。ム、扱は此の公時そいつ等が首抜き兼ねうと思ふか。京中をかけ廻り風説するやつ片端。捻首にしてくれんと躍り出づれば。地季武貞光又持病の蟲が起つたか。先づ待て。くくと制すれば。詞ヲ、如何にも持病が大起りした。地首二三十引抜かねば本復せぬと駈け出づる。渡邊を荒らけ。詞狂氣したか公時。御邊がやうにするならば又洛中に言ひふらし。頼光が誤の取沙汰をいやがると。悪名の上塗君のお爲を知らぬか。地おためくと渡邊がお爲づくめのひねり鍼。ッシやうく蟲を鎮めける。地稍あつて渡邊

方々は如何思召す。閻卷の風説とて聞捨にも成り難し。詞御存じの通り一歳東寺羅生門に。鬼神棲むとの風説眞しからず。只今公時の諍の如く。保昌と某御前にて諍ひしに風説に違はず。是等を以て考ふれば世に逆心ある奴ばら。我が君を煙たがり所詮頼光の威勢を落し。世の譏たまられず遠國へ身を引かせん計略に。言ひ始めたる風説と。地思ふは如何にと言ひければ満座の人々一同に。是は黒星よき推量疑なく左大將が謀。盧屋の道滿平次兵衛盛重等が言ひはやらするに極つたり。下の詮議か言上かと。ッシとりく。評定まちくとなり。地時に渡邊つつと出で。詞其の者どもは言ふに及ばず知れた事。爰に一人の胡散者方々心はつかざるか。北面の武士羽倉伊賀之介久國が事よ。去年迄僅かなる何功もなき青侍。左大將が執成にて叡慮に叶ひ上北面の武士と經あがり。千石の領地を食む。殊に此の頃親里知れぬ女房を呼入れたると傳へ聞く。彼奴め一味の張本と覺えたり。地のびくくに捨置き蔓つては事やかまし。先づ彼等が家内へ間者を入れ。窺ひ見ばやといふより早く公時。詞いや犬も猫も入らばこそ踏ん込んで詮議せんと。飛んで出づるを又起つたか公時。證據を握つた上の事。此の渡邊が思案には。世間へは我々評定所にある體にて。保昌一人是に止め残る四人が火消の姿に出立つて。供をも連れず

一騎打ち。火の廻りの役人は禁中公家の門内へも。案内なしに出入る控人の風俗詞の端。地つまりつまりに目を付けば證據を取らぬ事あるまじ。ナ、けに屈竟の思案延引して外へ漏れ。裏をか、れば悪しかりなん時刻移さず今日直に。尤と評定所の御用長櫃押明け。急用仕立の早装束オクリ瞬く間にこそ出立つたれ。コハリ肌なめしぐまに腹巻滑熊の野袴。十王頭に筋金入つたる脚絆もみ足袋武者草鞋。から柿の裏うつたる薄柑子の革羽織。鎖く、みの上帯ゆりしめく。破綴の甲頭つらほつこみく。目ばかり光るナホス面魂。夕立晴る、雲間より、フシ星のきらめく如くなり。地いで是より手分をして。貞光は左大將が。館のめぐり夕暮の烏丸の門より入れ。季武は平次兵衛が堀のめぐり。四方八方六角通を窺ふべし。詞公時は道満が頭の鉢に。鹽付けてがりがりりと噛み砕く鹽の小路を行くべきぞ。此の渡邊は北面の羽倉伊賀之介久國が。女房ひろめの振舞。客來續くと聞く。よき折柄ござんなれ。地怪しめられな不覺を取るな。出會ふ所は羽倉が館合點か合點と。約束堅め身を固め四方に分る、四天王。須彌の四州をどうと踏んで。耳を欵そむて聞きしむる世間の弦音梓弓。引きは返さじ武士のやたけ。心ぞ、頓みある。フシ浮世といふは。女の身。北面の武士羽倉伊賀之介久國が水仕の下女。地下臺所の釜の下竹と呼ばれて

半季居の。去年の秋のフシ濡草鞋。露もまだひぬ。前垂姿襷も縁と結ほれて。長地伊賀之介が徒然の寢覺ねざめの夜這星。幾夜を重ね伊賀之介。地本妻に引上げて奥様なりの御祝儀や。氏神祇園の禮参り。殿様つけて膳するし腰元侍召具して。乗物つらせのしくと。オクリ被かぶに。位そなはりて。憎い程なる腰付をつかりたいぞや叩き度い。それは昔の火吹竹今はやさしき絲竹のフシ。お竹様とかしづかれ。地若黨が先走り奥様のお歸りと。いふ聲にお迎ひの暗くひ腰元。是はお乗物に召しもせずようお徒歩つらぶなされたと。被かぶとりく、持も囉らす。詞なう餘り俄は慙いで、うそ恥かし迷惑な。地昨日今日迄傍輩の下の下に立つた身が。假令女子の習ひ奥様と言はる、とて。身持あける氣はなけれど。一つは殿の御外聞とおとなしやかな物ごし。詞中居の玉が手を突いて。奥様へお直ちに申すは恐多い事ながら。部屋むの棹しにびらついてあるお前の古い前垂。ありや何と致いたしましよと。地いへば四邊よがしるくく。家の古老磯太夫金柑頭きんかんかみを振立て。ヤイ詞ふんばりめ。慮外なそれ何ぬかす。己れも女子の内ぢやと思ふか。先づ其の頬けたの餛飩粉うどんこがおかせ度い。地ぬか、御前へ出でをるなと。ッ叱り散ちり散ちりして入りければ。詞言はつしやるな古老殿。私もお家に季を重ね言ひ度い事をいふ故に。めつばふふたいの玉と名を取つた女子ぢや。

いかな奥様でも此方とでも變らぬ事が一つある。地雨霰雪や氷とへだつれど。解くれば同じ谷川の水。いかな逢坂の關の清水でも。谷水の鹽梅なら。フシ負けはせまいと喚きける。地伊賀之介久國祝儀の上下引繕ひ。座敷に出づれば銚子島亭。松に鶴龜竹も襦袢装ひて。萬代こめし三々九度伊賀之介盃ひかへ。詞家來の男女能く聞け。此の度此の者本妻に立てし事無念と思ふ傍輩もあるべきが。天子大臣の御母方斯様の例數知らず。それにつき物取り騙の類。知らぬ國の伯父下候。甥で候などと出て來るは此の時節。伊賀之介が妻の名の出ぬやうにと氣を付けよ。言ひ渡す事は是迄。地女どもと主従の盃々と又酌み交す竹の葉の。千秋萬歳のオクッ千箱の玉を奉る。地憂き事は世に小餘綾の磯千鳥。スエテ千鳥足なる切れ草鞋。地破れ笠きて十六七の。額の角もうすくと柄絲切れし小脇指。さすが非人の體とも見えす臺所口さし覗き。詞此の家内の何炊お竹と申す女子衆に。逢ひまし度いと言ひ入る。玉聞付けて走り出で。お竹様の仕合を早やかぎ出したか。ム、よい鼻の。定めてお竹様の甥であらう但し弟か。これ。騙いふも氣轉がある。羽倉伊賀之介様といふ武士のお家。地お竹様に逢ひだてして棒にあふが笑止など。突出されてよろくと。なう騙とは情ない其の人の言ひ付か。名は小文五と申す者。此

の聲が聞えぬかとスエテ恨み啣ちて叫ぶ聲。地奥へほのく聞ゆれば腰元は笑止がり。若し奥様に覺えがあるか覗きて御覽なされませと。いふを力に飛立つばかり物の蔭よりさし覗けば。國に残せし我が子の小文五。野山に寝たる身もしほたれ。菰を被らぬばかりなり。あれが小餘綾新左衛門が總領のなれの果。扱も無慚や可愛やな母ぞと言ひて駈出でて。顔が見せたい抱付き度い。心は闇に目も眩みフッ胸に。涙を保ちかね。詞なう如何にも甥に紛れない。詞父母に離れて頼みにするは此の伯母一人。逢ひ度さも。理と餘所に言ひなす壁訴訟。伊賀之介聞分けて。詞尤々他人にはさぞ遠慮。是へ通して女子ども皆脇へちれ。地我も奥へと立ちければ。これこれお竹様御對面。あれへくと言ひすて。フシ皆々部屋にぞ入りにける。地覺束ながら小文五は母に逢ひたさ草鞋も。脱ぐや脱がずにつつと入りどれ母様は。チ、是爰にと抱き付き。顔を見合せわつと泣き見上げてはわつと泣き。積る親子のため涙。フシ互に。詞もなかりしが。ア、心許なや何として上りしぞ。本國を別るゝ時言ひ聞かせしを忘れしか。詞父こそあさましい罪科に沈み給ふとも。筋目ある小餘綾の家。母が都で下司奉公してなりともそもじを元の武士にせう。地それ迄は家名を隠し奉公の辛抱しやと。氷川の社の神主へ奉公させ。母が身の上こま

ごまの文も定めて届きつら。此の暮か來春は美々しい迎もやらるゝ首尾。十の梯子を七つ目から。とんと落ちたかうたてやとエテ又さめ。くくと泣きければ。詞いや名字のため身のためお詞は忘れねども。包むとすれど悪事千里。あれこそ藤壺の女御を害し獄門に曝されし。小餘綾が悴と隠れなく神主聞付け。後のたゞりを恐れてや其の事となく追出され。地駿河の町にて角を入れ道中とても知邊はなし。人の軒下辻堂の雨に打たれ露にぬれ。昨日の夜は勢田の橋の。欄干の蔭に夜を明かし。物うき事とは存ぜしが母様水仕奉公の。御苦勞なさるゝものおいとしやと。案じく上りしにお文に違ひし此の住居嬉しいながら一筆知らせ下されば。これ程には案じまい親は子を思へども。子は親を思はぬと一筋に思召す。つれない心の母様やと。フッ膝に。縋りて啣ち泣き。フッ母も涙に堪へ兼ねて。なう身に小袖を着飾れば心の中に苦は無いと。餘所目に見ゆるが情ない恥しや此の事を。親子顔をさし當てて語るも胸が痛けれど。詞去年の秋此の家へ奉公に出でしより。そもじを世に出す便にもと主人は愚か傍輩迄、兎角人に愛をとり氣に入り度いと勤めし餘り。主人伊賀之介袖褌引いて口説かるゝ。ア、うるさい事とは思ひ乍ら何も我が子の出世の爲と。愛想らしうあしらひ私は身に過ぎて。大それた望ある者。それさ

へ叶へて下さればというて見づくに言ひかけしに。侍冥利如何やうの望でも。違はせまいとかたがたの誓文。サア嬉しやとも思つてみつ。如何に子が可愛いとて夫に離れ。地尼法師にこそならずとも口惜しい女の道は背くまいと。思へば相手は堅い武士誓文守る心から。約束反古にせぬ氣なり。エ、誓文望むまいものと悔んでも返らず思案する程氣がうるたへ。自害せんと及物を手には取りたれどもなう。浮名の恥辱も身の恥も。子のいとしさには。フッかへられず。地なじみを重ねたそもじの事を頼まんだめ。詞あさましや口惜しや。君傾城も同然に母が名を捨て身を穢し。再び夫を重ねた。地悲しいとも辛いとも起臥に付けともすれば。伽になるも涙にて。フッ病と。なるも亦涙。地今日は本妻びろめとて着飾りし此の小袖。模様赤いや紫の色々に染分けしも。母が身の因果の花。見るもうたてやあさましや。語るも口がもとをらぬとかつばと伏して泣き給へば。小文五もわつとばかり母にひつしと抱きつき。涙の瀧の糸筋も。フッもつれ。すがりて歎きける。地稍ありて涙を抑へかく迄の御厚恩。何と報じ参らせん。詞さり乍ら卒爾に申さば御歎きと今迄は控へしが。年月の御苦勞も皆仇事此の小文五は。今をも知らぬ命となる其の仔細は。母は聞き給はずや本國を始め關東筋。道中迄の取沙汰。夜前より都方を聞合

すれば是も變らず。藤壺は全く小餘綾は殺さぬを。頼光の不吟味にて獄門にかけられしと。人ごとの噂紛れなし。地痛はしや無實の罪に沈み給ふ。父の最期の心入思ひわくに所なく。彼の斬手を捜し討つて手向けんとは存すれども。天下の武將頼光の詮議にさへ知れ難し。近道の敵は頼光。蟻螂が斧なれども門内に斬入り一太刀觸れば本望。地母のお顔見奉り此の上の思出なし。御身の上を猶々隠し。父や我等が菩提を頼み奉る。これ今生のお暇と涙の目許につこりと。笑うて立つを引止め。詞やれ思ひがけなき事を聞く。世には虚説もある習ひ。頼光の御内へ斬込んで無駄死がしたいか。地先づ鎮まれ茲な子よ。詞いやく洩れ聞えて反をくひ。搦められては無念の無念と。振切れれば縄り付き止め兼ねたる親子の様。主人伊賀之介障子押明け飛んで出で。親子を共に引寄せて、音高しく。詞扱は汝等は小餘綾が妻や子にてありけるかと。つくづくと打守り涙をはらくと流せしが。地世間の風説に違はず藤壺の女御を害せしは。汝等が父小餘綾にてはなし。詞引入れの相圖に任せ忍び入り。長旅に疲れ臥したる小餘綾が刀を奪ひ。誠藤壺を害せしは。此の羽倉伊賀之介久國よと。地言ふよりはつと飛びしさり。母を圍うて身構へし。心は。夢の如くなり。チ、詞驚くは尤。誠や深山に茂る諸木の中。ゆ

がます直に立つたる木は柚人先づ。是を伐つて板柱とし。ゆがみすぢりし節木を伐り残すといふ古人の譬。小餘綾が心真直にて。刀を取られし恥を思ひ科を身に受け誅罰せらる。此の羽倉はゆがみ木の。地伐り残されしと思へども今汝等が手にかゝり。侍の名を焼き焦す薪と割られ碎かる。報いの根ざしぞあまましき。詞我は元一僕つれぬ小身者。一人の老母大病に犯され異國の藥種。買ひ調へん力なき所彼の大事を頼まれ。難なく仕畢せ過分の禮金思ひのまゝに。高値の藥を求めは求めしが。我が母ばかりの命を惜み人の命を顧ぬ。愚痴邪の天罰にや母は洩れ聞き。はつとばかりに氣を失ひ藥一口飲みもせず。直に終り給ひし御臨終のあへなさよ。地道に違ふ孝行は却つて不孝の罪となる。況んや我が手にて藤壺を殺し。我が心にて小餘綾を殺し我が因果にて母を殺す。此の重罪一百三十六地獄萬々劫巡つても。悪業盡くる期あるべきかとステ又さめくと泣きけるが。詞所詮我本人と名乗つて出で。小餘綾がかゝつたる獄門の木其の跡に。同じく曝されんとは思ひしがいやく。時には頼光不詮議にて。小餘新綾左衛門非法の成敗せられしと。六孫王此來滿仲公に相續き。古今の名將と呼ばる。頼光源氏に暇を付け。末代に御名を下さん事天下の鏡を打割る道理。地勿體なし恐ありと過ぐる月日に立身

し。上北面の武士となり今の榮華は極れども。心に忘れぬ身の罪業今日や報ふ明日や報ふと。浮べる雲に乗るが如し。詞剩へ小餘綾が後家とも知らず夫婦となり。罰とや言はん恥とやせん。今ぞ約束の誓言は違へぬぞ。如何なる望もあらばあれ夫の敵を討つといふ。是に上越す望はあらじ母からでも子からでも。サア地寄つて討てやれ討てと腰刀投出し。思ひ切つたる黙座の顔容小文五も前後にくれ。父には仇母には情。是非の道理を脇指に手をかけながら親子の人。目と目を見合せわつとばかり。フシ咽ぶ涙ぞ道理なる。詞いつの間に忍び入りたりけん火の番目附裏表より二人宛。案内もなく伊賀之介が両手をしかと取り。武將のお召しサア参れと引つ立つる。ム、伊賀之介お召とならば威儀を改め。追付け伺候致すべし。町人體のお召の如く見苦しと。言はせも果てず四天王はらくと頭巾ぬぎ捨て。公時大音上げ。コリヤ振舞のお召とは違うた。ちつとは怖い強飯と袴腰引つ攔む。地家内の上下すは狼藉と立騒げば。御意ぢやく。御意ぢやくと威光の風に散る木の葉。小猿を提けたる如くにて。フシ追取りまはし引立て行く。小文五齒がみをなし。大事の敵を頼光に討つてもらつて木望ならず。詮ずる敵は頼光と駈出づれば母上。こりやは是を見よ。せめての形見と盗み置きたる獄門の高札。是を證據に無成敗せし頼光に。地腹切らせて見物せんいざ来い小文五。ヲ、四天王に追腹切らせんいざござれ母上と。高札小脇に搔い挟み跡を慕うて。三重急ぎ行く。地記録所の御白洲に伊賀之介を引つ据ゑ。四天王御前に出で始終委細に言上し。直に尋ね問はるべしと武將御出である所に。詞親子御前に走り込み椽端に手をかけ。急に急いたる息ざしにて。我々は小餘綾新左衛門が妻は一子小文五と申す者。藤壺の女御を斬つたるは。此の羽倉伊賀之介に極り只今召捕り給ひ。又是此の高札相模の國の住人。小餘綾新左衛門尉景春。藤壺の女御並に乳母治部卿を。害したる科によつて。首を刎ねかくの如く行ふものなりと。墨黒々と書き記し獄門に曝されしは何と何と。エ、暗い大將軍。恨めしや身上軽き小餘綾とて命も輕しめ給ふかや。天下の武將のお命も同じ事。サア新左衛門を返してたべ。我が夫を返してたべさなくば大將の御誤とて御切腹を見る迄は。地親子が首は召さるゝともいつかな爰は立つまじと。白洲を攔み大聲あけスエテ恨み嘆くぞあはれなる。地雑色隼人口々に黙りませ。鎮まりませと制すれども頼光。親子は見やり給はず。ヤア伊賀之介。己れ藤壺を討つたるが必定ならば。小餘綾處刑に行ふ時分。武士の身としてなど名乗りては出でざるぞ。一度小餘綾が切つたる藤壺そも一人あるべきか。虚言を構へ女

童をたぶらかし。頼光が政道を、弄物とする言語道斷の痴者。底意を残さず眞直に申せ聞かんと御詫ある。伊賀之介居丈高になり。當座に此の方より名乗つて出づる程ならば。別に大將の御詮議迄も候はず。科なき小餘綾を非法の罪科に行はれし。政道暗き大將と末代の譏を庇ひ。沙汰なしに彼に討たれたはんと存ぜしに。地無用の四天王がお爲だて。謂れざる御詮議にて御身の恥をふれ給ふ。近頃お笑止くと、フシそら笑。うてぞ申しける。詞大將御氣色損じ。頼光が末代の譏を庇ふなんぞとは。分に過ぎたる慮外者。汝等頼んで譏を防ぎ恥を包む頼光ならず。既に小餘綾は當座の白狀。止の刀は其の身の指料是を以て證據とす。シテ汝が藤壺を討つたる證據は。如何にくと宣へば。ハ、ア止の刀を證據とは。御智惠の程顯れてあさはかの御詮議。小餘綾が枕の刀を盗み取り罪を彼に負せんため。態と止を刺し捨てしを。うまくと聞召されしな。我等が討つたる誠の證據。彼の藤壺は阿倍の晴明が封じたる刃除の守。身を難さすと承り枕にありしを奪取り。扱こそ易々害したる。地證據是に過ぐべからずと麴原の守袋。御前に差出す大將よくく御覽あり御手を打つて。ハ、ア、詞是ぞ覺えある守。此の證據を詮議せんと三年以來心身を碎いたり。地頼光が一世の本望是に過ぎず。藤壺を害せし伊賀之介罪科決定それ

撮めよと。御説の下より雜色取つて引つ伏せ高小手に締め付くる。小文五親子は泣きこがれサア。科の本人極るからは小餘綾を受取らう。大將が暗ければ従ふ人も皆盲目。ヤイ詞公時の赤面。見事な檢使の仕やうヲ、結構な四天王。地夫を返せ父返せと御前も分かす泣叫べば四天王も伏目になり。公時が赤顔フシ青ざめてこそ見えにけれ。地其の時大將保昌を召され。詞汝に預けし不老不死の名酒。藏を開き彼等に差め。心を宥めよと宣へば。ヤア人の大事の命を取り。酒を吞ませて宥めよとは餘りなお詞。地只小餘綾を返されよ。サア返されよと猛る中。保昌小姓衆フシ。酒瓶昇きて出でたりけり。地公時渡邊それ打割れ畏つて。握拳。四つ五つかんくと當てければ。酒瓶二つにさつと割れ色生白け骨瘦せて。髪は赤熊の弱法師誠の人か幽霊かと。見れば小餘綾新左衛門。ヤア景春殿が女房か。あれは我が子か父上かと。走寄つては抱き付き顔を。見てはわつと泣き。ほんに誠の小餘綾殿夢ではないか幻かと。人目も御前も打忘れフシ立つつ踊つ嬉し泣き。地御慈悲深き大將軍恨み申せし冥加の程。御罰を受けん勿體なや。とても御慈悲の上からは。兎角御免とばかりにて。御白洲にかつばと伏しフシ手を合せて泣きければ。地小餘綾は茫然と三年籠りし壺を出で。天より落ちたる如くにて前後の事は知らねども。妻

子の歎きをきよろしく見て、フシ共に泣くこそあはれなれ。地母はやうく涙を止め。詞なり小文五。其方を世に立てんため女の守る道を背き。伊賀之介に枕を並べ母が身は廢つたり。父御此の世におはすれば母が望は是迄。此の上存らへては親子三人共に恥辱。地跡を頼むさらばやと立寄り柄に手をかくる。詞貞光季武押止め。御前を知らぬ推参者。地御門の外では死なれぬか罷り立てと制せられ。誠に爰は憚りと、フシ差俯。ぶいてぞ居たりける。地頼光重ねて小餘綾が藤壺を討たぬとは。是程の事を知らずして天下の處刑なるべきか。此の守の證據を以て本人を捜し出さんため。保昌一人に心を合せ牢番に誓紙をさせ。切らで叶はぬ盜賊の首を切つて面を汚し。小餘綾新左衛門と高札に記し獄門に曝し。一旦事を鎮めし故案の如く。伊賀之介が本人の罪顯れたり。これ頼光が思慮にあらず。善惡終に明かなる天の道。伊賀之介が魂に入つて。心の中の罪科を驅り出し給ふと知れ。地彼奴は急度牢屋へ引け小餘綾は身を清め。目見えの時分本領申し付くべきぞと。御座を立つて入り給へば小文五進み出で。詞重々恐れ多き事ながら。母たる者思はず女の道を背き。地恥に堪へ兼ね自害と思ひ定めし體。なんほう悲しく候へばとても御慈悲。罪を宥め下されかすと。スエテ涙にくれて言上す。詞頼光はつたと睨ま

せ給ひ。叶ふまじく。武士の妻として貞節の道に背きし女。宥め置ては總じて天下の法立たず。なか／＼思ひも寄らぬ事。囚人伊賀之介が家財闕所。女房はあがり物此の方へ召捕つたり。扱あがり物の女房は。小餘綾が妻女に取らするぞ。地召連れ立てと宣へば、ハアツとばかりに親子の人まだ醒めやらぬ夢の中。ツメ又夢見たる心地にて天を仰ぎ地を拜し。君を禮して諸袖に悦の色惠の色錦を故郷に飜す。上一人の仁徳より。命も盡きぬ泉の壺。命の瀬戸をこゆるぎの家を。再び興しける。

第四

地春の花秋の紅葉の情だに。いつ迄浮世にとまる色香はなき物を。主上は弘徽殿に一向の御契り。愛着戀慕の思ひに絆され。生老病死の理も忘れ給ふぞ。フシ詮方なき。地されども御懐妊あつてより三十餘箇月に及べども。御誕生ましまさねば佛神の咎めか。人の嫉妬の積りかと。女御も世の中捨扶持に進まぬ駒の行く月日。里がちに暮し給ひければ。君もよろづ味氣なく叡慮を惱し給ふ折柄。詞御局の上藤達慌しく。なう悲しや弘徽殿の女御様。曉方よりお局に見え給はず。東西の對の屋。御庭の隈々尋ねても行方なく。丈と等しきお髪をふつつと切り。書

置の一筆と形見ばかりの唐櫛笄。地涙と共に差上ぐれば。帝是はとばかりにて御魂も消えぬと。御櫛を轉び下り形見の鬘御身に添へ。龍顔に押當て、涙の玉の冠もスエテ傾き。ひたる、御歎き。伺候の公卿殿上人も、フシ衣紋の、袖をぞ絞らるゝ。地中にも中納言義懷左大辨惟成詞を揃へ。御歎はさる事ながら。此の世にだにましまさば尋出さで候べきか。先づ書置をと奏すれば。地披いてつどく、叡覽あり是見よや方々。北面伊賀之介が藤壺を失ひしは。伯父左大將に頼まれしと拷問の上の白状とや。地伯父の悪事も自ら故夢にも知らぬ事ながら。冥途の恨も世の譏も。罪は我が身一つに負ふ。濁らぬ心を顯して世の疑を晴さんため。深き淵に身を沈め空しくなるとの、フシ筆の跡。地見るも果敢なや恨めしや。二世三世と契りしに千尋の淵の底迄も。などか伴ひ行かざるぞ。朕が身一人存らへて。たとへ轉輪聖王の位もよしや何せんと。玉體を擲つて、フシこがれ。歎かせ給ひけり。地義懷惟成さま、慰め參らせ。詞折節阿倍の晴明大學寮の御番なり。地占はせ候はんと、フシやがて御前に召されける。晴明暫く考へ詞あら笑止や。弘徽殿の御身の上。前に嶮しき岨後に高き山あり。進まずして止ると申す易の面。生死の間に迷ひおはします。塞は東北に利あらず西南に利あり。西南に出で給は、御命恙なし。地

若し北東へ出で給はば。はや御命あるまじと一々考へ奏すれば。いやましの御歎き存らへてだにあるならば。如何ならん山の奥海は櫛權の立つ限り。普天の下は尋ねべし亡き身とならば冥途の便。いつかは聞いつ聞かせんと。又繰返す御涙、フシ亂るゝ。絲の如くなり。地兩人御力をつけ、御ア、御心弱し。天が下の主にて何か叡慮に叶はぬ事や候べき。唐の帝は楊貴妃の別れを慕ひ。方士といつし道士に仰せて。楊貴妃の魂の在所を尋ねられしに。方士則ち蓬萊宮に入るとて日本熱田の社に到り。死したる貴妃に詞を交し。形見の釵鈿を取つて歸りし例。唐土人の魂さへ來り住む日本蓬萊宮。況して弘徽殿の魂魄。日本は離れ給ふまじ。いかに晴明。地汝が行力にて女御が魂の在所を尋ね。叡慮を慰め奉れとくくと宣へば。詞晴明辭するに及ばず。仙術を得し方士程こそあらずとも。宣旨とならば亡き魂も現れ見え給ふべし。上は碧落下黄泉の底迄も。女御の魂の在所を尋ね御返り事奏せんと。地お請を申し立ちければ頼みありけの御氣色にて。大殿こもる御涙。上日の月卿雲客も、オクリ皆々、退出せられけり。地中には義懷惟成上臥しておはせしが。はや漏刻も夜半過ぎ貞觀殿の小門より。忍ぶ足首更け行く月に衣被きの女姿。ヤア、詞心得ずと走り寄り。地唐衣引きのけ見れば主上は御涙にしをれ化びさせ給ふ體。

こは御狂氣かあさましやとスエテ呆れ。はてたるばかりなり。地いや姿は狂氣に似たれども心は物に狂はぬぞよ。詞たとへ晴明が亡き魂の便は告ぐるとも。姿を見る世のあるべきか。地されば會者定離愛別離苦の掟は十善天子も遁れ得ず。終には生者必滅と教へて先立つ女御は佛。朕は迷ひのあら凡夫此の度生死の火宅を出で。菩提の門に入らなため花山寺にて飾をおろし。詞出家と思ひ定めたり。地汝等止るものならば七生迄の恨ぞやと。宣ひ捨て、出で給へば兩人も力なく。御跡慕ひ諸共に。大内山の名残の月雲かく。れてや三重々曇り行く。

花山院道行

ハルフシ けにや高きも。賤しきも。恩愛床背の別れ程。フシ世に哀れなる事はなし。勿體なくも主上は。十善帝位を振捨てて。召しも習はぬ草鞋に。御足を痛ましめ。義懐惟成御供にて。戀路に迷ふ泡沫の。返らぬフシ水の。泡とのみ。消えにし人の。面影は。夢にだに見えざれば。慣れし昔の手枕に。語り盡せし睦言の。スエテ耳に止まりなつかしや。忘れもやらぬ戀草の。露も思ひも亂れつゝ。フシ我が身は元の。身なれども。契りし人のなき故に。月やあらぬと啣ちしば。地理と思召し。スエテ御心細き折柄に。繡鴉のうかれ聲。我をとふかと思はれて。

哀を催す道のべに。スエテ夜すがらとほす螢火の。己が思ひのあればこそ。ハルフシ 蟲だに胸をや。焦すらん。けに在原の業平が。フシ 羈中の詠に飛ぶ螢。雲の上まで往ぬべくば。秋風吹くと歎きしも涙くらべてあはれなりいとゞさへ。く身を知る。雨の晴るゝ間も。なき半天にハツミ小田の蛙の。鳴き添ひて。道も定かに見えざれば。涙を道のしるべにて。やうく運ばせ給ひければ横雲互る東明に。スエテけふは散り行く花の山。御寺に。こそは着き給ふ。地賤が茅屋の軒の下御裳裾の露を絞り。御足なんどすゝぎ參らせ。スエテ暫し休め奉る。地悉達太子は十九にて王宮を出で給ふ。長地今此の君も十九歳檀特山と戀の山麓の道は變れども。末は一つの法の門月も。入るさや 三重 次第尋ね行く 幻もがな傳にても。く。魂のありかは其處としも白露分けて初尾花ほのかに見えし遠山の。草の假寢の苔蘚。石清水にぞ。フシ着きにける。地陰陽の頭晴明。唐土紹蘭夫婦が中立の昔を引き。紙を以て燕を作り祕文を封じ。放せば此の鳥生けるが如く翺翔とかけり轉り。道しるべする 燕に誘はれ行くや男山。八幡宮の寶殿の東の御殿の珠簾の。魂は爰にといふばかり留り轉る 燕の。形は同じ紫の フシ御簾の。房にぞ隠れける。地扱は弘徽殿未だ存らへ爰にこそ在しけれと。寶殿に向ひ聲を上げ。詞和國の天子の勅の

使。晴明是迄参りたり女御は御内にましますか。詞ウタヒなに我が帝のお使とて。何とて此處迄來れるぞと。地九華の帳を押除けて珠の簾を掲げつつ。立出で給ふ御姿雲のびんつらあたら物。切つて捨てたる柳髪。昔の花の色はなけれども匂残りし御顔ばせ。寂寞たる目の中に涙を浮かめ給ひしは。何に譬へん梨花一枝。春の雨を帯び風に從ふ海棠の。眠れる花の如くにて。地あら嬉しの晴明や。君に名残は盡きせねど身の浮き草に閉ぢられて。淵に身を投げ死なんとせしに仇を情の人心。詞清瀧夫婦に見付けられ。助けて爰に隠し置き。地湯水を運び育むも露の間の我が命。とても存らへ果てぬ身を。問ふに辛さのまさり草枯れて此の世に亡き身ぞと。奏聞してたべ晴明とスエテ只さめ。くくと泣き給ふ。詞こは勿體なき御詞。暫しの別れさへ以外の御歎き。今は亡き身と奏聞せば聖主御命あるべきか。地晴明一朝に選ばれ御使に立ちながら。すぐごと立歸り何のしるしか候と。憚りなくぞ申しける。詞その印とは形見の事か。残り置きたる黒髪にまさる形見はなけれども。地使のしるしとあるからは思ひぞ出づる君と我。天にあらばと。フシ誓ひてし。比翼の鳥の簪を是ぞ印と奉れ。驪山の花も一度は散り華清の池水も終には涸るゝ世の掟。必ず歎かせ給ふなど。よくく奏し給へやと。涙ながらに入り給ふ。詞御袂

を引留めて御一門の悪心を御身一つに引受け。命を捨てさせ給はんとは理とは申せども。人間の胤ならぬ皇子を御身に宿しながら。共に失ひ給ふべきか。地いやとよ恐ろしや。詞三十餘箇月生れぬ子が何しに君の胤ならん。地人の怨みの月積り産み落して君の敵。母に仇ともなさんより共に沈むは深き淵。スエテ未來の淺瀬に浮かべてたべ。詞いやく昔もさる例あり。唐堯と申す帝は。母の胎に十四月やどり給ひ。黄帝は廿五月。老子は八十年。白髪にて生れ給ひし上は怪むべき道ならず。先づお歸りと勸むれば。地それは聖人明德の明かなりし不思議とかや。是は戀慕の種蒔きそめて二葉に育つ戀草や。色を諍ふ藤壺の根に絡まるゝ其の恨。過去遠々の昔を思へば。いつを衆生の始と知らず。未來永々の流轉。更に生死のフシ終もなし。天上の五衰より北州の千年も。皆幻の戲と。フシ知らで重ねし戀衣。君と交はせし。睦言の。比翼連理のさゝめごと。さゝの一夜の手枕に。かゝる鬘を切りし身は。ありとはいへど無き身ぞや。戀しき昔の物語。くく。つくさば人目も。面伏せの。猛カ、リ形見の簪しるしに持ちて。名残は盡きすいざさらばとて勅使は都に歸らば歸れ。さるにてもく。君には此の世逢ひ見ん事も蓬萊が島つ鳥。うき世なれども戀しや昔。はかなや別れの常世は茲ぞと。地伏轉びてぞ入り給

ふイクリ御有様ぞ方なき。地衛士の又五郎清瀧夫婦先づ小世帯をもち月の桂の里に住せしが弘徽殿の捨身を助け。八幡の寶殿に隠し置き裏の手作の鳥物。清瀧が養焼して夫は運ぶ世は情。心ごあはれ粟の餅。菜の葉の飯を重箱のフシ包物さへ憎からぬ。地十八豆茄子の羹。調へて。社殿の椽にヤア忍いと。おいとしやさぞお淋しかると女どもが世話やき。追付け跡から参る筈先づ些と上げましよと。包解く手に晴明をきつと見付け。ハア此方は爰の社人殿か。御番でかな御座るか何となう問ふ顔色。地四相を悟る晴明是ぞ彼の又五郎。是ももと藤壺方油断ならずとさあらぬ體。詞いやく我等は鹿島の事觸。上方皆々目出度き御託宣觸れ仕舞ひ。當社に参籠致した。地些休息致さうと足を寛げ。ゆるくしき體を見て又五郎辛氣顔。詞これ事觸も社人の内。爰で休むは慮外ぢや脇へ行たが能いわいの。如何にもく伏見に泊る合點なれども。是からまだ二里の道脇も餘程疲れた。地その重箱の物ちと振舞に與り度いと。捻ぢ寄れば興さめ顔。詞ア、太い事觸。終に一度も見す知らず。中に何があるも知らず。減多無上に振舞へか。地こりや食物ぢやござらぬ。ちと爰に用がある餘所へ往て貰ひ度いと。せく顔を見て猶ゆるく。ハテ詞さもしい嘘をつく人ぢや。中にある物一重々々名を指いて言うて見し

よ。ヤ爰な和郎は。如何に事觸とて見通しではあるまじ。食物というても百種もあるもの。サア上の重からいうて見や。言ひ當てたら振舞はう。微塵も違へば烏帽子装束ひつ剃いで。裸にするが合點か。如何にもく鹿島明神も御照覽。此の誓文で違へたら剃いで取れ。面白い八幡大菩薩いひ當てたら振舞はうぞ。サア何ぢや言うてみや。地晴明粟の餅ぞとは疾く占ひ知つたれども。轉じかへて興さませ御簾越に弘徽殿の。物思ひをいさめんと暫く案じて。ア、知れた。詞色は黄な物。黄色な物では何であらう蜜柑柑子九年母。ム、上な重は。柑子ぢや。違ひはせまい蓋を取れ。又五郎にこく笑ひ。今時分の柑子とは。餘りな推量。違つたとは言はせぬ。しかと柑子ぢやの。地どりや眞裸にしてやる帯解いて待つてみや。こりや粟餅といふ柑子を見よと。蓋を取れば大柑子。なんとく。先づしてやつたと引つたくられ。又五郎投首して南無三寶。詞慥に女どもが粟餅ちぎつて入れたが。忽ち柑子にならうとは正八幡も御存じあるまい。地いつその事破れかぶれま一度來い。サア此の二重目で勝負せう言うて見よと肱を張る。いやもうさうくは御免あれならぬ。事觸殿剝がねばおかぬ。何ぢやくと顔を赤め。顔に大汗大筋張り。フシ遅いくと責めかくる。地晴明態と迷惑顔。今のは不思議

の言ひ當て。此度は違ふは定。剥がるゝは知れた事といふ内に轉じかへ。詞てんほのかは言うて見よう。此の重は食物でも何でもない。生きた鼠が三疋ある。地又五郎天窓を叩いて悦び。詞何ぢや鼠ぢや。エ、阿呆な事觸。重箱に鼠入れてなんの用になる物ぞ。但し人を觸るのかじやれにはさせぬ引つ剥ぐぞや。詞を詰めた合點か。地さらば榮飯といふ鼠は見よと蓋を取れば。黑白の鼠三疋現れ出で。重箱のめぐりを立去らず手飼になつきし如くにて。又五郎も我を折つてこりやどうぢや。さつても成れば成る物か。てうらい柑子が鼠になると、ッ呆れ。果てて居たりしが。地不思議さうに打守り。ム、合點々々。詞是程の奇瑞現すは安倍の晴明にて在するな。中々の事シテ和主は誰そ。我等は藤壺の乳兄弟清瀧が夫。衛士の又五郎と申す者。昨日の曉弘徽殿の女御。桂川の深みに身を沈めんとされしを。参りかゝつて引留め御身の上を尋ぬれば。伯父大將が計らひにて藤壺を失ひしと。頼光の御前にて伊賀之介が白狀。殊には君を犯さんと巧む惡逆皆自らより起りし事。存らへ憂き事聞かせんより死なせてくれとの御歎き。地様々宥め此の寶殿の東の間に。隠し忍ばせ申せども日蔭の我々。奏聞すべき便りもなし一つは朝家の御爲。御執奏頼み参らすと。スエテ心底他事なく見えければ。地晴明横手を拍つて神妙

神妙。忝くも宣旨を蒙り弘徽殿に逢ひ参らせ。御邊の噂聞きつれども藤壺の御所縁。二心もあるべきかと試し見たる面目なやと。所存を明せば又五郎いかなく。詞かう申す言葉にかけこ入子も候はずや。入子の序に此の重箱の柑子鼠。いつ迄も是でゐる事かどうぞ本復なるまいか。晴明をかしく地易い事くと。轉じ返せば忽ちに柑子は蒸せる粟の餅。鼠も所の男山。ッをみなめしとぞ成りにける。詞かゝる所に地下侍二三十兵具とりぐ群り來り。方々は参詣の旅人か。最前より此の所に。内裏上臈と思しき女中は見えざるか。聞きも及ばん弘徽殿の女御大内を忍び出で。此のお山にまします由。蘆屋の道満占ひ考へ。左大將早岑公より御身に過ぎなきやうに。尋ね申せとの仰。さもありけなる上臈あらば。地早速當山別當の御坊へ注進せよ。いざ先づ高良明神の廻廊近所を捜して見ん。皆々ぬかるな油断すなと。ッ籠をさしてぞ下りける。地晴明は東西遙に見渡しあれく又五郎。猪の鼻坂女塚人大勢みちくたり。此の所に安閑と置き申さん事。井の許の童より猶危し。某女御の御供して木蔭をくゞり身を隠し。大内へ入れ奉らん和殿は敵を切拂へ。エ、相口同然の小脇指鑓長刀には敵ふまじ。何とかせんや。詞あの繪馬銀作りの大太刀。願主相模國の住人小餘綾新左衛門尉景春。百日参詣敬つて白すと

記せしは。今度小餘綾が無實を通れし願ねがほどきと覺えたり。地然れば眞劍まことござんなれ。あの太刀取つて脇挟み相手を斬らば斬棄きりすてよ。まかせて置けといふ所へ。女房清瀧息を切つて走り着きなう又五郎。ヤ調珍しい晴明様も是にか。嬉しや〜一人でも味方が多うなつたぞ。なんぢやは知らぬが平次兵衛と道満が。大勢連れて地あれ爰へ。女御様奪ひ取られては何しても詮がないと。御簾引みすぢひきの除くればしを〜と。人々の志無にするにッシ似たれども。地敵といふは我が伯父君其の罪の申しわけ。死ぬる覺悟に髪も切り何面目に歸らうぞ。死なせてたべ又五郎とスエテ歎き給へばア、申し。詞其の爲の晴明殿。粟餅を柑子にし菜飯を鼠にする人が。お髪かみの五尺や一文はお氣遣きづかひない事と。地夫婦御手を引く所へ蘆屋の道満平次兵衛盛重。地下侍百騎ばかり谷々より押登り。詞ヤア扱こそ〜某が占形うらなに違はず。弘徽殿は當山にましませし。又五郎清瀧晴明も方人かたうぢな。懐胎の皇子を守り立て左大將早岑公。天下の執政と成り給はん御企と。言はせも果てず又五郎。ア、おけ〜。企とは何の企。その企が胸腹へ針立はりだてにしてくれんと。地いへども相口小脇指こわきさしからりと抜捨て。卒爾ながら晴明殿借用申すとすりと抜き。多勢を左右に引受けて。うんともすんとも石清水ッシ坂を下りに追ひ下げたり。地平次兵衛只一人取つて返し清瀧めが

け斬りかくる。詞待受けたりと夫の相口拾ひ取り暫し支へて戦ひしが。女力の小脇指大力に斬立てられ。既にかうよと見えたりけり。地晴明女御を圍かこひながらエ、危し〜。あの繪馬の主かな來れかしと。心に念する其の願主ねがひぬしの文字さつと消え。形は小餘綾新左衛門太刀抜きかざし清瀧を。押隔ててぞつつ立つたる。ハアウ詞枕の刀盗かすりまれた。寝ほれ侍どこから小ゆるぎ出でたるぞ。寢言ねごでないか目を覺させと雜言まじごすれども事ともせず。地渡し合せて切結きりむすぶ陽炎やうえん稻妻いなづま飛鳥とりのかけり。打てども。突けども敵かたはばこそ忌垣いかり瑞垣みづかき玉垣たまがきをくるり〜と。三重追廻みへッシ折しも小餘綾。地日參の神前の騒動心得ず何事やらんと立つたる所に。詞平次兵衛追ひまくられ行きかゝつて。ハアウはや先へ廻つてか。地こりやならぬと駈戻れば跡にも小餘綾先にも小餘綾。エツエ口惜しい晴明が行力よな。道満はおはせぬか彼奴等かやつら片はしかな縛りにしてくれん。道満々と叫ぶ所をばつたと蹴倒かきしのつかゝれば。ありし姿は消え失せて。繪馬に移る願主の家名かめいッシ文字は。本の如くなり。地新左衛門笑壺えびに入りてにこ〜笑ひ嬉し〜。己れを〜と思ひしに正八幡の御利生。詞己れよう引手をして旅疲れの某が。枕の刀盗取り藤壺を殺させ。無實の罪に落したなあ。伊賀之介が白狀にて悪人残らず顯れたり。地是ぞ己れが盗みし刀近付

の焼刃の加減覺えたかと。刺通し首搔切つてつ立つ所に。又五郎は道満が首切先に貫き大聲上げて。取つた／＼首を取つたぞ。此方も取つたぞ首を取つた名をとつた。地ツ響とり／＼取囃し都に遷す弘徽殿。晴明が加持の徳清瀧夫婦が誠の徳。扱こそ小餘綾武士の。一分立ちし男山惡を滅す殺生も。義によつて放生川とゞろ／＼と踏み鳴す。反橋の形弓の形。源氏の氏神弓矢の威徳天地に引張る桑の弓八幡を。拜して歸りけり。

第五

地山に登らざれば天の高きを知らず。谿に入らざれば地の厚きを知らず。聖賢の語を聞かざれば道の大なるを知らずとは。宜なるかな晴明が諫にて。女御不思議の御命を免れ。人々に誘はれ直に花山に入り給へば。主上御感限りなく。急ぎ還幸なるべしと弘徽殿も同車にて。小餘綾親子御先を拂ひ。義懷惟成扈從にて御車を轟かせば。山路も野邊も秋の色。今日の行幸を待顔に。女房達の花摺衣花一時も今暫し。フシ眞葛が原に着き給ふ。草葉にすだく。色々の。蟲の聲聲穂に出で初めし。薄にとまる蝶々や。蜻蛉蟻蚋飛びつれて。祇園林も近ければねぎ殿といふ蟲もあり。秋の野遊の珍しやと帝も女御も御車の。物見がちなる女房達 フシ暫し。見とれて立

ち給ふ。地根笹交りの萱原の風も吹かぬにざら／＼。ざはめき立つたる其の中に三尺許りの蠅螂の。鎌を振立て御車に差向つて羽を廣げ。頭を振つて狙ひしは。けに蠅螂が斧を以てフシ龍車に向ふと謂つべし。始の程は女房達。さつても大きな蠅螂とめで笑ひ給ひしが。後には人怖氣立ち女御も驚きましませば。誰かあるあれ追退けよと宣旨に任せ。小文五扇押取りのべはたと打てばひらりと飛び。追拂へばつと立ち。鎌とせり合ふ扇の風飛去り。飛退き フシ飛廻り。飛歸つて御車の屋形に止り休らひて。四方に頭を振つたりしフシ眼は鈴の如くなり。小餘綾御車の前に謹んで。詞僅か昆蟲の障碍取るに足らず候へども。小敵を見ては畏るといへり。察する所我が君に。仇を含む凶賊競ひ起るべきしるし。野の神草の神告げ教へ給ふ所。今日の還幸覺束なし。一先づ花山へ御車を返し。地重ねて御沙汰もやと。奏しもあへぬに菊が谷の岨陰より。覆面の男數十人喚き叫んで御車の。前後左右をおつ取り捲き。帝を渡せ女御を渡せと弄きける。詞小餘綾ちつとも臆せず。扱こそ思ひ設けし所。疑なき左大將早岑が群黨な。滅多に渡せ／＼とは。商人の賣懸買懸と思ふか。惡逆超過の左大將に従ひ。朝敵となつて可惜命捨てんより。神國神孫の天子に従ひ奉り。百年の命をつけ。地但し腕だてせばせよちつと手荒い關

東武士。小餘綾親子が腕脛鹽加減見そこなひ。咽渴かさん笑止なとッシからくんとぞ笑ひける。悪黨ども聲々に。詞事を知らぬ愚人め日本三つの御寶。神璽寶劔内侍所是を以て天子のしるし。忝くも主君左大將早岑公。今大内に入り替り。三種の神器を携へ給へば。王様とも天子とも。草木も靡く早岑公に。背くは汝が朝敵よ渡せくと罵つたり。ヲ、渡す地是を渡すといふまゝに。親子一度にするりと抜き。菊が谷を眞下りに。ッシなだれをつかせて追下る。中にも宗徒と思しき者。取つて返し車の轆に取付く所を。ありつる蠅螂飛んで下り。劔の鎌をとき立てとき立て。膈をかいて薙倒し腕首膝節嫌ひなく。薙ぎ伏せし追ひめぐればッシ敢て寄付く便なし。小餘綾親子引返し。袂立て斬伏せし終に首をぞ搔いてけり。今迄茲にあり明の蠅螂消えてうら紫の。藤壺の佛茫然と顯れ出で。ア、ラ恥かしや我が姿。君と契りし。鶯の。渡せる橋も中絶えて。身も紅葉葉の血刀にかゝりしを。左大將の業とも知らず。科なき弘徽殿恨みをなせし恥かしさよ。罪を赦させ。ッシたび給へ。懐妊の御身を三歳三月封じとめ。惱をかけしも我がなす業。今胎内に持ち給ふは姫宮にてましませども。自らが持ちこもりし若宮の御魂と。變成男子に轉じかへ奉る。只今誕生なるべきぞや。我蠅螂の蟲と成つて御車の上に羽を休めし

は。神の尊の御産屋。鶯の羽を芽に尊不合尊の嘉例を引き参らせ。天龍八部も圍繞して。八百萬の御神の守りまします。御誕生只今なりやいざさらば。我は日陰の露の玉君が光に照されて。御代を守りの靈神と名残は盡きすと夕露につれて。形は消えにけり。地不思議や女御は忽ちに御産の氣つき給ひければ。女房達は集ひ寄り車を鶯の羽の産家にて。端嚴美麗の御相好皇子やすく御誕生。初聲目出度く聞ゆれば供奉の上下一同に。悦びの聲産聲に車の音も千秋樂。萬代澄める清水や車。やどりに三重入御なりし。地左大將早岑は止む事を得ぬ惡逆。己が館は打毀たせ禁中に押入つて。攝録三公の上に就き。従はざる公卿大臣死罪流罪に隙もなく。頼光が寄する事もやと四門固く閉ぢさせ。口々に警固を据ゑ。ッシ籠城なんどの如くなり。地衛士の又五郎義長妻の清瀧夫婦の者。頼光に訴訟し主の敵母の敵。羽倉伊賀之介を申し受け高手小手に縛め。繩引立てて南門の前に引つ据ゑ割る、ばかりに戸を敲き。詞如何に朝敵の棟梁左大將よつく聞け。己れ一身の榮華の爲に若宮御懐妊の藤壺。刺へ乳母治部卿を害したれば。此の又五郎が爲には主の敵。此の清瀧が爲には親の敵と主の敵。胎内の宮様を失ふ上は。天下萬民の爲には國王の敵。四方八方の持合敵。それはともあれ夫婦が爲主親の敵。地討ち度い斬り

度い心ばかりは逸れども。運に乗つたる左大將夫婦が力に叶はず。さるによつて彼奴伊賀之介。さま／＼願ひ頼光より申し受け。是迄引つ立て汝を斬ると観念し。一分試しの鬪り殺し。而の皮を踏んで／＼踏み躪るも。詞全く伊賀之介を踏むにあらず。左大將が面を踏む。地いふにかひなき又五郎に面を踏まるゝ左大將。末世に恥を曝せやと。夫婦門を打鼓き。ッシどつと笑うて立つたりけり。地左大將怒りをなし築地の上につつ立ち上り。龍虎の挑む眼の光くわつと見開き睥め付くれば。血筋苛つて爛々と。七つ眼鏡の水晶軸。ッシ左右にかけたる如くなり。左大將大音あけ。ヤイ詞日備め。うぬは見かけより肝先に肉のある下郎め。よくも／＼いつぞや此の左大將をたらし。白河にて帝を助けしより事顯れ。思ふ壺を外させたり。然れば早岑が爲には身上の敵。搜し出し土礫にかけん／＼と思ひしに。何ぞや此の左大將が面に準へ。伊賀之介が面を踏まんとは推參千萬。舌の根が伸び過ぎたり。己れにのめ／＼踏ませて見物すべきか。地誰かあるあれ奪ひ取れといふより早く。門押開き數多の士卒群つて。夫婦を左右へ引退け／＼。伊賀之介を引つ立て内にかけて入り扉を締め。貫の木はたと指したるは。ッシ無念といふも餘りあり。地左大將大聲揚けて打笑ひ。なんとも見えたか／＼。猫の子が親猫の取つた

る鼠をちやうらかして逸すが如く。伊賀之介を取放し。地再び頼光に面は向けられまじ。夫婦それで刺違へ自滅せよ。左大將が情に。二人が死骸を逆礫にしてくれんと。ッシ言ひすて。飛下り入りにけり。地二人は呆れて詞もなく。萬戸が玉を取られし心地。スエテ築地を睨んで立つたる所に。地貞光季武綱公時。保昌を先として我も／＼と駈付け。伊賀之介は討つたか何と。／＼と問はれて夫婦は詞なく。討つ事は扱置き易々と奪はれ。結局我等が討たれさうなといひければ。詞五人一度にハウア。大事の囚人奪はれ。地敵に三分の強み付くいうて返らず悔むが損。時節を待つて何かせん。一寸も延されず築地を越えてや入るべきと。門を睨み築地を敲き。五人怒りの物狂ひ怒れる虎怒れる獅子。彼奴を再び取返さでは全く爰は立去らじと南門の眞砂の上。一度にどうと坐りしは。ッシ大地も揺ぐばかりなり。中にも公時つつ立ち上り。詞口ではかり悔んでは百日いうても同じ事。此の門一つ蹴破るは薄紙裂くより易い事。公時が押破り手序に左大將。地共に引つ立て來らんと金剛力士の勢にて。母の讓の力瘤。拳を固め門柱ゑいやゑいや押しかくる。詞四人の人々縋りつき先づ待て公時。此の門一つ蹴破るは面々も合點たり。早まつて左大將すは是迄と見るならば。三種の神器に火をかけ。地内侍所聖の御箱失せ給へば

此の日本は魔界となる。上一人の御誤り下萬民の歎きの種。假初ならぬ一大事鎮めて事を窺へと。いへども公時合點せず。詞又例の御意見か。今度はいかなる意見でも。持病の蟲が背筋へ廻り。針でも灸でも堪忍ならぬ放せ。く。地いや放さぬと公時が押す響。四人が止る其の響門内に人音して。海老鉾外し貫の木引き。扉さつと押開き出づるを見れば伊賀之介。サア時分よしいづれも御入り候へ是又五郎。武士の契約金石より猶堅し。伊賀之介が一言に偽りなきを見給へと。言ひ捨て刀に手をかけ既に自害と見えければ。渡邊押留め。神妙の御働き此の度の計略は主君頼光某と相談にて。又五郎と御分に申し含めし所。地謀の手合せ味方の勝利。聖運開かるべき時節到来珍重くさり乍ら。何を不足の自害やらん心底聞かんと言ひければ。詞伊賀之介涙をはらりと流し。地何故とは情なや。左大將に頼まれ藤壺を害し。今又左大將を欺き。門を開き敵を引込み返忠。かく迄心定まらぬ娑婆に益なき伊賀之介。情には御介錯頼み入るとばかりにて。振放さんとする所を人々取付き。ア、詞愚かなり。十惡五逆の左大將を二度三度偽つて。十善の君を御代に立て。天下太平の功ある伊賀之介。娑婆に益なき武士と笑ふ者こそ娑婆塞け。それとても面々の心涼しう思はずば。死に時まだ早い。討死する程働い

て頼光の評判受け。死んでよくば其處で死ね何とく伊賀之介。アツアさうぢや誤つた身の上は後日の沙汰。天下の大事は鼻の先。地時分はよきぞや早入れと伊賀之介が先陣にて。清瀧夫婦四天王。門外門内手分をして喚き叫んで。三重攻めにける。地方八町に数千籠りし賊黨ども。只八人に切立てられ此處に追込み彼處に討たれ。或は落失せ逃失せて残少なに成つてけり。左大將は敵はじと築地に上り。隙間を見て落行かん。くくと折を窺ひ駈廻る。又五郎清瀧さしつたりと飛びかゝり。兩の足首しつかと取り。引下さんくと引けどもく大方の。鞠を蹴るより猶易くはつたくと蹴落され。左手右手へぞ轉びける。いつの間にかは綱保昌。築地上り左右にぬつと顯れ。兩手を掴んでゐいやつと跳返せば。下にて公時得たりおうと取つて押へ。胸骨踏まへ首ふつと引抜いて。朝敵滅亡御代萬歳と呼ばはる聲。再び遷幸ましめて。治る國の名將の。民を憐む源氏の元祖文に榮え武に榮え。上に道あり下禮あり。有難き君が代の。御子孫繁昌國繁昌。詞五穀豐の時にあふ流の。末こそ樂しけれ。

七行大字直之正本とあざむく類板世に有といへども又うつしなる故簡章の長短墨譜の甲乙上下あやまり甚すくならず三寫烏焉馬なれば文字にも又違失多かるべし全く予が直之正本にあらず故に今此の本山本九右衛門治重新に七行大字の板を彫て直の正本のしるしを糺せよとの求にしたがひ予が印判を加ふる所左の如し

竹本筑後掾

竹本 教博

大阪高麗橋壹丁目

正本屋 山本九兵衛版

山本九右衛門版 團

五百番之内 姫 山 姥

(七行八十四丁本・十行卅五丁本参照)

近松門左衛門作

序詞 漢に三尺の斬蛇あつて四百年の基を起し。秦に太阿工市あつて六國を合す。古の君子是を以て自ら衛ると。子路が謠ひし劍の舞。返す袂も面白き。我が神國の天叢雲。百王護國の御守。ロシ。偃す民こそ。目出度けれ。地されば今上天曆の帝御代知食す慈愛。波靜なる遠江枝を鳴さぬ時津風。濱松の宿の邊に當つて。空に紫の雲氣鬩き斗牛の間に英々たり。爰に清和天皇の正統攝津守源の頼光十八歳。斯くと傳へ聞き給ひ唐土の張華が名劍を得たる例。疑もなく此の邊に天下の重寶と成るべき。名劍埋れあるに極つたり。尋ね求めて父滿仲の武功を繼ぎ。源氏の子孫に傳へんと同年の若者渡邊の源五綱に御心を合せ。近隣の宿々二夜三夜泊り鷹野に事寄せて。在所尋ぬる名劍の。フシ小夜の中山に。お宿を召されける。地其の頃胤子女院の御弟清原の右大將高藤とて僅の儒家に生れながら當今の御外戚。姉女院の威勢を籍つて中納言の右大

將に經上り。榮耀奢身に餘り諸國の名所を遊覽し。今宵此の宿御泊と宿割の侍肱を張り。むらむらと立掛り詞ヤア／＼當宿に。此の家ならで御本陣になりさうな家なし。先立ての宿札何者ぞ。幕も札も早々捲くれと呼ばはりける。亭主驚きこれ／＼粗忽なさるゝな。忝くも攝津守頼光 地源氏の大将の御宿札と制すれども。なんの頼光源氏でも毛蟲でも。清原の右大将殿御威勢には敵ふまじ。伸し張らば幕引斷り。宿札打割り引摺り出せと罵りける。詞渡邊の綱聞きもあへず。何條先に打つたる宿札指でも差さば踏殺さんと。躍出づるを頼光暫しと鎮め給ひ。同じ武家にもあらばこそ長袖に勝つて譽ならず。殊に彼は右大将女院の弟。朝家に敵するなどと讒せられては不覺なり。地密に此の家を立出で宿端に一宿せん。汝残つて穩便に明渡すべしと。手廻少々御供にて。裏の小道の松蔭よりオタリ山路に添うて出で給ふ。フシ時刻移ると。地頼光の席札引抜いて。清原の右大将殿御泊と高々と押立て。引並べて右衛門督。平正盛同じく泊とフシ 席札二本ぞ立てたりける。地渡邊今は堪りかね躍出でて下人ばら。取つて突退け大音上げ。詞清原の右大将は。右衛門督正盛と名を二つ付けられしか。先に打つたる宿札替ゆる法はなけれど。主君頼光若輩なれども御思案深く。驕者の右大将に張合ひ後日の讒を受けん事。犬に

食はれし同然とおとなしく宿を替へられしに。定めて是は平家の大将正盛な。地彼と相宿召さるゝからは頼光も相宿と。正盛が席札取つて引抜き。叩き割んとする所へ平の正盛。怒れる聲にてはつたと睨み。詞ヤア己れは頼光が下人綱といふ童よな。此の度右大将殿東の名所御遊覽に。御同道申すからは相宿の席札誰に憚る事あらん。主従ともに口頭蒼も切れぬ小俵ども。元の如くに札立て直せ。但し割られれば割つて見よと太刀の柄に手を掛くる。渡邊莞爾と笑ひ。ヲ、源氏の憤ひ御邊の様なる相手は。大人の手を出す迄もなく前髪立の子供の請取。主君頼光に宿を明けさせ右大将の威を籍つて。御邊濫くり泊らんとや暖な事。地右大将一家の外踏込まば空鷹雁がんと。席札微塵に踏碎き仁王立に立つたるは。金輪際より忽に。フシ生抜いたるが如くなり。地正盛そゞろ恐しく身は顛へども押鎮め。己れ生けて置く奴ならねど高官の御同道。騒動も畏あり爰は 某大人しく宿端に別宿すよつく性根に覺えて居れと。臆ぬ顔にて立歸れば渡邊は見向もせず。右大将の宿入の中押割つてのさ／＼と羽交伸したる夕鴉。泊ちやないか旅籠屋の門賑。はしく三重々暮れかゝる。フシ上り。下りの旅人の。地粹と野暮とに摺れて揉まれて共摺の。招く薄もおじやれ／＼が。フシ戀をよぶ。假の契も末かけて。其方百切りおりや九

十でも。心次第のフシ筵枕。フシ笠も預る。地股引洗ふ。洗足の湯と膳立とぐわつた菱屋の門構。本陣宿の忙しさ數多の出女下男。中に若葉の喜之介が跡の季よりも角前髪。土氣も取れて顔の色白瓜膾夕飯の。拵へ急ぐ薄刃の音のちよつきんくちよきんく。ちよつきり切盤百人前を夢の間に。仕立て済して息休。フシ煙草啜へて立ち居たる。地下女の小絲忙がしけにこれ野良松。詞暇の無い旅籠屋奉公。殊に今日は清原様とやら麥葉様とやら。お公家様の大客。上つ方は物靜で御料簡もあるべきが。下々の癖に口悪く。膳が遅いの何のとていぢらせてたもんなや。地なぜにきりく働きやらぬ煙管はわしが預ると。引奪れば喜之介エ、小喧しい。詞男の仕事がもどかしさうなこれ。料理したり水汲んだり椀拭いたり門掃いたり。打つたり舞うたり此の手一つで百足の代も仕る。貴様の様に毎夜々々旅人寢屋へ引入れ。煮焼もせぬ加減のよい味い料理振舞うて。呻く程錢儲けて緩と朝寢召さるゝと。地我等が仕事は格別。歌溜めた錢纏脱いたり差いたりせまいか。さればいの。チ、フシ嘘ぢやないとぞ笑ひける。詞ム、是は聞き所。なんぢや毎夜帯解き勤するとの云分か。これそんな小糸ぢやないぞや。傍輩衆は面々に勤次第に錢金貯め。親里貢ぎ身に一重も飾れども。地私は此方を思ひ染め面倒見よう見られうと。頼も

し盡の言替せ若し末の縁ありて。一所にも暮したいと随分と身を嗜み。旅人の酒の挨拶肴に小唄諺うたり。雀の錢を頂く時は涙が翻れて口惜しけれど。若い此方が奉公の身で義理順義もあるもの。一錢も身に付けず皆此方に渡すぞや。一言可愛というたとて罪にもなるまいほんに思ふ程にもない憎い男とフシ首筋に齒形ぞ。戀の極印なる地喜之介ほろりと涙ぐみ。詞チ、過つた堪や。サア地わつさりと仲直り機嫌直して盃事。幸ひ肴は此の膾まづ祝言の心持。そんなら祝うて女房から私が手酌でこれ献いた。我等は得物の此の茶碗吸物は養賣の豆腐。目出度う諺はう。地寂光の豆腐茶碗酒の。樂もかくやと思ふばかりの膾かな。地あひよすけよといふ紅の前垂膝に打靠れ。フシ可愛奴とぞ戯るゝ。地かゝる所へ右衛門督平正盛參上と。案内すれば喜之介小糸。口上の趣を奥へかくとぞ取次ぎける。地清原の右大將出迎ひヤア正盛。詞近うと對座に請じ。扱も御邊と某昨日迄泊々同宿にて。名所古跡の物語旅宿の徒然忘れしに。今宵は頼光めにさへられ思はぬ別宿明日の泊を待ち兼ねる。今宵の淋しさ推量あれとありければ。正盛謹んで。御懇意の餘り申し上げたき仔細の候。其の故は某が家來物部の平太と申す者。先年坂田の前司忠時と申す浪人侍と口論し。彼の坂田を討ちは討つて候へども。彼には男女の

子供あり親の敵と狙ひ。若し平太めを討たせては某武道立ち申さず。一寸も側を離さず旅の末まで召連れ。幸ひ君と御同宿御威勢を以て昨夜まで心安く臥したるに。地今宵野端の別宿平太めに過も候うては。弓矢の不覺あはれ彼の者御次に一宿せさせ下されば。生々世々の御厚恩といひも切らぬに右大將。ヲ、何より以て易い事其の者これへといふ間に。駕籠を内へ昇据ゑさせ六尺ゆたかの大男。日影見ぬ目の色青く。月代伸びて髻長く。ツシ野邊の薄に異らず。詞右大將近く招き。物部の平太とは和主よな。敵持の用心尤ながら此の高藤が圍うたり。某が威勢の程人間は愚か。鬼神にても某が側近く狼藉仕出し。指でもさ、ば天子に弓彎く朝敵同然。身を知らぬ者やあるべき何の用心月代剃らせ揃けづり。世間廣くのさばれ高藤がかく言ふからは。樊噲張良に抱かれて居ると思ふべしと。過言上なく罵れば正盛悦び有難しく。彌々頼み奉る。明朝御見舞ひ申さんとツシ一禮。してぞ歸りける。地喜之介小糸は襖の蔭後先とつくと聞届け。詞あれく父様討つた平太めに極つたり。地日頃頼みし契約は今宵ぞや。女の腕にて仕損ずるは必定。必ず後を頼みますと小褻引上げ身繕ふ。喜之介押へて急ぐまいく和女に兄御もあるけな。其の兄も出合はずまして女の仕損じては恥辱なり。粗ごなししてやらう止を刺せば

同然と。躍り出づればア、忝い。とてもものに父様の護の銘の物。常に人の氣のつかぬ思ひがけのない所に地取つて置いたと一間床板疊を引上ぐれば。一腰の金作人こそ知らね紫の。虹立騰る名劍のツシ不思議と後に知られる。地喜之介鞘口抜き見れば氷の焼刃玉散るばかり。サア本望は遂けたるぞ必ず急ぐまいくと。いふも關路の朝鳥ツシ飛立つ心で道理なる。それく奥から行燈提げて誰やら来る。怪しめられなと目弾しちやつと忍べば小糸反らさぬ顔鼻唄で。座敷取置く玉箒ツシ紙屑拾うて居たりけり。敵の平太燈火背けこりや女物頼まう。詞明日のお立は明六つ。其の點に合ふ様に月代一つ頼みたし。上手な髪結あるまいか。アイくお易い事。どりや呼んであけましましよと起たんとすればいやく。些様子あつて男はならぬ。地女の髪結あるまいかといへばはつと心付き。詞なうくお前はお仕合せ。私は地體町代の娘。地髪月代一通りは小額肩際中剃逆剃刮剃。お顔はたつた一剃刀にごしくく。唇なりと鼻なりとお首なりともころりつと剃落して上げませう。詞ア、忌々しい氣味悪い。地仇口きかすとはや剃れと。剃刀出し髪おつさばき椽先の水桶に。頭浸して紅葉ばの焦る、小糸の心の内。喜之介は襖の陰今や出でんく。と互に目配せ氣を通しこれく頭がまだ揉めぬぞ。かう剃りか、つて氣

を急ぐ事は些ともない。揉めぬうちに刺りかゝれば刺刀が外れると。いへども更に氣も付かず。消ゆる命は塵取に、フシ落つる雫のはかなさよ。地サア今が大事の益窪。俯かんせと髪撫上ぐれば喜之介は。襖を密つて締め明けに後に立つても親の敵聲をかけぬは口惜しと踏ふ色を女は悟つて。申し旦那様。お前は強さうなお侍。定めし人斬らんした事もあらうの。チ、斬つたとも斬つたとも。地チ、その斬つた坂田が娘糸萩。親の敵といふより早く抜討の。首に連ねて髭一房。兩膝かけて一太刀に、フシ水を切つたる如くなり。地サア仕果せた立退んとかひんくしくも首提け。女を小脇にしつかと抱き、フシ一散にこそ落失せけれ。地右大將が侍ども何事と走り出で。南無三寶平太討たれ候と。呼ばはる聲に高藤断出で地踏躑躅んで。詞エ、口惜しや無念やな。正盛に向つて詞なし。地よし地を潜り雲に入るとも高藤が威勢にて。搦捕らで置くべきか追つかけ討ちとれ者どもと。怒れる聲は松吹く風月日に擬ふ目の鞘の。佐夜の中山手分して上を下へと三重へ返しける。フシ二人は漸々。地宿端まで走りつき。振返れば追手の提灯八方を取巻きて。落ちんすやうこそなかりけれエ、口惜しや。生中追手に討たれんより御身を害し。腹切らんとは思へども敵に首を取返され。我等が首をも渡さん事屍の上の無念なり。地誰が泊か知ら

ねども爰を頼んで刺違へ。死骸を隠して貫はんと碎くるばかり門の戸叩き。詞粗忽ながら我々は親の敵を討つて。立退く折柄追手殿しく候へば。何方かは存ぜねども御庭を借り切腹仕り度く候。御惠頼み奉ると大音揚げてぞ申しける。地所こそあれ頼光の泊の宿。渡邊聞くより飛んで出で。實否知らねど敵討とは心地よしと。手づから門を押開きサア圍うたおはひりやれ。攝津の守頼光の旅宿。かくいふは渡邊の源五綱。日本國が怒つても蚊の喰ふ程にも思はばこそ。地緩りと休息あれと元の貫の木しつと下し。フシ御前に作ひ出でにけり。地頼光對面ましまし。同彼等は夫婦か兄弟か。假名實名敵討の首尾具に聞かんと宣へば。さん候某は信濃國碓氷の庄司が伴幼名は荒童丸。父歿して孤となり當所に賤しき下司奉公。此の女と傍輩の好に承れば。此の女が父坂田の前司と申せし者。平の正盛が家人物部の平太に討たせ。俱に天を戴かぬ恨を一太刀報せんと狙へども。一人の兄は行方知らず。女の力に叶ひ難き物語見捨て難く。地今宵清原の右大將の泊に敵を見出し。思のまゝに討取り首持參仕る。打物は此の太刀此の女が重代。智慧文珠の化身と傳へし。平泉の文壽實壽が千日潔齋して鍛つたる利劍の驗。片手なくりの一打に御覽候へ此の大首。女が持つたる鬚一房兩股兩膝只一刀に大の男。七つに切つたる

業物今宵の御情を謝せんが爲。此の女が献上御佩替とも思召さば。生前の悦猶御芳志には死骸を隠し給はれ。地サア今生に思ひ置く事はなし。いざ来い刺違へんとつゝと寄る。やれ渡邊あれ留めよと押分けさせ。太刀を抜いて御覽あれば。明々として芙蓉の開くが如く。文は星の列る如く光は波の湧くが如し。唐土晋の武帝は天下を治めて吳國の方に。紫の雲氣立つを奇しみに。雷煥といふ者天文を考へ。土中を掘つて于將莫耶の二劍を得たり。然るに此の宿に當つて紫の雲氣變きし事。遠き異國の昔を思ひ。必ず名劍あるべしと鷹野に事寄せ一宿せしに。地今宵此の太刀手に入る事源家の武功天に適ひし其の威徳。首を討つ餘りの鈍風にも散る鬚を切り。兩膝かけて落ちたる事日本無雙の名劍。名は體を現せば則ち鬚切膝丸と名付くべしと。謹んで頂戴あり御子孫長く傳りし。フシ和國の寶となりける。詞扱其の女に兄もあるとや重ねて故郷へ送るべし。荒童には我が頼光の光を譲つて。碓氷貞光と名乗。地奉公せよとの御詔の趣二人はあつと頭を下け。フシ悦び涙を流しける。地かゝつし所へ平正盛大勢を引牽し。詞門を叩いてヤアく頼光。忝くも右大將殿の御前近く。人を危めし暴者を引込み。天子同然の右大將殿を軽しむるは朝敵にも勝つたり。女童に繩を懸け。頼光渡邊主従共に切腹せよ。異議に及

ば、踏込んで。片端に踏殺さんと傍若無人に罵つたり。渡邊くつくと噴出し。ヤイ天子同然とは誰が事。己れ等腕は叶はず手は立たず口ばつかりは人らしく。官位を以ての威しは喰はぬ喰はぬ。さり乍らざしみ合ふも大人氣なし。サア渡す請取らば取つて見よと。地門の戸さつと押開きすつくと立つたる其の勢。正盛主従色違ひ。フシ膝わなくとぞなりにける。地荒童つゝいて飛んで出で。詞是旦那宵までは旅籠屋の下司喜之介。今は頼光の御家人碓氷貞光。渡せよ出せといはずとも幸ひ此處も旅籠屋なり。此處へ来て搦捕れサア地這入らせ泊らんせ泊りぢやないかえ。旅籠の料理はお望み次第頭から爪先まで。刻んでくゞくゞ汁。眞二つに胴切の血腥い焼物冥土の道は合宿なし。焦熱地獄の水風呂も沸いてござんす。ざつと行水阿鼻地獄。泊らんせくゞ泊りぢやないかと招きける。地右大將高藤遅れ馳に駈け來り。詞ヤア臆したるか正盛。頼光渡邊なればとて鬼神にてもあらばこそ。後詰は高藤と地いふより正盛悍り出し。乗込んで踏潰せ承ると切つて入る。源氏方にも餘さじと。兩勢どつと入亂れ火水に。なれとぞ三重、戦ひける。地頼光は忍びの旅小勢の供人大半討たれ。貞光渡邊只二人攻來る敵の眞甲腕骨。胴切縦割車斬薙立てくゞ三重、追捲る。フシさしもの大勢。地しどろになつて見えけるが近

郷の農人浪人右大將が威勢に與し。我もくくと入替へくオクリ射る矢は。雨の如くなり。貞光も渡邊も心は彌猛に逸れども。飛道具を防ぎかね何と貞光。調若し我が君に掠矢でも當つては末代の瑕瑾。一先づ落し奉らんと彼方此方と見廻れども。皆高塀に圍は堀裏門堅く鎖したり。ヤア此の門一つ押破るは易けれども。後より寄手の込入るも喧し。上へそつと持上げて蹴込の下より落し申さん尤と樓門高き瓦葺尺に餘りし四角柱。二本を二人が面々に引抱へて。ヤアえいやうんと掀ぐればさしもの大門礎離れ。天より釣つたる如くなり頼光も笑はせ給ひ。調門を衛る金剛力士仁王を家來に持つたれば。我が行く先は關もなし女は兄が行方を尋ね。地兄弟打連れ來れ一足も早や落ちよ。我は美濃路を上るべし汝等も粗に切散らして追付けと。悠悠として退き給ふ。フシ御有様ぞ不敵なる。地其の隙に寄手の軍兵餘すまじきと込入つたり。兩人今は心安し雜人ばら一人宛。切つては手開遠はか行かず後日に此の門建直して遣るばかりと。門柱引放し手手に提げ大勢を左右に受け。醉象が岩を割り飛龍の波を叩くが如くはらりくと三重へ薙立つる地ツメ馬も人も堪らばこそさしもの大勢打込がれ。高藤正盛力なく後をも見ずして逃去れば。チ、面白し心地よし君に追付き奉らん。疾うく急げどうく。どうと踏

んだる街道も武勇の道も一筋に。古參の渡邊新參の確氷の貞光奉公始め。門に手柄をあらはして仁王二天に四天王出づべき兆と聞えける。

第二

地松浦瀧領巾庵山の石よりも。積る思は猶重き岩倉の大納言兼冬公の御娘。澤瀧姫と申せしは源の頼光と。御縁邊の契約も互に待てば久方の。月日重なり年も経ち情盛も徒に。右大將高藤が讒言故。頼光は行方なく御文の音信さへ。スエテ枯野に弱る秋の蟲。世に便なき憂き節に。地若し御短慮の事もやと。御寢間の奉行寢ずの番。女中の外は男混ぜずの大役は。フシ女護の島に。異らず。地お局の藤浪御側に立寄り。詞なう爰なお子。なぜに浮きくなされませぬ。これ程大勢集つて浮世嘶の高笑も。皆御前を勇めの爲お煩でも出た時は。親御様への御不孝。地日頃の御氣に似合ひませぬと。勇められても勇まぬ顔。地ア、又局の氣詰な意見聞きたうない。日本國の花紅葉を今此の庭に移しても。なんの心が勇まうぞ。地吉日極り頼光様へ嫁入して。今頃はお腹に帯をも結ぶ筈を。あの右大將づら奴に妨げられ。剩へお行方知れず。何處を當所に一筆の。問はせの文さへ。フシ長枕。地此の長夜を誰と寝よおりや泣くまいと思へども。涙が如

何も堪忍せぬこらへてたもととはらくいと。玉を貫ぬく御目許。腰元茶の間仲居まで御道理様やと諸共に、ッシ貰ひ。涙にくれければ。地お局は氣の毒がり。ア、なんぞいのお力はつけもせで。和女衆までめろくと忌ましくしい置いてたも。ヤアそれはさう煙草賣の源七はまだ見えぬか。氣さ、者の通者今にも來たら。御姫様まじくりに迎ひ鬼して遊ぶまいか。地こりや氣の替つた思ひ付き早う煙草が來れかし。煙草々々と待つ宵の。松葉たはこの柔こきオクリ女中へ仲間ぞ賑しき。ッ昔は色に。上り詰め。地今は浮世に下り坂田の時行と。埋れし名も父の仇晴さんと思ふ志。厭かぬ夫婦の中をさへ三行半の生別れ。袖は涙の革行李を今は身過と引擔け。刻煙草。ッ油引かすと賣り歩く。そりや煙草が來たわと腰元中早うくと呼入れ。調これ源七先づ此の革籠は預る。尻褌も下しやいのお姫様より御意がある。此方も以前は歴々で悪性故に仕損ひ。その姿になりやつたけな。傾城とやら廓とやら大内には珍しき。三味線の一曲を常々にお望故。コレ三味線も調へ置くサアく所望とありければ。ア、つがもない。尤以前は傾城の一つ買も仕り。三味線鼓弓淨瑠璃文作野良一卷の諸藝なら。地此方へ任せておく座敷に吉野の山の連彈も。昨日の昔今日は又吉野煙草の刻賣。股引懸で三味線とは。茶漬に鯉の御望みひらさ

ら御免と逃出づるを。女房たち引留めて其のいひ様がもう面白い。何をいふもお氣慰め平に頼むと強ひられ。地源七下地好の道てんほのかはやりませうと。箱より出す三味線の。地絃は昔にかはらねど彈く其の主の成れの果。親の撥駒ナホス紙駒の音色優しく。三重へ彈きなせり。紙衣の袖に。置く露と。共に離れし妹背の中。あはれ昔は全盛の。松の位も。ッ冬枯れし。風呂敷包。行く先は。知らぬ旅路にとほくと。スエテ築地の蔭に休らへば。ヤア地珍しい三味線。なんほ大内方でも洒落の浮世に廻り來る。車寄より立ち聞けば。ハ、ア調不思議やあの小唄は。我が身廓にありし時坂田の藏人時行殿に馴初め。地作り出せし替唱歌。彼の人ならで誰が傳へた懐しや。どうぞ入込み見たいものぢやと出放題に聲張上げ。詞是は浪花の遊女町に。誰知らぬ者もない傾城の右筆。濡一通の狀文なら恐らく私が一筆で。叶はぬ戀も假名書筆。びらりしやりのかすり墨生娘遊女妾者。後家尼人の女房まで段々の書分は。私が家の傳授事。若しそんな御用なら。ッお頼みあれとぞ言ひ入れたる。地奥には女中耳を澄しさつても變つた賣物。いざ呼入れて痴話文書かせてお慰。更科掃部呼んでおじや。あいと答へて二人連にて走り出で。調これなう傾城の右筆殿は此方か。此の御殿の姫君何やらそもじに御用あり。此方へいざと手を取れ

ば。ハア地御用とは何ならんお目もじさまにと夕顔の庭の飛石すなくく。ちよこくく
 と奥座敷へ。何の遠慮も並み居たる。内裡上臈に場うてせぬ。フシいづれそれしやと見えにけり。
 地煙草賣の源七も何心なく側近く。顔と顔とを見合すれば。ヤア離別せし女房南無三寶とこ隠
 の。女はそれと水臭き男畜生人でなし。赤恥か、せて退けうかと飛立つ胸も人目の關。押鎮め
 押鎮め、心を碎き折々に。フシ後目に睨むも戀なれや。地姫君何の氣もつかずこれなう紙衣そなた
 の物ごし袂外れ如何様常の女子でなし。さうした姿になりやつたは定めし深い譯あらん。一河
 の流も他生の縁包ます語りやとありければ。調ア、何方かはお優しいお詞。お尋ねなくともい
 ひたうてく胸のたぐる折しも。さらばお咄し申しませう。恥しながら私が昔はうき河竹の傾
 城。萩野屋の八重桐とて太夫仲間の立者と。いはれし程の全盛の末も遂けぬ仇戀に。登り詰め
 て此の通。地夜なく變る大盡の中にも坂田の某とて。水揚の初日よりふと逢ひ初めて丸三年何
 が互の浮氣盛登る程にける程に。切利天の中二階夜晝なしの床入に。掛鯛様と異名を受け水も漏
 さぬ仲なりしに。調又同じ靡に小田巻といふ太夫。彼の男に行きつきて毎日百通二百通。書き
 も書いたり痴話文は大方馬に七駄半。船に積んだら千石舟。車に載せたら地えいやらさ。木遣

でも音頭でも祈つても呪うても微塵でもない二人が仲いよく募つて逢ふ程に。小田巻大きに
 腹を立て忘れもせぬ八月の。十八日の雨上り月は山より朧染の。襦ひらりと取つて捨て。白無
 垢一つに引抜き脛もあらはに駈來り。私が膝にふうわりとんと居懸つて。これ八重桐。あんまり
 見られぬ嫌ぢやぞやサア。男をたもるかたもらぬか否か應か否か。二つに一つの返答が聞き
 たいと。胸づくしを引摺む。此方も一期の大事ぞと弱身を見せずこりや。調小田巻とやら管巻と
 やらひかりは喰はぬ出直しや。地此の廣い日本にあの人ならで男はないか。よし無いにせよ有
 るにせよそれ程ゆかしい男なら。何故に先に惚れなんだ男盗人いき傾城と。いひ様取つて投げ
 付くれば明障子打破り。繼三味線を踏碎き椽より下へころくくと。這柏楨まで。こけかゝり。
 木櫛南天めつきりく切石の上へ眞俯向。岬は一石六斗三升五合五勺。そりやこそ喧嘩が始つ
 た大事の此方の太夫様に。引をつけては叶ふまい加勢をやれという程に。遣手引舟仲居飯炊
 出入の座頭按摩取。巫女山伏に占屋さん雪踏片足に下駄片足。草鞋掛で来るもあり。臺所から
 座敷迄太夫様の仕返しと。彼處では叩合ひ此處では撲合ひ踊合ひ。茶棚煙草盆あたる物を幸
 に。打めぐ打破る踏碎くめりくびしやりと鳴る音に。そりや地震よ雷よ。世直し桑原々々と。

我先にと逃さまに水擔桶盥にこけかゝり。座敷も庭も水だらけになる程に。南無三海嘯が打つて来るわ喃悲しやと喚くやら。祕藏の仔猫を馬程な。鼠が啞へて駈出すやら。屋根では鼠が躍るやら。神武以來の俗氣爭。フシ此の事世上に隠れなく。地彼の男は其の場より親御様の勘當受け。我が身も廓を夜脱して根本戀路の浮名とる。鍋の蓋取る杓子取る馴れぬ世帯の其の日過ぎ。男奴故で御座んする。ア、詞あんまりしやべつて息切れた。お茶一つ下さんせとぞ語りける。地姫君をはじめ腰元衆。扱心中の女郎やたとへいかなる身になつても。思ふ男と添ふからは面白からうと宣へば。詞されば末を聞いて下さんせ。其の男の父親が。闇討に討たれ敵討たねば叶はぬと。私とは縁を切り行方もなう別れて。親の敵を狙ふとは跡方もない赤噓。地我が身に秋風立ちけれども何を機に退かれもせず。親御様の死なんしたを屈竟一の托言に。敵討との口上は釋迦でも一杯參る事。まんまと私を誑り女房には紙衣を着せ。其の身はちやんと榮耀らしい若い女中に立交り。三味線彈いて居けつかり。くさりくさるを見る様な。日本國の姫御前の因果を一つに固めても。我が身には及ぶまい初對面の皆様へ。ありし昔の懺悔話。お恥しやとばかりにておろく。涙にくれければ。ヲ、詞道理々々身にかゝらぬ此方とさへ煙たうて堪

られぬ。さりながら構へて短氣な心を持ちやんなや。地未だ咄したい事もあり奥へ通せと姫君は。御簾の内に入り給へば。サア苦しくない奥へおじや。此方へくと人々はオクリ皆々、一間に入り給ふ。地後見送つて八重桐さらば奥へ參つて。憎さも憎し男の懺悔。いうて退けうと入らんとするを。時行取つて引戻しはつたと睨め。エ、詞さすがは流の女ぢやな。親の敵を討つまでと相對づくの離別ならずや。只今の詞は誰にいふ當言。未だ敵の行方は知れず心を碎く夫の體。地哀とも思はず己が榮耀に引當て。面白さうな仇口。エ、恨めしやとばかりにて無念涙にくれければ。女房いよ、嘲笑ひム、詞あのまがくしい顔わいの。親の敵は幾人あるぞ。此方の妹御系萩とやらんが。先月廿三日佐夜の中山で討ち給ふ。物部の平太は敵ではないかいの。時行はつと驚き。何妹が敵平太を討つたるとは必定か。サ定か實か確氷の荒童といふ人を語らひ。易々と討つて源の頼光様を頼み。駈込みしとは日本に隠れない事と聞きもあへず。南無三寶。地天道にも見放され。弓矢神にも捨てられし。口惜しの運命やとスエテ我が身を搦んで泣きるたり。地女房側に立寄つて。これなう今悔んで済む事か。詞忝くも頼光様。妹御を匿へ給ふ遺恨によつて敵の主人。右衛門督平正盛。清原の右大將と心を合せ。頼光様を讒訴し。地勅勘

の身となり給ふこれ程大きな騒動を。今迄知らぬとは狼狽者の浮名を。世間へ觸れうといふ事か。前後を思案して下んせ。日頃の心に似合はぬの。エ、疎しい世に連れて。心までが腐つたかとスエテ縋付いて泣きければ。地時行突立ち。扱は敵故頼光の御難儀となつたるとや。妹に先越され。親の敵は討たずとも。正盛右大將は敵の敵なり。いで二人が首とつて頼光の御恩を報じ。名字の恥を雪がんと跳出づるを引留め。それ／＼それは悉皆氣違か。討つに討たるる程ならば頼光様に油断があらうか。彼等は威勢真最中討たれぬ仔細があればこそ。日蔭の御身となり給ふ此方が今断出して心易く首取らうとは重ねて恥がかきたいか。此方が今迄色好み(いたづらで)〔山本版〕娘をころりと墮したと。首をころりと落すとはフシ雲泥萬里と恥しむる。地時行ほうど行詰りアツアさうぢや過つた。然らば是より頼光の御行方を尋ね。御家來となり御威勢を籍つて正盛が。首引抜かんと断出づるを又引留め。地たつた今恥しめた舌も引かぬに無分別。武勇正しき頼光様。御内には渡邊源五綱とて。一騎當千の兵。同じく確氷荒童。鬼も欺く其の中へ生温い姿をして。妹に先越され敵を討たぬ無念故。御奉公致したいといはれうものかいはしやるか。御取上もない時は地すご／＼とは戻られまい。棒戴いて戻ろより往かぬ方

が遙に優し。どうぞ分別はないかいの。エ、情ないお人やとフシ突倒してぞ泣き居たる。地時行道理に責められて行きつ戻りつ齒嚙をなし。拳を握り立つたりしが。もう此の上の分別なしと革籠の中より。氷の様なる鎧通押取り。腹にぐつと突立て。脊骨をかけて引廻す。女房これは狂氣かと。スエテ縋り付けばアツ／＼音高し／＼。御事が今の悪言は伍子胥が吳王を諫めたる。金言より猶重し。恐らく此の一念項羽紀信が。勇氣にも劣るまじと思へども。地時來らねば力なし。それ迄まだ／＼存らへ臆病者腰拔と。指さ／＼れんは無念の上の無念なり。詞我死して三日が内御身が胎内に苦みあらば。我が魂宿りしと心得十月を待つて誕生せよ。神變稀代の勇力の男子となつて。今一度人界に生れ出で正盛右大將を滅さん。地御事が身も今日より常の女に事かはり。飛行通力あるべきぞ深山深谷を住家とし。生る／＼子を養育せよさらば。／＼と諸共に。劍を抜けば紅の血は夕立を争ひし。フシ最期の念ぞ凄じき。あら不思議や切口より焔の塊女房が。口に入ればうんとばかり其の儘息は絶えてけり。地斯る處に若侍五六十無二無三に群つて。館の四方を押取巻き。詞ヤア／＼兼冬。右大將高藤公より汝が姫を召さるれども。頼光と縁組とて承引なき條憚り千萬。それによつて姫を引立て來るべしとの御使。亂れ入つて奪取

れと。喚き叫ぶ其の聲に。兼冬公驚き給ひ。ヤア主ある娘を奪はんとは人畜類の右大將。返答するに及ばずあれ追散らせと宣へども。地いふにかひなき公家侍防ぐ方なく見えたる所に。伏したる女むつくと起き表に立つたる奴原を。取つては投げく。姫君の在します。御簾を圍うて立つたるは。フシ宛然。鬼女の如くなり。地正盛が家の子太田の太郎。數にも足らぬ下司女何事か仕出さん。あれ引出せと下知すれば。何某を女とや。ヲ、女ともいへ男なりけり胎内に。夫の魂宿り木の梅と櫻の花心。妻となり子と生れ思ふ敵を空蟬の。體は流の太夫職。一念は坂田の藏人時行その證これ見よと二抱餘りの掠の木を片手振にエイ。やつと捻折つて寄り來る奴ばらばらくく。はらりくくと確立つるは人間業とは。三見見えざりけり。フシ此の勢に。地恐れをなし返し合はするものもなく。フシ皆散々に落失せけり。ヲ、さもさうずさもあらん我が魂は玉の緒の。お命恙なく行末待たせまじませと姫君に一禮し。今よりは我何處を其處と白妙の三十二相の容顔も怒れる眼物凄く。島田解けて逆様に忽ち夜叉の鬼瓦唐門。樓門四脚門塀も築地も飛越え跳越え跳越え飛越え雲を分け行方も。知らずなりにけり。

第三

地倭人の詞は甘き事蜜の如く。人を損ふ事及より猶速なり。清原の右大將平正盛に荷擔し。源の頼光武勇に誇り狼藉者を引込み。民家を騒し我々が手の者大勢討取り。剩へ都まで切上らん企。上を輕しめ下を傾け候と。再三讒訴しきりなれば。遂に奪成乳虎の牙にかつて。邸都蒼鷹の忠臣の翼も折れ。勅勘の身となり給ひ美濃の國。能勢の判官仲國は累代の被官といひ。内縁深き好によつてオクリ暫時。忍び在します。地判官の妻小侍従一子冠者丸十六歳。夫婦親子等閑なく。家内の男女勞り仕へ奉り。御心置く方も。フシ夏過ぎ秋も始めなる。西面の欄干に。色々の燈籠を飾らせ。此の夕暮の御徒然と御鷹を參らすれば。地頼光も淺からぬ淺茅が露に燈籠の。光合ひつゝ玉しける昔の秋を思出し。數盃を傾け興に入り。長歌作り朗詠しオクリ給ひ。給ふぞ面白き。

燈籠の段

フシ 數々廻る觴の。影に映ふ燈籠の。色を換へ品を換へ切籠太鼓のなりもよし。籠に入れたる造花オクリ桔梗。蓮葉藤の花風に。揉れて。フシ百合の花。歌あの奥山の。一本薄。いつ穗に出でて亂れ。亂れあふひの。フシ花菖蒲。我が思は深見草。小オクリ誰か。憐と白菊や紫苑岩菲に罌粟

繡線菊の花桶に。枝垂櫻や絲櫻(柳イ)。フシ水なき空の釣舟も。焦るゝ色の。紅椿手鞠山吹。杜若。歌仙の姿置揚に。文字を透のすかし燈籠額燈籠。フシ手際優しき。花葛。フシ振分髪を比べこし井筒燈籠井戸屋形オクリ這纏へはるゝ朝顔の花の臺の輪々毎に。フシ灯す燎火きらくと。さながら秋の。地螢飛び交ふ宇治川の。網代燈籠扇子燈籠洲濱團扇唐團扇。扇車に水車。フシ油煙に。つれてくるくゝと廻り燈籠。影燈籠。月も更け行く夜嵐に。歌廻れくゝ品よく廻れ風車。小車。花見車に忍びの車ア、くゝ百夜の車。餘所に主ある袖引くな。袖襖引くな。フシ女郎花。地戀を董か美人草。四季に色ある造花。フシ手を盡。してぞ飾りける。地頼光甚だ興に乗じ酒宴。酬の折柄。渡邊の綱碓水の貞光御前に罷出で。詞實に此の度判官殿の忠節にて。我々まで安座の段淺からず候へども。何時までかく悠々としてもあられず。御大將は誰あらん忝くも六孫王の御孫。攝津の守源の頼光。郎等には先づ此の渡邊新參の碓氷の貞光。地一席にたゞ二人なれども兩腕に百人宛。胴骨にも百人づつ。押取つて此の座にばかり六百騎。何を浮々待ち給はん。詞惡道には。方人多く直なる道には入る者少し。右大將が威勢を籍つて平家盛の世とならば。正盛四海を一呑にし萬民の歎遠かるまじ。地兩人お暇賜つて都の體をも窺ひ。諸國の御家

繡線菊の花桶に。枝垂櫻や絲櫻(柳イ)。フシ水なき空の釣舟も。焦るゝ色の。紅椿手鞠山吹。杜若。歌仙の姿置揚に。文字を透のすかし燈籠額燈籠。フシ手際優しき。花葛。フシ振分髪を比べこし井筒燈籠井戸屋形オクリ這纏へはるゝ朝顔の花の臺の輪々毎に。フシ灯す燎火きらくと。さながら秋の。地螢飛び交ふ宇治川の。網代燈籠扇子燈籠洲濱團扇唐團扇。扇車に水車。フシ油煙に。つれてくるくゝと廻り燈籠。影燈籠。月も更け行く夜嵐に。歌廻れくゝ品よく廻れ風車。小車。花見車に忍びの車ア、くゝ百夜の車。餘所に主ある袖引くな。袖襖引くな。フシ女郎花。地戀を董か美人草。四季に色ある造花。フシ手を盡。してぞ飾りける。地頼光甚だ興に乗じ酒宴。酬の折柄。渡邊の綱碓水の貞光御前に罷出で。詞實に此の度判官殿の忠節にて。我々まで安座の段淺からず候へども。何時までかく悠々としてもあられず。御大將は誰あらん忝くも六孫王の御孫。攝津の守源の頼光。郎等には先づ此の渡邊新參の碓氷の貞光。地一席にたゞ二人なれども兩腕に百人宛。胴骨にも百人づつ。押取つて此の座にばかり六百騎。何を浮々待ち給はん。詞惡道には。方人多く直なる道には入る者少し。右大將が威勢を籍つて平家盛の世とならば。正盛四海を一呑にし萬民の歎遠かるまじ。地兩人お暇賜つて都の體をも窺ひ。諸國の御家

人驅催し科なき旨を奏聞し。佞人ばら一々に搔首し。御本意遂けさせ奉らん。如何にしても
 此の様に安閑として暮しては。筋骨たるんで精根盡果て候へば。フシ早やお暇とぞ申しける。
 頼光聞召し我もさこそ思ひつれ。さあらば兩人は伊勢路紀の路へ赴くべし。我は又北國にか
 かり源氏志の勢を集め。都九條六孫王の誕生水にて出會はん。門出といひ貞光には未だ主従
 の盃せず。名乗の一字を譲る上は向後源氏の家の子ぞと。御盃を下さるゝ貞光しきつて頂戴し。
 天が下に二人ともなき大將軍を主君に持ち。下地の勇力十倍増し。一騎當千と思召されと三
 杯續けてつゝと乾す。地能勢の判官座を立つてヲ、目出度し。貴殿渡邊殿の武勇に肖り申
 す爲。其の盃を一子冠者丸に下されかすとありければ。御辭宜も申すべけれども武勇に肖り
 給ふ爲。地お望に任せんと差す盃を冠者丸。戴きく敬ふ體母は見るより打萎れ。袂を顔に押當
 て、スエテ包む涙も。おのづから、フシ聲に現れ色に出で。地人々これはと御座敷興覺めてこそ見
 えにけれ。判官見かね御祝儀の折柄。不吉の落涙狂氣したるか。罷立てと引立つる。渡邊止
 めて。ヲ、尤々。貞光の盃不足に思はるゝ事。母御の氣には道理至極。爰は綱が頂戴せん。冠
 者殿いざ差し給へといひければ。地母はやうく涙を押へ御不審は御理。貞光殿をゆめく輕

しむにても候はず。我が身の運の拙さと彼の子が果報の薄き事。日頃よく思ふ事思ひあまりて涙が溢れ御祝儀をさませしぞや。御大將にも綱殿も御存じ貞光殿への物語。妾は初小侍従の局とて。御父満仲公に宮仕へ。源氏の胤を身に宿し誕生せしはあの若美女御前と附け給ひ。御寵愛ありしかど。頼光様の御母。御臺所の御心を憚り。出家にせんとて十一の春より十三の秋まで。山へのほせ給ひしに。經の一字も習はず斬つゝ張つゝの弓馬の藝。満仲公の御慣宥めても歎きても。スエテ御憎み晴れやらず。地藤原の仲光に仰付けられ。首打たるゝに極りしに。情ある仲光忠義を重んじ我が子の幸壽丸を害し。彼の子の首とて見せ参らせ。當座の命は。フシ助かりしが。地終に其の事顯れ二度の御勘氣御立腹。御親子の縁切れて妾一所に判官殿に下されし。御今自らは能勢判官仲國が妻。あの子は一子冠者丸とは申せども。地もとは満仲公の御子頼光の御弟。美女御前にておはします。ア、悲しきかなや同じ源氏の胤と生れ給ふ程ならば。御臺所の御腹にも宿り給へかし。然らば出家の御沙汰もなく頼光様は大將軍、あの子は又副將軍と千騎萬騎の軍兵も。從へ靡け給はん御身の末代に遺る源氏系圖の卷にさへ。美女御前といふ名を削つて入れられず。漸と郷侍。龜取の大將とは。痛はしともあさましとも。數なら

ぬ此の女のスエテ腹をからせ給ふ故。地御出家と仰出されしが。果報の花の散り始め。井手の蛙のフシ蟬斗の。地小さき時は尾緒ありさながら魚の如くにて。母蛙が親に似ぬ龍を生みしと悦べども。次第に尾緒が手足となり常の蓼となる故に。歎き悔むと傳へしがそれは天地自然の道理。自はたましく源氏の大將産落せし。悦は夢なれや覺めては平人の子となり給ふも。此の母が戒行の拙き故と積る涙は濁江に。夜晝鳴かぬ隙もなき蝦蟇に劣りし此の身やと。御前も人目も打忘れスエテかつばと伏して。泣きければ。君をはじめ渡邊貞光諸共に。フシ皆々。袖をぞ濡らさるゝ。地や、あつて頼光小侍従の悔み至極ながら。御子を見る事父に如かずといへり。満仲の深き御心入れこそありつらめ。今右大將正盛等が逆威に責められし頼光が。弟美女御前とあるならばかく安穩にあるべきか。地判官が子となりし故先づ今度の難を遁れし事。父の慈悲のこれ一つ。御勘氣の上からはもとの如く出家ともなし給はず。判官が子に賜つて弓矢の家を立てさせらるゝ。父の慈悲のこれ二つ。我世に出でてもあるならば末を見よや三つの慈悲。親の形見は兄弟ぞと打涙ぐみ給ひければ。判官親子はあつとばかり渡邊も貞光も。末頼みある源氏の光挑け添へたる燈籠の。影に門出の盃やお暇。賜り。三重。立つ雲の。フシ明くれば文月。地中

の五日亡魂祭る持佛堂。北の方は唯一人香を燻き水手向け。棒ぐる花は蓮葉の露の数々亡き人の。頓證菩提と回向の折から。判官立出で同じく香華奉り。暫く念誦事畢り。地なう小侍従あれ見給へ。詞本尊は三世常住の佛菩薩。殊に今日は孟蘭盆にて親祖父の精靈。満仲公の亡魂も此の持佛堂に來らせ給ふ。尊靈の御前にて申すからは詞にも虚言なく心にも懸子なし。御身も亦偽なく眞直に返答あらば。語るべき事あり心底聞かんとありければ。ア、地いまめかし何事か存ぜねども。常にも偽り申すにこそ殊に大事の孟蘭盆の。年に一度のお客の精靈佛の前にて露程も。虚言のお返事致さうか。フシ語らせ給へと仰せける。判官點頭懐中より文一通取出し。コレは見られよ。頼光是に御座の由右大將傳へ聞き。急ぎ詰腹切らするか但し密に刺殺すか。首打つて出すにおいては。一子冠者丸は由緒ある者なれば。源氏の大将と奏聞し。取立てんとの文に起請を書添へ越されたり。地されども某かゝる非道に與すべきか。頼光を密に落し奉り。右大將より答に遇はゞ腹切るまでと、心に藏め打投ぐつて置きけるが。詞御身昨日の口説事。たま／＼満仲の若君を誕生せしかひもなく。平人の判官が子と埋るゝ冠者丸。明暮本意なく悲しゝと水に棲む蠚斗まで思ひつゝけて悔みの體。母たる身にては道理なり尤なり。畢

竟此の判官が爲には我が子にて子にあらず。現世の親とは御身の事。地頼光を失ひ冠者丸を世に立つべきや。後悔なき様に心の底を眞直に。聞かまほしゝとありければ小侍従はつと胸塞り。文繰返し巻返し。顔を傾げ目を塞ぎ胸に手を組み差俯き。思案とり／＼様々にスエテ暫く應答もなかりしが。ア、詞實さうぢやものなう判官殿。假令頼光様爰を助け落しても。斯く迄榮ゆる右大將御首を見ずしては。雲の裏にもよもや助け置くべきか。時には冠者丸も世に出でず。地一も取らず二も取らず源氏の破滅。此の時なり。痛はしながら討ち奉り冠者を源氏の大将軍。清和の系圖を繼がせんは我が身の幸あの子の果報と。いはせも果てずテ、皆まで聞くに及ばず。詞さこそ思ひて尋ねし事御首討つは今日の内。地用意せんと立つ所をこれなう。御身の爲には相傳の御主。世の譏天の咎佛神の怒も恐ろしゝ。自らが一太刀に嘯し寄つて刺通さん。場所は此の持佛堂千に一つも仕損ぜば。聲を掛くるを合圖に駈着けて首取り給へ。テ、潔し然らば御身討たれよと次の間に忍び居て聲次第に駈出でん。必ず急ぐまい氣遣なされな首尾よりとオクリ別れて座敷に立出づる。フシ跡見送つて。北の方恥しや男も女も慎むべきは舌三寸。子を思ふ餘りの詞に心を見探され。疑うくるも尤詞の言譯眞しからず。所詮御身代に冠者丸が首討つて

頼光の御難を救ひ邪なき誠の心。此の佛こそ證據ぞと貞女の道を守刀袂の下にフシ押隠す。数珠も我が子に。別れの涙。地今日一日を現世未來。障子を颯と明けければ冠者丸立出で。詞今日は佛事の日とは申し乍ら。片親にてもある者は分きて祝ひ日。地目出度くお顔見せ給へと。莞爾なるを見るにつき母は心も亂るれど。さあらぬ體にてヲ、此の祝日に。詞髪をも結はず取上髪は何事ぞ。頼光様は何方にまします。さん候築山の涼み所に御入。我等もお側にありけるが。残暑凌ぎ難く行水いたし髪も解き。地自鬢に取上げ見苦しからんと。つと搔撫つる手付手元も今の間の。記念と思へば胸通り。フシ物いふ聲もしどろなり。詞これ冠者丸現世の親より未來の親が先づ大事。地行水せしこそ幸ひ帷子着替へ身を清め。御經誦んで父精靈へ手向け。詞若き身とて。無常の命いつ何時の定めはなし。自他平等の回向しや。地あつと應へて冠者丸親の襲ぬる死装束。其の身はそれとも白帷子。フシ思染めぬぞ哀なる。地能勢の判官仲國は妻の小侍從頼光を。瞞討に討たんとは螳螂の斧。却つて御佩刀にかゝり顯れては一大事。あら氣遣はし胸安からずと佛間の妻戸に窺へば。靜にお經の聲聞ゆすはやこれぞ頼光の御聲。かく御心を許されし上は何事かあらん。物音のそよともせば妻戸一重蹴破つて。唯一討と鉦許抜きかけて耳

を欲て控へたり。冠者丸は一心不亂誦む御經の日も長けたり。ア、嘆くまい後れまいと母は刀をすりと抜き。後に立つは立つたれども。髪黒々と色白に讀誦の辯舌爽に。百人にも優れし性質見るに目も眩れ心消え。太刀振上げし手も弱り。フシ涙の。闇に迷ひしが。地扱可哀やな後より此の母が。斬殺すとは露知らず。慈眼視衆生福聚海無量と誦むが不便やな。親を殺す子にばかり天罰當るは何事ぞ。我が如く子を殺す親にも罰の當れかし。奈落に早く沈みなば此の世の思はせまいものと。太刀振上げては泣き沈み消え入つては又振上げ。聲をも立てずかつばと伏しからりと投げし太刀よりも。胸を切裂く思の刃。フシ涙。玉散るばかりなり。地御經も早卷軸の時刻過ぐれど討つも討たれず。詮方盡き判官殿は在はせぬか。出會ひ給へと呼ばはればさしつたりと妻戸蹴破り飛んで入る。冠者丸も飛退り。互に顔をきつと見合せ。フシ呆れて。詞はなかりしが。地母は泣くく、聲をあけ御不審は尤やれ冠者丸。詞右大將より頼光を討ち奉れ。御事を源氏の大將と仰がんとの内通。地判官殿の名の大事御身を害して頼光の御首と。敵を誑し御難儀救ひ、御身も母も末代に女の道忠孝の名を止めんと此の太刀を幾度か打付けん。くくとはしたれども愛しい可愛に目も眩み。どうでも母はえ討たれぬな、判官殿。はやく彼の子を

討つてたべ。詞こりや狼狽なお主といひ元は兄。地お命に代るは本望なり譽れなり。母方が賤しうて未練の最期と笑はるゝな。目を塞ぎ手を合せ尋常に討たれてたもと。口説き給へば冠者丸顔色さつと蒼くなり。わぢ／＼顛ひヤアなんと我等が此の首討たんとや。親分ながら判官殿はもと他人。頼みにしたる一人の母情なや慘らしや。假初の煩にも業よ炙よと宣ひしが偽か。首討たるゝ科ありとも助くるこそ親の慈悲。つれない母や恐ろしやと。逃けんとするを母飛菟つて引留め。エ、あさましや口惜しや。ヤイ科あつて討たるゝ程ならば母が此の身を。一分試に刻まれても見殺にするものか。詞子の命は親の命。假令御身が思切り捨てうといふとも捨てともない。御身が命は御身より母が百倍惜しけれど。地それを殺すは人界の義理といふ字に責められし。母が心を思遣れ死にともなくば殺すまい。せめて一言潔く弓取らしい詞を聞かせ。恥を雪いでくれよとてスエテ聲を揚げて歎かるゝ。詞判官嘲笑ひ。これ／＼御邊の心底は顯れたり。生きとし生ける者命惜しまぬ者やある。其の一命を義によつて捨つるを弓取武士と名付け。惜むは買人土民といふ。地左様の下郎を御身代に取つて何の益あらん。此の上は頼光の御運次第とありければ。冠者色を直しア、有難き御料簡。命一つ拾ひしと逃出づるを母取つて

引振る。エ、恥知らず可愛さも不便さも。ふつゝりと覺め果てたり長き恥を見せんより。母が慈悲ぞといふより早く抜打に討つ太刀風に。盛を待たぬ小椿や。フシ首は前にぞ落ちにける。地胸に塞來る涙を押へ髻提げ夫に近附き。詞過去の業拙く畜生を産み乍ら。人と思つて育てしは面目なくも恥しし。地斯る者を大將の御身代りとは恐れながら。我々が忠孝の志を立て給ひ。詞御情には君御出世の後までも。此の子が最期は健氣なりと必ず恥を隠してたべ。地いふにかひなき最期やと。フシ又咽返るぞ道理なる。地斯る所に外様の侍六七人馳せ來り。詞ヤア右大將より御返事遅しとて使度々に及び候。急々に有無の御返答然るべしとぞ申しける。地判官少しも騒がすあれ聞き給へ君の御難儀只今に極つて。先途の御用に立つ事は御身誠の志弓矢の冥加にかなひたり。とてもの事に最期清くせざりし事の残念さよ。血の別れとて容顔は頼光に似たれども。丸額と角額此の分にては渡されず。此の首に角入れば頼光に疑なしと。櫛笥引寄せ髪を解き元結とれば髻の中。一通の文を結込め母様參る冠者丸と書いてあり。夫婦不審晴れやらす扱は覺悟ありけるか。但は何ぞ望み事でもありけるかと。泣く／＼披き讀み上ぐる。聲も涙に埋れて。スエテ文の詞もしどろなり。松は千歳を盛とし朝顔は一時を一期とす。萬事は前世に定ま

る夢何を現を定むべき。然れば我等滿仲公の不興を受け。判官殿の子となり十三の春より十六の此の秋まで。養親の御厚恩申すにも、フシ言葉なく、地殊更母の御恩徳七生れ替りても。報じがたく存する折節、詞我が首討つて頼光の御身替との志。物蔭より見參らせ望む所と存すれども、常々母の御不便荒き風にもあてられず。御身に代へての、フシ御寵愛。地其の期に臨んで歎に沈みよもや討ち給ふまじ。所詮我等臆病者未練の體を見給は。御憎しみの怒の刃御心安く討ち給はんと。態とさもしき卑怯の最期。命惜むと思すなよ。西東覺えてより終に一度も御氣に違ひし事もなく。一生の別れ今はの際の御腹立御容顔。見奉らん悲しさはスエテ來々世々の迷なり。さりながら君には忠親には孝母の貞女の道立てば。身においての悦三世の諸佛も照覽あれ。命は更に惜しからず。悲しみの中の悲しきは。年長くるまで母上の御寢間近く起臥して。今宵よりの御歎思ひやられていとほしく。御名残は盡きせず返すべしと書止む。母は文を身につけ首搔寄せ。抱付いてかつばと伏し、フシ聲を揚げて泣き給ふ。地思ひ切つたる判官もわつとばかりに五體を投げスエテ消入るばかりに歎かる、フシ心の。内こそ哀なれ。地母は涙の際よりも。ア、人は筋目が恥しいさすが滿仲の御胤にてありしもの。此のお心とは露知らず臆病者なりと

心得て。賤しき母が口にかけて言恥しめたる勿體なさ。恐れがまし冥加なや中有の旅のお供して。言譯せんと太刀取上ぐれば判官押へてア、不覺なり。詞御身は慥に生の母。我ばかりは現在の主君死なば我こそは死ぬべけれど。地頼光かくと聞召さばよも存らへんとは宣ふまじ。時には此の子も犬死我々夫婦も不忠の者。地ツメ敵の使頻なり密に頼光を落し參らせ一先づ此の首の。額に智識の剃刀を戴く天の誠の道。守れば守る御佛に後世を任せて此の世には。忠義を磨く魂祭濁に。染まぬ蓮葉の花を君子に譬ふれば。儒佛の教暗からぬ人の。心ぞ頼もしき。

第四 源 頼光 道行

次第 〽 仇なりと名にこそ立てれ櫻花。〽。散りても地遂に根に歸る。フシ都の春を。恃みても。浮世の淵瀬常ならぬ。流の行方汲みて知れ。スエテ源の頼光は。判官夫婦が情にて。御命遁れしとオクリ又もや。餘所に杜の下風。木の葉の雫。フシ落人の身となり給ふ。地江戸戰場出陣の折ならで。召しも慣はぬ武者草鞋。スエテそれにはあらぬ藁沓に。御足を痛ましめ。草の露散る影にだに。今は憂身を置く方も。鳴子に、フシ噪ぐ。群鳥の散々別れ落ち給ふ。フシオクリ御有様ぞ。哀なる、フシ美濃のお山は。其方とも。いざ白菊や秣刈る。牧の童に道問へば。花に準へ

て小オクリ紫蘭。々々と子供さへ侮づる蔓葛蔓。這ひろがりて行く先を。フシ塞留めよと關が原。日高の杣も。打曇り颯と袂に一時雨。セツユリ暫時宿かる笠縫のフシ里を遙に。見渡せば。野分に亂す萩芒野守の鎧埋れし。浮世の曇吹拂へ伊吹の里に軒端蕘く。地舌は荒みて淋しきも。繪に寫しては美しき賤が藁屋に立つ烟消えては結び靡きては風のまに。フシ立迷ふ。地ア、人界の善惡に。誘れ靡く人心。スエテかくやとばかり觀ずれば。五欲七情様々の。罪を宇留間の里近き。友にも疎く親しきも不破の中山山深く。木の間に漏るゝ入相の。フシ鐘こつくと物凄く。溪の棧橋。跡絶えして。地峯に妻戀ふ鹿の聲。スエテ子を悲しみて猿啼く。夜半の鶴夜の鶴。フシ涙を添ふる種ならし。暮行く空は。風絶えて。四方の山々默然と坐禪の相を現せば。谷の川音森々と寢物語は美濃近江。國の境よ世の中の。盛者。心衰の堺かと。我が身に問へば我が答。否にはあらぬ稻葉山。後に見なして何時か復。世にも青野が原ならば。今は昔の世譚と思ひ續けて行末は。垂井赤坂青墓も。フシそれぞとばかり夕まぐれ。地松の嵐のどろく。さらく。さつと吹下し。雲の往來も餘所よりは早暮過ぎて物凄く。名をだに知らぬ山中に茫然。として三重。立ち給ふフシ草木茂つて。地嵐々たる岨陰横折れし。枯木の枝を見上ぐればこは如何に。

老若男女の血汐の生首梢にひつしと懸けたるは。フシ只熟柿の生つたる如くなり。地頼光ちつとも臆せず。詞ム、言はれぬ狐狸ども。落人と侮つて魂を抜かんと。地シヤものくと髭切抜きかけ。瞬きもせずまもりつめて立ち給ふ。時に向ふの木蔭より小山のやうなる大男。丸太舟を漕出す如く滑くつて歩み寄り。頼光の足許へどつかとすわりし有様は。追剝の大將とフシ看板打たぬばかりなり。地頼光ものさばり聲こりやく。男。詞うぬが面相只者ならず商賣も合點なり。某は善光寺參詣の上方者。路銀を断らし一宿すべき様もなし。近來無心千萬ながら。和主が常々盗み蓄めし。金銀衣類はいふに及ばず。身に纏ひし古纏袍腰に差いた候しも。地はやく。抜いて渡せ命ばかりは助けてくれんと。いはせも果てすからくと笑ひ。詞ヤアラ丁稚奴が味をやるよ。身が一席の台詞の裏を食すは曲者。意地張つて大怪我まくらんより。うぬが纏袍腰に差いた赤纏も。早く爰へまけ出せ。渡さぬだてを吐出さば。こりや。地此の首の連中に加へん。西の枝か東の枝か。サア、望めと詰めかくれど頼光返答も仕給はず。詞ア、此の程の旅疲とろくと寢てくれんと。地岩角に駈上り。首二つ三つ引摺んで飛下り。チ、日本一の枕ござんなれと兩足すつと踏み延し。寛に臥したる御有様。フシ不敵にも亦怖ろし。地山賊今

は堪りかね柄に手を掛け抜かん／＼と悶けども神武智勇の名將の。三徳兼備の威に壓され眼も眩み腕痿れ。覺えず顫ひ出でけるが。遠の山賊ほうど呆れ我十餘年の今日迄。多くの者に出會ひしが一度も斯様の不覺は取らず。詞さもあれ御身只人ならず。地包まず語り聞かされよ。なう底の知れぬ相手ぢやと。フシ舌を。巻いてぞるたりける。詞頼光打笑ませ給ひテ、さもあらん。凡そ此の土に生ある者我が名を知らぬ事やある。源の満仲が嫡子攝津守頼光ぞと。地聞くよりはつと飛退り頭を大地にすり着け。ア、勿體なや／＼。詞さればこそ始より世の常ならず見奉り候。扱は平の正盛。清原の右大將が讒言にてかゝる御身となり給ふよな。地所こそあれ此の處にて遭ひ奉るも宿世の御縁。我は卜部の熊武と申す山賊の張本。向後一命を擲ち君に仕へ奉らん。御査取とも思召され給へかしと。思ひ入りたる言葉の末頼光御氣色斜ならず。テ、頼もしし然らば今日より主従ぞや。子孫に長く武功を傳へ幾千代かけし壽に卜部の季武となるべしと宣へば。有難し／＼し昨日までは追剝。今日よりは忝くも源氏の郎等卜部の季武何供申す。山も谷も草も木も皆我が君の御領内。此の山の獸も鳥も蟲も皆傍輩。懸けたる首は傍輩の烏殿への置土産。さらば／＼と見返るや山路。返るや 三重 一洞空しき谷の聲。山高うし

て海近く。谷深うして水遠し。前には海水瀼々として。月真如の光を挑け。後には嶺松巍々として風常樂の夢を破る。刑鞭蒲朽ちて笠空しく去る。諫鼓苦深うして。鳥驚かずとも。フシいひつべし。心は昔に。變らねども。地一念化生の鬼女とや人は陸奥の。長信夫の山にあるかとすれば今日は甲斐が嶺木曾の山。昨日は淺間伊吹山。フシ比良や横川の花曇。雪を擔ひて。山樵の。樵路に通ふ花の蔭。小オクリ憩む。重荷に肩をかし。フシ月を伴ふ山路には。雪月花を弄ぶ。心は賤の目に見えぬ鬼とや人のいは。いへ。よし足曳の山姥が山廻りするぞ苦しき。暮るゝも早き山陰に行き暮れ給ひて頼光。道なき方に踏紛ひ。里は何處と誰にかも東西分かす立ち給ふ。御供の季武四邊を見廻しや。詞あれに柴刈る女休らふからは人里もはや遠からず。屈強の案内者これ女此の山は何といふ。麓の里へ下る者導せよといひければ。地是は信州上路の山の巔。御覽の如く道もなく麓の道とて東北は。五十餘里秋田の地。地幾重の谷嶺繩を渡して橋となし。怖しや唐土の蜀棧。天竺の流砂。葱嶺とやらん難所にもまさるとかや。詞北は越後越中の境川。これも谷二つ越え。十里に餘れば今日の中には思もよらず。地おいとしや我等が方に泊めましたう候へども。何れも若き殿達此の柴爨が栖家は。お嫌であらんといふ風情。不

東ならぬ山人の。フシ薪に花とはこれならん。頼光打笑みイヤそれは逆様。あらくましき若者ども其方こそ厭はれん。地行暮れたる山道柴刈はおろか山姥の栖家でも。苦しからずと宣へばはつと駭く容顔にて。詞ム、扱は自らが山姥と見えけるか。山姥とは山に栖む鬼女。地よし鬼女なりとも人なりとも山に住む女なれば。さ見給ふも道理やウタヒも。そも山姥は生所も知らず宿もなし。たゞ雲水を便にて到らぬ山の奥もなく。人間ならずと地フシ恐るれど。地或る時は山柴の山路疲るゝ肩助け。里まで送る折もあり又或る時は織姫の。五百機立つる窓の梅枝の鶯絲繰り綿繰り紡績の。宿に身を置き人に備はれ手間仕事。櫛さへとらぬ亂髪。フシ女の鬼とは理の。世を空蟬の。唐衣。地千聲萬聲の。礎に聲のしつてい。しつていからころ槌の音。碁に響く山彦も皆山姥が業なりと。思ふも見るも人心。煩悩あれば菩提あり佛あれば衆生あり。衆生あれば山姥も。などかはなから。フシざるべき。地都に歸りて夜語にせさせ給へや。終夜語り參らせんと庵に。誘ひ。三重入りにける。フシ小高き所を。地しつらひ頼光を請じ奉れば。詞いや左様になさるゝ者ならず。一夜の程は軒の下にも明すべし。見申せば一人住みの女性此方へお構ひなく。渡世の營せられかすと辭し給へば。地いや紅は園生に植ゑても隠なし。大將軍

の御骨柄まがふ所候はず。詞誠や源の攝津守殿は。清原の右大將平の正盛等が譏奏にて。御身を危め流浪へ流離ひ給ふとは。山の奥にも隠なし。それとも名乗り給ひなば。自らが身の上をも語り參らせん。地定めて旅疲何をがな御饗應。折節山々の木の實も皆落果てぬ。詞實に思ひ付きたり筑紫宰府の山に。毬栗一枝昨日迄ありしもの。是を取つて參らせんと表に出でしが振返へり。必ず奥の一間を覗き給ふな見給ふな。地追付け歸らん待ち給へと。岩根を踏む事飛鳥の如く山深く。飛んで入りにけり。詞季武横手を拍つて。筑紫宰府迄五百餘里。今の間に歸らんとや。地彼奴が仕方言分始めから飲込ます。君の武功を押へんと魔障變化のなす所。追掛けて討留めんと駈出づるをやれ待て。詞變化と知つて立騒げば彼に心を奪はるゝ。此の方は静まつて却つて彼奴を誑し。地彌殺に退治せんさもあれ彼が詞に従ひ。奥の一間を見ず置かんも後れたりと。主従覗き見給へばあら凄まじや。五六歳の童五體の色は朱の如く。蓬の産髪四方に亂れ。餌食と思しく鹿狼猪を引裂きて積み重ね。木の根を枕に臥したる様實の鬼の子これなんめり。知らず我羅利國に来るか。フシ身の毛。いよだつばかりなり。地時を移さず主の女栗を手折つて振擔け。歸る所を頼光膝丸を抜放し。はたと打てばひらりと外し。ちやうど斬れば

はつと開き退つて睨む容顔變り。角は三日月兩眼は寒夜の星と輝けり。怒れる面にはらくくと
 フシ 翻る、涙にくれながら。うたてやな恥かしや恨なき我が君に。仇をなさんと思はねども。
 御太刀影に驚きて自性を顯し候ぞや。此の上は力なき枯野の薄穂に出でて。身の上懺悔 フシ申
 すべし。詞我元は遊女の身。坂田の何某と幾世をかけし契の中。夫の父を物部といふ者に討た
 せ。其の敵討たん爲飽かぬ別の梓弓。夫の運命拙くて妹に先越され。親の敵を討たぬのみか其
 の事故に源氏の大将。漂泊の御身となり給ふ。地今生のこの身にて此の鬱憤晴れ難し。腹搔切
 つて魂魄汝が胎に宿り。日本無雙の大力一騎當千の男子と生れ。敵の餘類を滅さんと天に訴へ
 地に叫び。スエテ誓の刃に伏したりし。地それより我が身も唯ならぬ子を望月の影深く。人倫離
 れし山に籠れば。何時の間にかは山巡り一念の角聳ち。歌江月眼に光る邪正一如と見る時は。
 鬼にもあらず人にもあらず名は山姥が山巡り。春は三芳野初瀬山高間の山の白妙に。擬ふ霞も
 それかとして花を尋ねて山巡り。秋は清き空の色。かはらぬ影も更科や。フシ姥捨山の。名に賞でて。
 月見る方にと。山巡り冬はさえ行く比良が嶽。越の白山時雨行く雲を起して雲に乗り。雪を誘
 ひて山巡り巡りくゝて我が君に。巡り遇ひしも我が夫のフシ念力通力神力にて。地渡邊の綱確水

の貞光只今これへ招くべし。詞哀れ我が子をも譜代の家人と思召し。敵御征伐の御馬の口をも
 取るならば。父が一期の素懷を遂げ母が鬼女の苦患を通れ。地成佛得脱疑なし二世の苦み助か
 るも。只大将の御慈悲と角を傾け手を合せフシ平伏して。こそ泣居たれ。地かゝる所へ綱貞光
 木草押分け。詞ヤア我が君是に御座候。兩人今夜信濃路を通りしに。誰がいふともなく源の頼
 光は。此の山の彼方にあの谷の此方にと。地手を取つて引くが如く覺えずこれ迄参りしと。申
 し上ぐれば頼光鬼女の神變委しく語り。フシ奇異の思をなし給ふ。地扱兩人を季武に引合せ詞
 此の上は女が望に任せ。汝が一子に主従の契約せん。地これへ召せと宣へば母は悦び。快童丸
 快童丸と呼びければ。あいと答へてつゝと出で。どつかと坐したる顔の色。詞なう母様あれは何
 處の叔父様ぢや。地土産買はう嬉しいと。手を叩いて悦びし。フシ愛敬ありて凄じき。地宛然愛染
 明王の笑顔かとあやまたる。詞母立寄つてヤイ慮外者。あなたは常々いひ聞かせし源の頼光様。
 今日より御事が殿様御奉公精出しましたよと。地申しやいのうと教へられ。はつと手をつき一禮
 し。詞随分奉公精に入れ。敵の首は幾つでも。地引抜いて上げましたよと。生先見えたる廣言に
 フシ御悦は浅からず。詞母重ねてあの岩窟に熊猪を追入れ置き。折々力を試し見れば。御覽候へ

あの如く引裂き候。地これお目見えのしるしに相撲所望といひければ。ずんと立つて窟の口に立てたる磐石。軽々と取つて投げ退け兩手を擴けつゝ立つ所に。内より荒熊飛んで出づるをどつこい任せとしつかと抱く。熊事ともせず捻付けんすれどもいつかな動かばこそ。搦みつけばこぢ放し組付けば押伏せ。呻き啼る喉笛を二つ三つ叩きつけ。ひるむ所を取つて押へ片足擱んでくるくく。二三間かつばと投げ。ア、草臥れた乳が飲みたい母様と、ッシ母が膝にぞもたれける。頼光甚だ御喜悅あり。例なき強力母が子にてありしよな。調即ち只今冠させ坂田の公時と名付け。四王天の四天を表し貞光季武綱公時。地頼光が家の四天王四夷八蠻を切靡け。源氏の威光四海に照さんしるしぞと。各さゝめきあひ給ふ綱貞光詞を揃へ。調君は知召されずや。近江の國高懸山には悪鬼栖んで國民を惱し。折々は都方へもあらはるゝ故。諸國の武士に悪鬼退治の旨下るといへども。お請け申す者もなし。武勇に長ぜし武士鬼神退治あるにおいては。勳功勸賞望みに任せらるべしとの高札所々に立てられたり。地此の勢に悪鬼退治思召し立ち給へと。勸め申せば頼光それこそ武運開くべき瑞相。多くの人數無用なり主従五人山嶺に分け入つて。鬼神が自在に身を變じ千騎とならば千騎をうち。萬騎とならば萬騎を討ち天下泰平

の忠義をあらはし。敵を滅す前表はや打つ立てと進み給へば。調公時悦びテ、鬼神退治面白からう。これ人々公時は。生所も知らず宿もなき山姥の子なれば。地産所も山産屋も山。育つ所も山なれば山道の先陣仕ると。地真先に立つて出でければテ、出来したく。心にかゝる事はなし母はもとより化生の身。有るとも無しとも陽炎の影身に添うて守りの神。これ迄ぞ公時これ迄ぞ我が君。暇申して歸る山の。峰。にいざよふ月かと思れば。まだ中空に暮れぬ日影の暮れしも通力。庵と見えしも輪廻を離れぬ妄執の雲水。流れくゝて谷に音あり、ッシ梢に聲ある。風に消えく。嵐に散りくゝちり積つて山姥となれる。地鬼女が有様見るやくと峰にかけり谷に響きて今まで此處に。あるよと見えしが山また山に山巡り。山また山に山巡りして行方も。知らずなりにけり。

第五

謡一聲瑤臺霜滿てり。一聲の玄鶴天に唳く。巴峽秋深し。五夜の哀猿月に叫ぶ。物凄じき山路かな。地かくて頼光四天王を相具し。鳥も通はぬ高懸山。屏風を立てたる如くなる。惡所を嫌はず主従五騎木の根に取付き岩間を傳ひ。足に任せて行先も、ッシ次第々々に道暗く、地山とも谷とも

知れざれば。とある木の根に腰打掛けスエテ少時休らひ給ひける。頼光仰ありけるは斯程嶮しき山中を。はや二三里も過ぎぬれど何の不思議なき事は。必定世俗の虚説ならん。實否を糺し重ねて取巻き討取るべし。地いざ開陣せん人々といはせも果てすあら怖しや。虚空に數萬の聲ありて不思議なきや不思議ありや。思ひ知らせん思ひ知れ。ゑいゝどつと笑ふ聲。フシ波の打來る如くなり。地時に向ふの松が枝に五尺餘りの女の首。鐵槩黒に色白く眼の光輝くと。川邊の氷一面に朱を流せしが如くにて。につと由ばむ容顏は。フシ身の毛も。よだつばかりなり。詞季武進出でようゝどつともいはず。鬼の娘に御見もじ此の季武めが思の種。八幡一夜のお情あれ心中づくなら後ともいはず。地今日の前に陸奥の千曳の石と我が戀と。重き思を比べよと大石を。えいやつと片手に擲んで投げつくれば。變化の首は其の儘に掻消す様にぞ失せにける。地時に山河震動して雷電稲妻。夥しく。二丈餘の惡鬼の象火炎を降らし枯木を投掛け。地石上に突立ちしうぞくだつばがんゝがつと。呼ばはる聲に此處の山蔭谷蔭岩蔭。松の木の間で散亂し。數多の眷屬一度にどつとをめてかゝる。さしつたりと頼光髭切を差翳し。數萬の中へ亂れ入り喚き叫んで。三重へ戦ひける。フシ通力自在の。地變化だに名劍の徳に恐れ大半滅び失せにける。

詞大將破顔鬼怒をなし。頼光を目がけて飛んでかゝるを公時表に立塞り。ヤアさせぬゝ。顔の赤いが自慢か。そつちの顔が赤ければ俺が顔も眞赤いな。母様よりの護の力の鹽梅見よと。地夕日に輝く黄葉の何れを夫と紅の。兩手を掛けて組んだれども。二丈に餘る鬼神の姿二尺に足らぬ公時が。膝節迄も届かばこそ幾年経りし楠の根を。纏ひたる朝顔の朝日に消ゆる命の程。危くも亦不敵なり。鬼神苛て片手を伸べ公時が。胴骨擲んで軽々と差上げ。微塵になれと投付くれば宙にひらりと跳返り。落様に鬼神の兩足一つに擲んで羽交締。大地にどつと打付け。起上ぐるを踏倒し打伏せ。捻伏せ毆伏せ馬乗にしつかと乗り。一息ほつと吐いたりしは惡鬼に優りし勢。實に山姥の御子息。フシいやゝどつとぞ褒めにける。地渡邊季武貞光なんど我も我もと馳集り。千筋の繩をぞ懸けたりける。ヲ、心地よし潔し只此の儘に都へ曳け。合點ぢやまつかせ公時が胸より太き大綱を。しつかと擲んでヤア。音頭遣るぞえ。本綱中綱木遣でせい。ヤア天魔のひよえい。地ゑいゝ天魔の通力を。悉く滅して凱陣。あるこそ。三重へ目出度けれ。かくて帝都には高懸山の變化の討手。諸卿詮議ある所へ。大納言兼冬公參内あり。扱も某が聖源の頼光勅宣の御高札に委せ江州高懸山に分入り。變化を生捕り入浴仕つて候へども。勅勅

の身を憚り某を以て奏聞仕り候。地早く候臣の實否を糺され。賞罰を願ひ奉るそれ／＼とありければ。公時が蠅取にて三人四方を取圍み。庭上に引据ゑたる鬼神は怒り喚く聲。宮中に鳴渡り帝を始め月卿雲客。宮女上下の男女迄。フシおそれ慄くばかりなり。關白忠平御階近く出で給ひ。變化退治の武功叡感淺からず。此の恩賞によつて頼光出仕御免あり。早々鬼神の首を切り淀河の柴漬に。沈むべしとの綸言なりと詞も未だ終らぬに。渡邊居丈高になりからんと笑ひ。こは一天の君の勅詔とも覺えぬものかな。もとより罪なき頼光が御免ありとは何の事。鬼神退治の恩賞は望み次第との御高札によつて。我々一命を擲ち鬼神を生捕り候へども。未だ洛中に平の政盛といふ恐ろしき鬼神栖んで。科なき者を讒し國土を騒し候。彼奴を我々に賜つて此の鬼神と一所に退治仕らん。是第一の望なりと憚りなくぞ申しける。關白殿を始め在りあふ諸卿色を損じ。威勢旺の正盛假令如何なる過ありとも。誅せん事叶ひ難し。何にても外の義を望むべしとありければ。貞光を始め季武公時口々に。叶はぬ望をまだ／＼と申しても無益の至り。此の方御無心申さぬからは其方の御用も承らぬ。此の談合さらりつと元へ戻し。此の鬼神の繩を切解き庭上に放ち。我々も腹搔破り共に惡鬼と現れ。禁裡はおろか日本國に仇を爲

さんと。地既に繩を切らんとす卿相雲客あら怖や。やれ待て渡邊龜相しやるな。貞光殿季武殿。公時とやら好い子ぢや頼む繩解くな。鬼を放して堪るものかと。御簾や几帳に身を締め。フシ顛ひ慄き給ひける。關白道理に服し給ひ奏聞衆議判力なく。檢非違使勅を蒙りて正盛に繩をかけ。四天王に渡さるゝこは有難しと引伏せ。薩ア一人は片付けたり。とてもものに清原の右大將高藤といふ。大惡人の鬼の棟梁も賜らんと。言上すれば諸卿目と目をきつと見合せ。固唾を呑んで在します關白殿眉を蹙め。忝くも高藤は女院の御弟。如何に罪科あればとて。右大將の官人武士の手へ渡されし古例なし。此の義に於ては叶ふまじと宣へば。ム、御尤々々。ならぬ事を是非とは申さず。地さらば鬼の繩解けとつゝと寄ればア、／＼氣の短い。渡邊殿談合せう綱殿と。周章騒ぎ給ふ所へ右大將つゝと駈出し。薩ア推參なる童ども。己れ等が如き匹夫の分にて某を滅さん事。蓮の絲にて大石を釣下けんとするに似たり。早く其の場を立退べしと嘲笑つて立つたりける。綱は堪らず駈出で高藤が。諸除搔いてどうと引敷き。ヤア匹夫とは誰が事。己れが罪は天下一統存じの所。白狀に及ばずと高手小手にぞ縛めたり。地時を移さず鼻中納言兼冬卿。頼光を誘引し參内あれば叡感甚だ麗しく。源氏の本領舊の如く鎮守府の將軍に

任ぜられ。兼冬の姫澤湯姫四位の女官に補せられ。御祝言の吉日まで、フシ勅説あるぞ有難き。
地 扱右大將の配所は鬼界が島へ。正盛は鬼神と共に誅すべしとの綸言。こは有難し有難しそれ
計らへ承ると。正盛を引出し首宙に打落し。残る鬼神は四天王が鬪殺の手玉ぞと。貞光季武兩
足とれば公時片手に角を持ち。曳々聲して曳く程に。難なく首を捻切つて左右へさつと。退い
ても退かぬは夫婦主従一門一家。縁者親類豊なる流を汲んで源の。氏も繁昌國繁昌五穀豐饒の
民繁昌。蓬萊國の秋津島治まる御代とぞ祝ひける。

右此本者以太夫直傳寫之
文句音節等悉校合加秘密
令開版者也

大 阪 御 久 寶 寺 町 筋 正 本 屋 竹 本 筑 後 掾 仁 兵 衛 團

長町女腹切

(八行三十七丁本)

近松門左衛門作

地 例の童の言の葉にいひよる品もよし蘆の。難波の京の物語今の狂歌に取りなせし。京童の口ず
さみ落首洛外とりぐに。其の一節を繪草紙や。下立賣を堀河へ引廻したる角屋敷。刀屋石見
何某とて諸役御免の受領職。折紙太刀の御用迄御所は勿論屋敷方。男たる身の魂の御刀脇
指。拵請取所と大看板。見世は弟子に打任せ。誰が下人やら頭やら。はなし目貫の性よしもつ
い焼きつけて悪性に。身を研ぎへらす奉公や跡のこじりの帳面の。つばめ合せと親方が、フシ靴
鳴りするぞ道理なり。地 主人石見は禪門の白い天窓に黒眠。仕事場を見廻つて。調ヤア己が足音
聞いたやら皆細工に精が出るよ。煙草ばかりが仕事ぢやないぞ。彼岸過ぎたりやめつきりと日
が短い。夜仕事さしよにも此の油の高さでは儲ける程皆戻る。地 ヤ。戻る序に戻橋の鐔は戻つ
たか。一條の御所様の鐔も。九月の御用ぢや合點か。黒鞘が出来たらば烏丸殿へ渡しておじや。

二口屋のはみ出し猪熊の革柄。なぜに遅いと毎日二三度使が走る。醒井の親粒もまだ入れてやるまいな。三條小橋の下細工菖蒲作りの拵も。五月からの誂へ何として出来ぬぞ。長刀直しを研いだらば。辨慶山の町へ持つていけ。兩替町の銀作り御池の町のふち頭。小川通りの背鰯今日明日に持たしてやれ。調さつきにわたせた下の町の酒屋のかみ。入婿が入る引出物にしたいが。娘が望む道具ちやと大切先の大刀物。地身ばかり買うて去なれたは後家箱に極つたと。堅い親仁の軽口も、フシ刀屋とてや古身なり。地重手代の忠二郎旦那の前に帳面控へ。左介喜八は算盤のさ丫んの九月節供前。算用の高見合して調ヤア。此の半七の大のらめは。帳面も埒明けず今朝から爰へ面出しせぬ。何所へうせた又祇園狂か。宮川町か繩手か。地傍輩どもが知つてをろ。穿鑿せいと喚かるゝ。イヤ半七は昨日から頭痛するとして鉢巻で。小座敷に寝て居まする。なんぢや頭痛ぢや。若い身で又しては頭痛のつかへの何のとは皆茶屋酒が過ぎるから。粥でも炊いて喰はしたか。アイ粥の事は扱おき重湯も咽へ通らぬと云うて。やうく〜と今朝酒の爛して飲んで見て。地どうでも色のない酒は飲まれぬと。苦い顔し乍ら中腕にたつた三杯と。言へば主も興さめて。叱る心も拍子ぬけオクリ笑ひ〜暮せし秋の日の。フシ西山近き。染浴衣。愛宕

参りに袖を引かれた。フシ是も仇なる世の勤め。四條の水に名を流し。身の憂き数を積みあげし石懸町の井筒屋の。お花よ盛り戀盛り。フシ身を賣る品はかはれども。地刀屋の半七と深い中ごと正銘の。互の誠研ぎ入れて締めた心の諸捻り其の柄糸のほつれそめ。我が親鯨のつれなさを。スエテ問ひ談合も中絶えし。地いとし男も親方がかり首尾はどうぞと案じほれ。顔の見たさも遺瀨なく兒夫雇うて草鞋がけ。浴衣を假の旅立。ほんほり綿もひねくろしく背中に皺の寄るべなき。石見の見世へ頼みませう。ハ、詞こりや旦那さんで御座りんすか。内方に居さんす半七殿に。一寸逢ひたう御座りんす。親方ぎよつとし。はていかうりんす〜と云ふ女子ぢや。和女は半七が女房か。ハアつがもない私は大阪者。半七が叔母で御座りんすアレ未だりんすぢや。ムウ大阪の叔母御とは。伽羅細工の甚五郎の内儀か。ア、其の伽羅々々。何かの御禮にと参る筈なれども。地主は細工の人貧乏な世帯の隙無しで。今日迄の御無沙汰大事の甥が出世の門。祝ひ月を心がけ愛宕かけての上り舟。乗合の窮屈さとろ〜と寝よとすりや。うしろからせよるやら前からは毛の生えた大きな足を突出すやら。齒切するやら寢言やら。可笑いことの数々は山崎から連もあり。あがつてお山を一息に嵯峨へ下りたりや仕合と。釋迦様の開帳の

相伴しゅうはんやらおここゃやら。旅籠屋はたごやで支度したくして。直すに是へと出次第の口は手管てくだに馴な々しく。皆様御免みなさまごめん。ア、しんどうと腰かけて。煙管せんくわん取る手も粗略そんざいに。皆様半七の傍輩はうばい衆か。辛苦しんくな仕事で御座りんす。縹子の肌はだか着に色更科いろさらしなの。叔母と名乗りて刀屋に、フシ見するは胡散うさん者なりし。ソレ調喜八。叔母が逢あひに上られたと。半七に知らせてやれ。誰ぞ茶を進しんせぬか幾人いくたりをつても気が附かぬと。地ち云ふ内に半七はそつと起きて障子の隙すき。覗のぞけば馴染のお花なり。南無三寶なんぶさんぼう扱あは内々苦勞たくにした。慾よくづらの繼父まいてめが年切増ねんきりましのもがりごと。急々にせがむと見えた。其の工面ぐめんに來たさうな。何にもせよ出過ぎたこと。逢ふも危あぶなし逢はぬも又。仕舞の附かぬ。我が身ごと。夜着ひつが引被りスエテ生きたる心地こころはなかりけり。地ち親方は正直一べん半七はなぜ出ぬぞ。調頭痛てうづつうでまだ起きられぬか。他人では無なしなう叔母御。寢所ねどころへいて逢はつしやれ。お山狂やまのくるひで酒やら何やら過ぎる故。地ち煩わづひ暮して物も喰くはぬ少意見せういけんして下され。そりやそこへ案内せいと。下地したちは好すに据すゑる膳ぜん。フシうまい首尾くびびとぞなりにける。地ちや、時過ぎて是も亦愛宕あいたく参りの花お札はな。風呂敷ふろしき包下人に持たせ。刀屋の石見様とはこなたか。大阪甚五郎が女房半七に逢あひたい。叔母が來たとおつしやつて下されと。云ひ入るれば家内の上下喫驚びつくりして。ヤアこりや何なにぢや門にも叔母。内にも叔

母。騙かが狐きつねに極まつたと。不審ふしんがるやら怖こがるやら中にも亭主は一理窟いちりく。ヤア調ざわくとかしましい。奥へ聞えりや詮議せんぎがならぬ。黙だまれくと小聲こゑにて。地ちおもての叔母御通とらしやれここ、ハここへと云はるゝにぞ。綿帽子取つてしとやかに。調てう是はまあく結構けいこうなるお内方うちかた。ついしか御出入申さねば何誰なにた様が何誰なにた様やら。コレ其所そのこな前髪まへがみ殿。地ち盆一枚貸さつしやれ。わたしが事なりや心まで奥様へ上げます。樋ひの上の切荒布花きりあらかはなの都へこんな物。フシお恥かしやと差出す。地ち叔母の年としばい格好かっこうを見ればどこやらおもさしも。半七によく似たり扱あは奥おくなは似せ物めと。思へども念ねんの爲ため。調てう是はく云はれぬこと。女房どもは寺参り戻つたら見せませう。してつきも機はたもなう半七に。何用あつて上られたと云へば。叔母は打笑うちわらひ。いや半七にさのみ用もなければども。旦那様へ少頼せうたのみ申す事。つれあひ甚五郎上のぼるゝ筈はずなれども。お屋敷方の御用は多し飛脚ひやくでも如何いかとて。扱あ私わたくしが上りしと下人に持たせし風呂敷ふろしきより。棒鞘ぼうさやの一腰ひとこしを取出し是はこれ。信國のぶくにとや。さる大名の若殿へ藏屋敷くらやみから上げらるゝ。大切な拵物こしらへもの大阪にも彼是かれこれと。職人衆も多けれど京細工と申し甥なまこ子こが爲ため。内方うちかたへ頼みます。注文は此の通。さぞ方々の請取御忙いそがしいは存ぞんじながら。どうぞ近々ちかぢかに頼み上げます。此の次手ついでに半七めが顔も見たさ。地ち何やかやに上

りましたと差出せば。石見は脇指注文見合せ。是は此方の商賣。心得たはずつと立つてこれ叔母御。戀しがらるゝ甥がさまを見せませう。暫く其處にと云ひ捨てて思ひがけなき一間の障子。蹴破つてつゝと入る。二人ははつと驚いて。狼狽廻る胸ぐらを両手に攔んで。ヤイ調半七のいきずりめ。ようもくゝ親方を踏附けたな。あの女が来た時からござりんすが呑込まれぬ。りんすの正體顯れた。お山やら惣嫁やら厚皮面な晝日中。大阪の叔母で候と目利の家へ似せ物を。ぬくゝと寢所へ迄手引させ。主に一杯。己れめは旨い所を喰うたな。地親代々の刀屋を太鼓持にするのみか。座敷を揚屋に仕くさつたお禮申すと突倒し。柄差箆押取つて散々に撲ち擲く。叔母は此の體聞くよりもはつと人目の恥かしさ。憎うもあれども甥子が難儀思ひやられて何とかな。此の場の首尾をと氣を碎く。半七花は身の科を云ひくるめんと眞顔にて。調申し申し旦那様。お氣が違ひはしませぬか。私は兎も角も叔母者人を打擲あり。必ず後悔なさるゝなど云はせも果てずヤア。盗人たけくしく其の様にたつてさへ。まだ惣嫁めを勞はるか。主の身代空になし天道を掠めをる。ヤイ天爵と云ふもので大阪の叔母が上られた。地目の前へ連れていて叩き殺して腹をいる。サアうせぬかと杖振上げはたくと打つ音に。叔母

は悲しく走りより旦那様暫くと。取附けば振放し縋りつけば突倒し。とかうする間に思案して調ヤアこりやお吉か。そなたは此所へどうして来た。コレ申し旦那様。あれは私が妹と地云へば旦那は興さめ顔。半七は猶合點せず花はきよろゝ狼狽へる。袖を控へてコリヤ妹。ヤイお吉これ姉ぢや。姉が顔を見忘れたか狼狽者と睨めつけ。目ませで知らすれば漸々と心付き。ハアほんに姉様。くゝ。くゝぢやと。フシ云ふ聲慄ふばかりなり。地叔母は色目を悟られじと。調ヤイ大膽者。五條の木賃宿へ行きはせて。地姉さへついで來ぬ内へ騙りらしいこと云うて。來た故にこんな事旦那様のお山ぢやと。御覽じたま御尤。今日も愛宕でわたしをお袋とはか云ひませぬ。それも道理ぢやあの人は腹がはりの兄弟で。十五違ひ半七が爲には叔母なれど。年は甥より二つ下叔母甥のよしみとて。親しうするを知らぬ目で。女夫と見るに。フシとがはなしと。非の入りさうな事どもを。いひくろめたる程一人はあつと嬉しさも。フシ夢に夢見る如くぞや。地主の石見まんまどくひ。ム、ウ。調一人ながら叔母御か。よい年して不調法過つた免してもらを。地叔母ご怪我は無かつたかと背中さすれば彼方向く。ヲ、若い人の道理々々。そちらな叔母様頼みます機嫌取つて下され。これ半七。調言譯してくれともぢくゝと勝手へ出

で。地皆の奴等うつかりとなぜ茶漬でもして出さぬ。腹の立つた舉句ちやにけんどんを取りに遣れ。マア盃を出して置け。むつかしからう己は出見世へいてゐるぞ。はれやれ腹の立つ競ひ口に。叔母をも知らいでみしらしたとオクリ足早。へにこそ出でにけれ。地跡見送つて半七は。叔母の前に手をつかへ何にも態と申しませぬ。面目ないと有難いと胸は二ツに裂けますと。悔み歎けばお花も涙にしみぐくと。私は四條石垣町。井筒屋と云ふ茶屋に花と申す勤の者。半七様とは末々まで面倒見あふ契約に。ちといき詰つた憂きふしの談合に。逢はひで叶はぬ事あつて横着な此の有様。叔母様なら大事の甥を。唆かすとお憎しみそこも許して下さんせ。いといが唯因果ぞと、フシ共に。かこちて泣きければ。叔母も同じ涙にくれさう見たく。聞つれあひは大阪で伽羅屋といへば。町のよい衆屋敷方。人に知られて世の有爲無情。此の叔母とも知つて居る。地色事は若い役此の上にとの様な。生きる死ぬるの場になりても。やくたいたいもない氣を持つまいぞ。世間多い心中も銀と不孝に名を流し。戀で死ぬるは一人もない。流れの身には取分けて。悲しい事酷い事。そこを死なぬが心中ぞや。眞實男可愛くば五度逢ふものを三度逢ひ。二度を一度になす時は親方も機嫌よく。戀に身をうつ、フシ事もない。地二親もな

い半七叔母一人甥一人。元は知行も取つた筋職人の弟子と朽ち果つれど。可愛いとも不便とも思ふ者は此の叔母一人。末かけて頼みます。今日叔母が上らずば二人の命は有るまいもの。有難や。忝や愛宕参りの一しるし。佛神のお蔭ぞと意見も親は泣寄の。二人が肝にこたへつ、スツテ泣くより外の事ぞなき。地叔母は重ねてやれ半七。涙ついでに今一度泣かねばならぬ此の脇指。見知つてゐるかと差出せば。半七棒鞘の柄引きぬき。刀心を見れば信國。眞目釘の穴際に風と云ふ字の一字紋。横手を拍つて是は扱。我が家の重代ぞや親の秘藏が年を経て。廻り來るも不思議なり再び武士に立返る。瑞相なり嬉しやと押戴く脇指を。叔母引つとつてからりと投げ。なう情なのさふらひや。武士になれとて見せはせぬこの脇指故家筋の。かう零落れた因縁咄小耳にも聞きつらん。お花とやらも繋がる人。悲しい咄の一通りを聞いてたも。詞もと我々は伊勢の龜山者。先祖は猪瀬文平とてあの子が爲には祖父様。お持砲の鐵砲大將百五十石取つた人。同じ家中に高木宮内とて。八百石取る旗頭互に無二の中なりしが。上方の取賣が此の脇指を賣りに來て。諸傍輩の附合に祖父さまも望みにて。買求めたい心ざし彼の高木も望をかけ。代物問へば三百貫の折紙。心安さの當座の座興。とは云ひながら高木が龜忽。文平お

身の身代では高い物ぢやがお買やるかと。ふつと言ひしも互の不運。苦笑ひにて一座は濟みその取沙汰の國一杯。いはれぬ猪瀬が齒も立たぬ刃物好して高知行の。高木殿と張合うて人中で恥辱うけ。あれでも武士かと言囃す。此の脇指を買はひでは一分立たぬ祖父様の。武器馬具衣裳夜の物まで代なして。三百貫の折紙代一倍まし。二百十兩に買求め直に刀心に一字銘。高木に勝つとの心にて風と云ふ字を彫記し。地明くれば九月十五日登城の道に待ちうけ。高木遣らぬと聲をかけ尋常に討畢せ。屋敷へ歸つて祖父様は娘子どもに暇乞。命に替へし此の信國必ず手に渡すなど。お腹へぐつと押立てて右の脇まで一筋に。地唯一言の義によつて身上をフシ果されたり。地そなたの父様は叔母がためには兄様。其の折しも江戸番直に江戸より浪人あり。永々の憂苦勞悲しい暮しが病となり。いよくつらき其の中にも遺言にて此の脇指。詞乞食する迄放すなど薬も飲まず祖父様の。第三年同じ月に病死ぞや、地悲しいともつらいとも。情なやお袋も亦歎き死に。跡に残るは叔母と其方。まだ九ツの頑是なし叔母が心を推量あれ。三年に三人まで同じ月に死ぬる事。不思議と思ふ氣が付いて刃物の相性見る人に。詞目利して貰ひしに。祖父様父様同じ火性。刀は水の流れ焼以ての外不吉の脇指。寸は一尺四寸五分。地間尺

は災難是を其の儘持つならば。三代迄は崇るとある占方に驚いて。捨賣に賣放し廻り廻つて十三年め。詞お屋敷方より此の脇指拵へ仰付けられて。孫子の其方の眼にかゝると。はや親方の打擲の難儀に逢ふもこれ不思議。地武士羨しと思やんな一言の咎めより。親祖父の命を絶ち子孫迄零落しは。前世の業とは思へども。愚痴な心にあさましい此の脇指がないならばと。科ない刃物に恨が残リステ折つても捨てたい氣なれども。地今では大名のお腰の物。家の敵の此の脇指。主人の様に撫でさするその時々身過ほど。悲しい物はなきぞとよ子にも甥にもたゞ一人。奉公大事に勤めてたも。いとしの身やと掻き口説き。膝にもたれて泣きければ半七も伏沈み。お花ものかぬ身の上と語るも聞くも主の内。領き合ひつ呷きの。フシ忍び。泪ぞ哀れなる。詞ヤアうかく話してあれ見世さし時。叔母は直に伏見迄夜中でも舟はある。來年のお穉には必ず下りや。此の脇指の拵。注文の通り随分急いで下してたも。地旦那殿内方様へよいよ頼むぞや。お花女郎にも縁でかな。又やがてやと出でければ。詞イヤわたしも東。道迄お供致しましよ。ア、折角來て素戻りか。これ半七叔母は粹ぢや。跡でしつほりと話しやいの。イヤ別話す事もござりませぬ。そんなら祝うて口濡して往しや。イヤ最早お茶も飲べまし

た。ハテ茶ばかりで済むものか。しんこの様な物なりと茶の子甥の子。のこく振舞や半七と。二人引寄せ寢所の。障子の中に押入れて。叔母は氣とほり堀河通り。二條通りの高瀬舟直に。大阪へ三重へ下りける。

中之巻

フシ名は堅く。人は和らぐ石垣町。前には戀の底深き。淵に憂身を先斗町。都の四季の月花を。こゝにフシとやめて通路や。地馴染々々の色遊びの。中にお花は忘れても。わすれがたなや刀屋のなかばと深きつま戀に。なつく八乳の繼三味線。心くらべの連弾に思ひの色を忍び駒。忍ぶに餘るフシ涙かな。浮氣烏と。そやされて。月夜も闇も此の里へ。光満寺と云ふ坊主客。お花に馴れし鶯のほけきやうとも念佛とも。知らぬが佛の戸帳ごと井筒が暖簾撞木杖にてひらりと上げ。詞太郎内にか。四五日お目にぶら下らぬ。エ、珍しいどつち風が吹いたぞい。イヤイヤどつち風でもない今夜はしよざいの無常風沙汰はない事葬禮のもどり。ちよつと寄りたし心はせく。地どうせうか斯う焼香場を。りくに遣つてすて引導も何云うたやら。不便や今日の亡者もろくな所へ往くまい。是もお花へ心中と。雪の頬さき遠慮なく。髭口寄せて頬ずりは。山

萎おろしににぬきの玉子いたそなフシ顔の痛々し。地お花が浮かぬ顔つきに花車も亭主も氣の毒がり。コレお花どうぞいの。お寺ならば大黒。茲ではわつさり恵比壽顔して見せましや。サア笑やいのと迫立てれば。詞ア、太郎おだまりく。あれは我等に甘えるの。腹立つ所が猶うまし。詞かゝ衆二階へ連れておじや。今宵は妓衆の總揚げ見事な事か。古手な肴取り置いて蒲燒一種で飲明かす。鰻四五本さかせに遣りや。南無阿彌陀佛と騒ぎ立て。フシ皆々二階へ上りける。地既に傾く宵月の夜も早四ツ半七は。銀の才覚ならず者と。茶屋にはせかれ親方に見限られつ、筒井筒。心の水もかへ乾して流れ歩きにとほくと。格子の蔭に身を潜めお花がよすがを待ち居たる。こゝに誰とは白髪まじりきんか天窓に無用の提燈。門口にてふつと消し。詞ハア太郎左衛門様お宿にか。花めが父西陣の。地九兵衛でござるとたつみ上りに言ひければ。亭主夫婦ヤア親父来てか。こちへくと茶釜の前太郎左衛門顔聲め。詞此の頃段々云ふ通り。其方が娘お花が事。そもく小女郎の時分から手形の表丸十年。親方に損もかけず追付け年季も明くぞや。なれども勤のならひ小間物屋の煙草屋の。紙屋で候吳服屋で候の。酔の菫蕪のと借銭が今の金で七八兩。地その上親父も長者ではなし。あの子にかゝる身でないか。がらり廿兩

ま一年切りまし。居なりに居れば借銭も先づ其の分。賣買高い此の節二貫目ぢかい廿兩。詞其方が手取に温まれば兩爲と思ひ世話やけども。かの柄巻屋の半七と云ふ蟲がさいて。何の彼のと入性根お花が一切呑込まぬ。是からは勝手次第。半七と云ふ職人の弟子こゝらあたりの拂ひさへ。埒明かす。東ふさがりになつた者。打ちみしやいでも粒三文ないは知つて居る。あの様な極道と腐り合つたお花が行末流浪は知れた事。詞ちひさいからの馴染なれば。よい事聞く様にはござらぬ。どうぞ意見でも召されぬか。地壁に馬乗りかけては明くべき埒も明かぬもの。前びろに手形しよう爲に、ッ呼に遣つたと語りける。地門口には半七聞けば悲しき無念さの。格子の柱噛みひしぎステ齒をくひしぱり泣き居たる。親父は横手ちやうど打つて。詞扱々苦々しい。親方殿にお世話をかけ不孝者と申さうか。地その刀屋め知つて居る。ならず者の大將菰被りの下地。地イヤ花めはどれに居る。爰へ來い用が有る。引きずりに往てお客の前で恥かゝさうかと。昔作りのつこと聲お花は人目の恥かしく。アイあの盃藤さんさよさん預つて下んせと。言ひすて下りる箱梯子。詞ヤアとつさんか夜更けて何しにござんしたと。地そばへ寄るを突倒し。詞ヤイ不孝者。親方殿お話で一から十迄聞届けた。半七めと云ふ騙めと夫婦にしては。年

寄つた此の親が鼻の下がひあがる。廿兩と云ふ金が天から降るか地から湧くか。地かたりめが挨拶はらりしやんと切つてしまひ。年切増して奉公するか否と云へ分別有り。サア、どうぢやと腕捲り、ッ掴み付くべき顔色なり。地お花ははつと胸塞りステ暫し。涙に暮れけるが。詞なり父さん。傍輩衆は内證客さん達の手前もあり。地さもしいことを言はんする。勤する身の親達はどの口聞いても可愛や親ゆる苦勞をする。定め年も近づく届いた男を見定め。末の片附心がけ身を安樂にして見せいと。云はぬ親は御座らぬ。節季々にせびらかし足らいで又年を切りまし。地男に迄添はせまいとはあんまり酷うござんする。ほんの親より繼父は猶大事と嗜み。随分孝行盡せどもこなさん私にみぢんも憐みはござんせぬ。殺しなりと何様なりと。分別次第にさあんせ。半七様と挨拶切り勤はせぬとばかりにて。人目も恥ぢず大聲あけ身を悶えてぞ泣きゐたる。地傍若無人の繼父を笑ひ。詞よう吐かすな。盗人の晝寝も當がある。おのれが母に何の見込はなけれども。おのれを賣つて喰はう爲女夫になつた。今の詞は誰が教へた半七の掬兒めに習うたか。地べり、しやべる頬けた蹴はないて仕舞はんと。むしやぶり付くを井筒屋夫婦。年の内はこちの物疵付けさせぬと振放す。思ふ男に添はれぬからは殺しや。

ナ、殺しかねうかと。撲合ひ揉合ひ大喧嘩破れかぶれと半七。裾ひつからけ井筒屋の庭へつかつかく。柄巻屋の半七と聲をかけ。九兵衛を取つて突きのけ真中にどつかとすわり。詞コレ親父。其方はお花が繼父すにつけ粉につけ憎いのも理り。此の半七を掬兒の騙の強盗のとは。いつ騙りした盗みした。半七が目には其方の人賣と見たもがりと見た。よし夫は兎も角も。お花は己が女房すべい奉公仕舞うては。繼父でござらうがもがり殿でござらうが。主のある女房分別して物を云へと。地せきくる顔の青疊。フシ叩き散らして詰めかくる。詞ム、ウ刀屋の半七とは其方か。どれ顔見よう。はれよい男の。江戸元結にしゆす鬘天窓付は兩替町。内證は曾我殿見せかけ力身置いてくれ。此の年まで敗毒散一服飲まぬ此の親父。ゆすりはたべぬア、慮外ながら。親も許さぬ女房とは栗田口へ往きたいか。此の娘女房に持てば小判がいるが合點か。小豆粒程な細金さへないさまで。何ぢやお花を女房ぢや。いきがたりとは其の事。地いつそ手をよう巾着か。フシ屋尻切れとぞ喚きける。詞半七ぐつとせきあけ。ム、ウよう言うた小豆粒は持たねども小判と云ふ物持つて居る。來年の給分甘兩渡すからはお花は身が女房と。地紙入より金甘兩取出し。サア金でした小判と云ふ物近付になつて置けと。めつかうに投付くる。ヤイ

詞半七。あの娘はまだ五十年が百年が顔に色氣の有る中は。奉公さして喰はねばならぬ。地千兩道具の娘を甘兩の目腐金で。女房に持たうやべかこまあなるまい何所で盗んでうせたやら。後の穿鑿喧しい。おのれに呉れると投げつくる。詞イヤ金貰はう好みがない。おのれに呉れると投返し。地投げつけ打ちつけ掴みあひお花はわつと泣出す。太郎左衛門つゝ立ち。詞コレ半七。お花はこちの奉公人親父とのせりふなら何所ぞ外で仕たがよい。門には大勢人だから客の邪魔して貰ふまい。地それ男ども追出せ心得太兵衛長兵衛五介。ばらくと立ちかゝり無理。フシ無體に引出す。地お花は譯も正體も涙乍らに取付くを。どこへ〜と押分くる。親父を中の關守の雪駄かたしに奈良草履。足にはたらぬ半七が髻をつかんで引つたてしは。オクリ目もあてられぬ。フシ次第なりサア。地親父も先づ歸つて諸事談合はあすの事。ハツアそれもさう然らば明日参りませう。申すまでは及ばぬが。詞花めを敷居より外へ手放して下さるな。ヤイそこな不孝者。おのれ明日來てなんとする待つて居れ。エ、地いきせい張つて咽が乾くとごぶり〜と煮えばなの。茶びん天窓を振立ててフシ河原を西へと歸りける。地斯る哀の最中二階の階子ぐわた〜。藪から坊上の佛頂顔お花そこに何して居る。詞さつきの押への盃はいつの世に戻

る事。總體今夜はそなたが顔浮々せいで酒が呑めぬ。地氣を替へて西石垣の關東屋で騒がう。太郎山衆貸したも。ハア残りの子供は西石垣が天竺へも御同道。地お花一人は我等が内。手放しては内證に氣遣ありまの。いふなく。詞皆迄云ふな湯の談合か。湯治するなら遣ひ錢見事な事かと金三兩。衣の下より投出せば。是こそほんの忝け有馬の湯のだんこ。歌やれゆのだんこ。今はありまのゆのだんこしよんがる。西石。垣へと三重へ騒ぎける。フシ同じ所も西側は。祇園丸山前にうけ。芝居の槽暗き夜も。行きかふ人の提燈は月も。フシおろかと照渡り。見おろす。地おろす駕籠からぬつと出た。炮烙頭巾の醫者殿は。藥師如來の引合せつほ屋の客と脈をとる。それくく。花車も亭主も槌で庭掃く人呼びに。走る足許おかるぢやないか。詞お玉ぢやないか。お玉やあい。はて是から呼んで届くものか。わけもない事云はん紋紗の衣着て。ぞめき姿ののら坊主。後姿見た様な。チ、それよあれは愚僧が五人組。萬年寺の同宿忍び戀路の摺みどり。ふかみどりやの小丁稚が。一中節の川風に聲も廣がる扇屋の。仲居のまんが供して通る彼は澤村長十郎。あつたら男をやがて大阪へ下り舟。歌流金子も難波津へ。咲くや此の花其の花の。フシ噂も戀の種ぞかし。地苦のない女郎の仇口を聞くにも増る涙の露。お花は

一切氣も浮かず四條の河原幾萬人。ぞめきの中に彼の人かもしやと目をも花色の。長範頭巾しよんほりと番屋の蔭にたゝすみしは。慥にさうちやア、ちよつと逢ひたい。云ひたい事も山衆の手前。客の手前もはかりかね。床柱に打凭れ。フシ念佛申して紛らかす。地料理人の傳介盃を下に置き。詞ヤア花様の念佛で思ひ出した事がある。三味線小歌も古めかし。町方に流行る阿彌陀の光と云ふ事して。御一座のよね様方どれにても阿彌陀如來に當つた者が。豆腐と酒と買ひに行く役人。色里に無い圖な騒ぎ。よね様方いかにと云へば。地チ、是はめづらしい早うくと紙押廣げ。蜘蛛の巢御光延紙引きさいて錢の高。もみ圖は惠方果報後に無理云ふまいぞ。サア今が大事の所と鼠啼してしめあけに。詞さよさまどうぢや十六文。お仕合く。藤さまは三十六文小めろの林は十文。地それははまなみさ。波や。滋賀様たつた二文か。お杉はなんほ悲しや己は三百ぢや。詞エ、儘よ前垂質に置かう迄。チ、云やる迄ない錢がなくなば。地布子をはぎさんしきさん。是も如來ははづれた。サア是からは花様きりくもみ圖明けさんせ。ア、忙しい何ぞいの。私がやうな因果人がなんの阿彌陀になるものか。これ見さんせと押しひらけば。地そりやこそ云はぬかサア花様が阿彌陀ぢや。詞名代は叶ひませぬよね様に豆腐買はして居乍ら

田樂喰へませう。地きつう座敷が洒落れて来たサア、フシ面白いと笑ふにぞ。地お花は何がなかつけに出たいは心一杯。猶も色目を悟られじとア、迷惑。地そんな事に今まで歩いた事なけれど。てんほのかは往てのけう。其の間に用意しておかんせ。地テ、用意揃子鉢せつかい播子木しやに構へ。待つて居ります早う。地ハテそこらは合點ぢやと。地姿も下女に二世かけし男の爲や徒歩跣足。つひにきなれぬ置き手拭急けばまはる。小褌ほら、杉が前垂かり橋を。フシ、足もしどろに行き過ぐる。地半七は番屋の蔭ちらと見るよりコレ。爰に居ると招かれ。ヤアなかばさんかいの。逢ひたかつたと抱合ひスエテとかうは涙ばかりなり。地コレ泣いて居ては濟まぬこと。今宵中に大阪迄退かねばならぬサアおぢやと手をひけば。マア待たんせ。先刻の小判どうしての才覺ぞ。詮方なさに怖い事などさんせぬか。有様云うて落付かせて下んせ。云ふ迄もない事此の身になつた半七を粉にはたいても一歩一ツ誰が貸さう。先度の脇指三十二兩に賣拂ひ。地銘なしの下坂すも焼もかはらぬを。八兩で買替へ二兩で銘を彫らせ。拵へ濟して大阪へ下し。地其の賣へぎの廿兩たとへ首になるとも。もう取返しのならぬ事。此の上ながらも罪に遣はば我一人。地叔母婿叔母にも難儀をかけすそなたの行末頼むため。心ざす

は大阪。誠に和女の織父が盗人と云うたも嘘でない。我が身で我が身が恐ろしいと。語ればお花も身を顛はし。サアそんな事であらうと推量に違はぬ。いとしゃ私故種々にお身を狂はする。詮議の時は皆私が業にして身を遁れて下さんせ。地ハテ罪にあふとも逃るゝとも。分け隔てはないわいの。地ほんにさうぢや女夫ぢやものとスエテ又締寄せて泣く中に。地跡の二階に花様遅いこりや豆腐に買はれてか。迎ひに往けと聲々の南無三寶。見付けられては足元暗き井堰の石に踏みくじき。長き紅絹裏足纏ひ走るとすれど夜中の太鼓。どんくぐりの辻を出づれば建仁寺。だらりが鳴るぞだらつくまいぞ。駕籠よくと呼ばれども無いか聞かぬか耳塚の。西に錢座の名のみにて小錢なければ草鞋も。二足を小判一兩で買うて。穿く身ぞ。三重哀なり。

おはな半七道行

ハルフシいくよくの。憂き勤。七枚起請そら誓文。日本國の神さんを欺した罪か欺された。人の恨かねたみぐさ。つひに我が身の下り舟。スエテ乗後れたる淀堤。淀の河水行く未は。いかなる罪に大阪の。道がどこやら。フシ何里やら。ハルフシ身は初雁よ。初霜に。寝亂れ姿忍ばしとオクリ前垂。とつて丸ぐけの襷をぢみな抱帯。しやんと結んで引締めて。フシオクリ歩むと。すれ

ど。行き馴れぬハルフシ道はかどらぬ。女旅。これも何ゆる男山。作りし罪は山崎の。スエテ籠はあれよあはれけに。いつか都へ歸る山。春は梢に。いろくの。花咲く山にと山巡り。地となりは青し夏山の。かしは散るてふ卯の花や山時鳥山あひの。景色の花に顔つくる。笠を傾け。山めぐり秋はさやけき月影の。いたらぬ山は無けれども。地わけて名高き山かけの月見る方へと。山めぐり扱又冬は。遠山の。雲もてくる雲のあし。上地賢き雁は南向き。北を後に山のこす。山又山や峰白し。雪を誘うて山めぐり巡りくくつて。フシ山姫の。山衆交りの淨瑠璃も。夕限りの口癖や。長地今日は姿を町風にやつすとすれど隠れなき帯の牧方。近くなる。松原過ぎて河邊を見れば。あれくくく五ツばかりの子を真中に。フシ乗合舟の女夫づれ。思ひなき身の高笑ひ。餘所のつまごと羨し。歌流れわたりの。情である。網の目にさへ戀風が溜る萩の。くく上風。身に染々とせめて一夜は嘘なしにほんの女夫と。フシいつの世に。いはれつ云はん。情なやと抱き締めたるそぎ袖も。フシ涙にひたすばかりなり。間夫で逢うたも一昔。それ覺えてか一昨年の十七日のおほろ月。宵の我酒にほのくくと二人火燵のじやらくらを憎や。冷泉鳥に起されて。あかぬ別れの朝より。日文血文の付届け。半太夫いよしごけんと書いたるはほだしの種か。

537
カン花すすきほんに哲文フシいとしさに。幾夜の夢を。結び文。方様まるる。フシ花よりの思ひ。まゐらせ候べく。わけの盃色見えて。わきていづみの思はくは只逢ひまして。くく。又の御見をまつかしくハルフシその言の葉も。地昨日といひ今日と暮して飛鳥川。流れの里ははるくくと跡にながらの。夕あらし。髪のおくれのはらくくく。共に亂る我が心曇ある身は恐ろしの。お城も近き難波江のよ。し。あし知つてはまる身を。意見は釋迦に京橋の此方の森を隠家と暫く。勞を三重へ晴しける。

下之卷

フシいそぐとすれど。地秋の日の短かきあしの難波瀉。京橋より暮れかゝり問へど隠れも長町の。伯母の家作常々の咄に大方かぎあて。伽羅細工の甚五郎様は此方かと。くくりあくればア、いかにもこれが甚五郎。詞どれからぞと云ふ叔母の聲。イヤ京の半七下りましたと。地お花諸共つゝと入る。詞ヤア是はくく珍しい。文の來たは一昨日間もなう何の用あつて。地や連も有るさうなどなたぢや是へとあひしらふ。叔母様お久しうござんす。詞いつぞやお目にかゝつた花と申すもの。御無事で目出度う御座んすと。地腰打ちかくる二人の體心得がたく思ひは

ん。ハアようこそとばかりにて、フシ不思議。さうにぞ見えにける。地半七色を覺られじと。詞
お花ことも奉公の年明き。和泉の親許へ歸る道幸ひ同道致しました。イヤ先づそれはさう。地
あつらへの脇指先様は侍衆お氣に入つたかいらぬか萬一お氣にいらいで。甚五郎殿や叔母様に
難儀のかゝる事あらば。其の難を私が身に受けうと存じ参つた。其の次第が氣遣なうで御
座ると言ひければ。詞ア、爰な人つがもない。細工がお氣に入らぬとて何の此方や其方に難儀
がかゝる物ぞいの。其の上悦びや一昨日下ると其の儘。お屋敷へ持参めされしに。地柄まはり
縁頭鞆の塗。萬事殊の外御意に入り。甚五郎が女房はよい甥を持つた仕合者。後々はお屋敷の
御用も仰付けられ。出入させとの御懇いよく細工に精出しやと。聞くより二人は手を合せ。
エ、有難い忝い。天道のお助け命拾うたお花悦びや。嬉しうござる胸の痞がすつと下つた。詞
ヲ、道理々々。武士を相手の商賣大事に思ふ其の冥加。詞今日また俄にお屋敷から脇指につい
て。何やら急なる御用とて甚五郎殿を召に來て。地晝過ぎから参られ今に於て歸られぬ。定め
てお悦びに及渡しの御祝儀。お振舞が有るさうな定めし酔うて戻られうと。云へば半七色違へ。
詞ム、脇指に就いて急用とて又呼に來ましたか。地サアお花京から道中云ふ通り。かう有らうと

思ひし事我は是に待ちうけ。甚五郎殿に對面し脇指の御祝儀身に受けて祝ひ。運に依つて今夜
中にお屋敷へ。召出されうも知れぬこと。そなたは此のあたり旅籠屋に一宿し。明日は早々
親許へと云ふ聲付もしをくと。さうしては半七が一分は立たねども。ア、なんとせう暇乞ぢ
やと。胸に手を組み俯向きて、フシ涙を。かくすばかりなり。お花も涙に聲慄ひ。聞えぬ事云ふ
てくだんする。悦びも悲みも二人が身に引受ける。約束ぢやないかいの。甚五郎様に逢ひまし
て有無の事を聞く迄は。私は爰を動かぬ。叔母様も女子ぢやが男の一世の大事の時。見捨てら
れうか。コレ半七様。慘い事云ふお人やとスエテ恨み啣ちて。泣きければ。詞二人の顔をつくづ
く見て。其方衆が云ふ事は何の事やら此の叔母は。すつきりと合點がいかぬ。此方のつれあひ
甚五郎殿は武士附合して堅い人。半七も侍筋儀強い若い者と。常々自慢し置きしにそれにお
山を同道し。初めて對面させられうか。地一町北はみな宿屋一人ながら早う往て。甚五郎殿に逢
ひたくば半七ばかり明日おじや。夫婦にも成畢せ首尾よい後はお花とも對面さしよ。今にも歸
られ此の體見せ。大事の甥をつれあひに見限らするが口惜しい。此の世話やむも大切さサア
フシはやくと氣をせけば。御憐みの忝さ涙が溢れ有難し。詞然らば叔母御へ一寸内證申す事

有り。にじり寄ればア待ちや。地歸られうかと思ひあぶくすると。庭におりて潜り戸のかけがねをしやんとかけ。サア何事ぞ氣遣はし語りや聞かうと云ふ所へ。甚五郎遽だしく門叩いて。いま日が暮れて門しめる明けよくと云ふ聲に。そりや情なや歸られた如何せん。借屋の路地へも廻されず押入には夜着布團。何所へ隠さんかやはかくる。帷子入れて夏過ぎし空長持に秋の鹿。つまもこがれて諸共に。ッッ押隠すこそ哀なれ。地蓋を押へて聲立てまいと欠伸ながら。ア、とろくと假寝の。寢耳にけはしい叩きやうと。地くゞり明くれば甚五郎せきにせいたる顔色。血眼になつて駈上り。アヤ女房ども。甥のとのに掛つて此の甚五郎が身代破滅。命の大事になつてきた。此の脇指折紙附正銘の信國を。今の世の廢物下坂にすりかへ。銘を似せて突きつけた。地先は武家方出入の門。盗人は女房の甥此の甚五郎が。存せぬと言ふ言譯ならず。京へ詮議に登つては駈落者と町内へ。付届にあうては人中で口利かれず。死ぬるより外文珠の智慧にも能はぬと。脇指からりと投出し。ッ溜息ついたるばかりなり。地叔母ははつと胸塞り。扱は半七が身に覺ある詞のはし。思ひ當つて途方にくれスエテ暫し。應答もせざりしが。地半七元より覺悟の前長持の蓋押上げ。出でんとするを睨みつけく。脇指取上げなう甚五郎

殿。詞わしは女子の物の道理は知らねども。ついて廻る身の因果は。大名高家智者學者も免れず。地是は正しく半七めが業なれども。半七がして半七はせぬ心。何を隠さん元彼の信國は。常々語りし我が家に三代迄は崇ると云ふ。地性にふさはぬ脇指一目でははと思ひしが。詞武士の上こそ刃物の相性町人職人に成り果て。地何の咎めの有るべき親もない一人の甥。是をつてに一國のお細工の得意つけたさに。私がさもししい心から律義全半七に。惡根性が付きそめ身の大事仕出したも。いきまはつて三代目の手に觸れしその崇。知つてゐながら此の叔母が押事したる其の咎め。因果とほかは。ッ思はれぬ。地恥かしうござる甚五郎殿。男を養ふ女子も有る。廿年足らず連添うて何を男の爲もせず。身の難儀をかける事怨にあらう憎からう。それが悲しい面目ない。許して下され甚五郎殿と。夫の膝にどうど伏し。ッ聲も。惜まず歎きしはことわり。過ぎて哀れなり。地甚五郎も男氣の夫婦の中に何の面目。女房の甥の仕業存せぬと云うて。此の甚五郎が立つものか。見ず知らずにも義理に依つて命を捨つるは男の役。氣遣するな首切られうが。牢へいらうが。皆我が科に引きうけ。半七に憂目は見せぬと心は利發に逸れども。差當つて相手づくスエテ思案に暮れてぞ見えにける。女房は手を合せ。ア、情の末とて忝い。侍

衆は斯様の事を皆御存じ。脇指のいはれを申し叔母一人の科に落し。こなたにも半七めも罪を脱れて下されと。脇指取つてするりと抜き。詞本のは信國是は下坂。作は替れど焼刃寸尺一對なれば。一家に祟るは同じ事は故に父様が。人を討つて其の刀でまつ此の様に押肌脱ぎ。地逆手にとつて左の脇ぐつと立てと云ふ詞。直に突きたて右へさつと引廻す。是はいかにと甚五郎縄付けば半七夫婦飛んで出で。叔母様狂氣か情ない。身に覺ある故に死に來た半七と。脇指に取付くを突除けて。詞ヤイたわけものそちを殺す程ならば。なんの叔母が長口上自害をもするものか。手の悪い事したれども駈落して身も隠さず。叔母婚の難儀を思ひ身を捨てて來た心。さすが筋目程あつて。せめても是はでかしたな。そちが父御は我が兄様。最期の時に預りし甥なれど。着替一ッ帯一筋何を優しき事もなく。預りしかひもッシなかりしに。詞大事に代る命其方には遣らぬ。皆兄様への奉公ぞや。叔母さへ死ぬれば科は一人に極つて。脇指は上り物外に御詮議は残るまい。又物の祟も三代濟む。地行末目出度う出世して親祖父の名字を繼ぎや。サテ早う行きやくと。深手に息もきれんくの血汐に落つる涙の體。花はわつと咽返り半七は猶涙にくれ。叔母叔父は親同然際にかゝるとして。一寸も退きませぬと。取りつけば甚五郎。詞

エ、不合點な。其方が爰に狼狽て叔母に犬死さするかと。地二人を取つて突出しかけがねくるるしつと、おろせば。なうそんなら退きませうま一度逢はせて下されと。夫婦は門に打凭れスエテ聲を揚げてぞ泣き居たる。叔母は苦む息づかひ。ナウ甚五郎殿。詞人立のない前に早う死にたい止は。どごちや地くくと悶ゆれば。涙ながら甚五郎。女なれども武士の切腹止とは勿體なし。介錯せんと立寄ればいやく。詞人の切つたと我が切つたは。疵改めに顯れて此方の言分むつかしい。急所を教へて地下されと男増りの自害の體。夫はいよく心くれ。爰をくくと我が喉吭を。指せば領き振上る。手も弱りはたと落ちて。太股に突立る又振上ぐれば突外し。肩先がばと突込んだり。左手へはづれ右手へはづれ苦む顔色。夫は悲む南無阿彌陀。南無阿彌陀佛の聲を力に咽のくさりを一刀。うんと許り目もくれなるの薄もみぢ。夜明の嵐に散失せしフシ。はかなき最期ぞ是非なけれ。地歎の聲は何事かと向ひ隣裏借屋。潜戸蹴放し駈入つて。やれ女の腹切自害よと。組中年寄月行事。町代夜番が棒ちぎり木ばつたくさばにおく霜の。はかなき命南無阿彌陀南無阿彌陀佛疑なき。西方極樂淨瑠璃に語りて哀れを留めける。

右之本令吟覽頌句音節墨譜
等不殘毫厘令加筆候可有開
版者也

竹 本 義 太 夫

重而予以著述之本令校合候
畢全可爲正本者歟

近 松 門 左 衛 門

京二條通寺町西入町正本屋 山 本 九 兵 衛 版

① 傾 殊 者 春 逢 主 意 在 心
 人 よ ぐ 衣 袂 け た ぐ ば け け け
 と ぞ せ と の 中 じ ゅ ー 運 ち ゅ ち ゅ ち ゅ
 小 袖 裏 の 流 の 糸 け せ 一 流 あり
 交 心 流 交 心 流 尤 立 身 志 因 縁
 者 け 何 中 香 裏 大 快 心 助 難 事
 尚 必 後 山 け 殊 多 丸 心 志 志 志 志
 け ち 本 心 母 七 善 行 行 行 行 行

傾城吉岡染

(八行六十四丁本)

近松門左衛門作

地人よたゞ衣紋氣高く染色も。ぢみと伊達との中昔主を嫌はぬ黒小袖。憲法流の兵法の其の
 一流より色心流。夢想流とも立分れ因幡の國の某。香春大炊之助顯定は當國淀山の城主の梢
 未だ二葉のはき木やフシ母の。養育淺からず。地永祿の春の花軍元龜の秋の村紅葉。亂れし
 御代も治れば大和の國宇陀の郡。龍門殿の姉姪へ聲名跡の言ひ入れに。自身母御の御出とさす
 がは。武士の後家親の。猶も世間を播磨路にかゝつて押せや行列の。二つ道具の鍵の柄に押分
 けらるゝ山櫻。ちりく對の挾箱青皮の覆埋れて。二月の雪を振出す臺笠立傘天鷲絨の。お袋
 様のお供にも。殿様風の徒士の衆旅は慮外も御免ある。兵庫を御影西の宮いばら墨鉈奴ども。
 茶屋の床几に腰かけて餅に砂糖の尼が崎。上戸は冷も神崎も茶碗傾け五つ六つ。七つ長良のは
 した錢八つ八幡は其方ぞと。九重近き大黒舞。フシ東寺口にぞ着き給ふ。ハルフシ水彩の花を。山

吹の。露の色かと浮かされて。朱雀の蛙蟻ひ出す。聲は女の笠の内。フシ目許の闇も子を思ふ。地親と思しく手を引いて。背中に孫をすかし兼ね渡り兼ねたる世の中を。人の情や恩をきる。紙衣の袖の三味線の聲に誘はれ。詞お乗物の内へ申します。私は江戸吉原三浦が内の吉岡と申す傾城の成れのはて。上つ方には御存じない事。傾城遊女の勤め程世にもあさましい悲しい者は御座りませぬ。さ程はかない憂き身の上にも。申し戀といふ一字を心の力本郷の憲法様と申した殿御と新造の春の花より脇詰めの秋風まで。地五年六年の霜雪に浮き名を捨てて逢ひましたれども。元よりお國は勘當の身一門衆のみつぎとはなし。自ら御身代も傾き御不自由になるに付け。揚屋へもうとくしく日本堤の茶屋の噂が。二度する返事も一度になり駒形の船頭迄。押すに押されぬ世は金銀私も身を苦しめ。親方の仕着せも代なして男の恥辱は雪けども。身を飾るは流れの役詮方つきて風俗を。洒落に紛し衣裳を残らず紙衣にして。門立道中揚屋入り數多の太夫天神の。花を飾つた一座へも紙衣で公界を勤めし故。後にはそれが異名となり紙衣吉岡紙衣傾城と例なき名を立てられしも。彼のお一人を思ふ故重る馴染のしるしに。スエテあの子を儲けし事なれば。地手鍋さけても一所の暮し泳ぎ着くやうに存じましても。詞身

請をすべきあだてはなし。年明く迄の月日をあくべなう思召されてか。但は又世を見限つての遁世か。おいとしや憲法様一昨年の六月。一夜に本郷の宿を仕舞うてそれよりふつうに行き方が知れませぬ。地私は二世かけた憲法様に別れ明暮涙に此の如く。目を煩ひて勤もならず残る三年暇を貰ひ。男の行方を尋ぬる爲面白からぬ三味線弾き。お袖の情の施し受け諸國を彷徨ふ憂き身の果。古へは一步小判石なつてとなしたる訓。只一錢の憐みを此の子にかけてと言ひさして。涙の末を三味線にフシ弾きまぎ。らずぞ哀れなる。地乗物より御意あればお側の腰元承り。詞これく其の憲法といふ人は。元は何處衆其の子を負うた親爺は。吉岡の爲には何れぞお尋ねなりと言ひければ。ハア私は。吉岡が父江戸品川にて僅かの染物商賣仕り。あの者の母長々煩ひ相果て。薬の禮物とひ弔ひも詮方なく。十一の年吉原へ子を賣つて食ふ親心。地無念やな恥かしやあはれ誠あるお客もがな。一期の片付あれかしと神佛を祈りし内。詞香春久太郎殿と申すお侍。代名は憲法お國は親御の勘當にて。侍やめて江戸住居兵法の師をする人。末迄の契約と申す故親の身なれば嬉しさに。地憲法様と知人になりそれよりは。我等が商賣染物の道を仕習ひ。色々の物好き仕出し本郷に大店借り。吉岡染憲法染と世にはやる根本は。此

の俸が父親なり雛形盡しを唱歌に連ね。節を付けて弾き語りお聞きなされて只一錢。御合力と泣きければ吉岡涙の三味線の。調子をかへてぞ語りける。

紙衣雛形

歌夜さ來いの。玉章つばさ。に。かけて。裾に刈田の。秋の雁。ユリオクリすそを。地すそを小袂に染めかけしは。これぞ江戸袂。フシ武藏野に一むら。薄初冠。スエテ染めかざしたる櫛扇や。吉野川には花筏。立田山には鹿紅葉。フシ肩からおとす菊の瀧。紺と淺黄の水玉を基石ちらしの濱千鳥。歌はんま千鳥の友呼ぶ聲は。ちり／＼やちり／＼。ちんちりめん紗綾や綴子のひひながた。三河にかけしは。八橋の。フシ澤邊に匂ふ。杜若。根芹澤瀉澤桔梗。水にまかせて染めしよしオクリ波は。立波。フシかたを波。地青海波に網の手や。紫苑龍膽をみなへし。一むら竹の茂り葉に。千羽雀の飛びちがひ風に揉まる。模様もあり。ハツミ富士と清見を。染め分けに裾に千本の。フシ松原や。田子の入海帆かけ舟。又柳に雪降りて。枝も撓むやしつはりと積れるかけに。フシ白鷺の。物思ひけにつつくりと。止まりたる雛形あり。舞さて。また。肩には雲がくれ。月に猿猴松に琴。松を時雨の染めかねて。眞葛が原の戀風のざんざん。さつと吹

きナホスしほりたる。絞り染のコハリ模様もあり。鳥屋出の鶯が餌にかつゝ。深山をさがす所に。雪の根笹の其の下に。あさる兎を目にかけて眞一文字に落すを見て。兎は谷へ逃げんとするをほつかけ。／＼／＼追つ詰めひつかい掴んで巖に上り。引裂き喰ふ。地其のけしき。さも凄じき模様もあり。簾に唐猫烏帽子に鞠。衣紋流の柏木や。柳櫻松楓。梅に鶯水に鶯鶯。牧の連れ駒コハリ狂ひ獅子。蝶に蒲公英葛鳳凰唐草桐唐草。扇流し筆流し蟲づくし貝づくし。小紋中形散し紋絞り鹿子染鹿子。打出し鹿子に地われ／＼が戀に。心はけしがのこも候と。撥音も亂るれば詞の花も打ちしをれ。一錢の御合力なう。フシお情。あれとぞ語りける。地御老母夢とも辨へず乗物より轉び出で。餘所の事かと思ひしに。其の憲法とは妾か子。其の子は正しき孫なれば抱上げ顔も見たけれども。父めを勸當せし上は。孫をなつけんやうもなしと。最前より乗物に包み兼ねたる我が思ひ。もれて是迄出でたるぞと孫をよそ目にしみる／＼と。フシのかし。さうなる涙の色。地武家の行儀に恥ぢ恐れ心易けに吉岡親子。お側近くも寄りつかずスエテ平伏してこそ泣き居たれ。調母上重ねて。其の久太郎が名乗憲法と書いてけんばふと讀む故に。地常々にさは言ひつるが。代名にしたると。フシ覺えたり。彼めが兄は香春大炊之助顯定。たんだ

二人の子供の内兄の母御は果て給ひ。妾は後づれ久太郎を悦び。殿にも後れ兄弟ながら後家親の養育にて。家の武藝も勵ませ實子繼子の隔てなく。人となしたる其の中に兄大炊之助は胎内より。片足不具に生れしは如何なる過去の因果ぞや。世上の口のさがなさ繼母が胸慾で。繼子の片足折つて大炊之助は世間がならぬ。あつたら武士に疵つけたと沙汰を聞くも情なく。地所詮弟を町家へ出し無實の難を清めんと。思ふ内に悪性つき身持の悪きを幸に。勘當はしたれども腹を貸した我が子なり。行先も不便さに少々金子を取らせしが。仕馴れぬ町家の家職に疎く身を立つる術知らず。所を退きしと思はるゝ附添ふ下人友達とてもなかりしか。勘當の子の行方生けうが死なうが母の身で。問うて益なき事ながらとステ又涙にぞくれ給ふ。詞親慇懃に手をつかね。されば兵法のお弟子の中。石川五右衛門と申す尾羽打枯らした浪人。志頼もしく。下人のやうに附添ひ。一所に落失せ申せども是も故郷を存せぬ者。地御勘當とは申しながらお血の筋は憎かるまじ。御威光にてお行方を尋出して下されば。娘や孫への御慈悲とッシむせび。入つて申しける。詞ヲ、く行方を尋ぬるばかりこそひけ恥辱にもならねども。此の度兄の大炊之助大和の國龍門殿へ。聲名跡の家督となり一門書に漏れたれば。地心に千萬思うて

も口に噂も叶はぬぞや。随分方々巡り會ひ一本立の久太郎。介抱頼み入るぞとて旅視より香包。金子入りしを其の儘に其の子に何か人形でも。買うてやりやとのお手づから吉岡も泣出し。恐多き事ながら此の子が爲には婆御様。私には姑御嫁よ孫よのお詞を。とてものお慈悲とかき口説けば母上は其方より此方の心推量あれ。言ひ度い事の海山も世の憂きふしに隔てられ。人目のあれば何事もこゝにくと胸を撫で。涙を抑へ乗り給へば。地お輿參れ立ちませい。お先お先と呼ばはる聲吉岡もよしさらば。又も御縁のある迄と言ひ返し繰り返す。三味線のいと笠のはに。涙ほろつく花曇り花に。別るゝ雁がねの。便りの風も音させぬ。紙衣の皺のよるべなき憂き身の。末こそ三重無慚なれ。地千里も一步に始り。人の善惡一念の萌によつて苦むす。巖ともなるさゞれ石の石川五右衛門といふ者あり。憲法に兵法の師弟の契約親切にて。一言報恩の下人となり共に武州を立退き。上方に蟄居して或は肩に棒を置き又は日傭小働き。主師たる憲法に。随順してぞ育みける。地三條五條の夕霞上り下りの旅籠屋の。門々覗いて。詞泊りのお衆に人はお雇ひなされまいか。荷物でもお駕籠でも伊勢へなりと熊野へなりと。金安で二人前の働を致さうと。地言うて立ちまふ雲介や。ッシ我が身ながらも口惜しし。地大橋詰の

鏡屋に千石ばかりの風體の。後室がたの泊りと見え幕打廻し金具の乗物。茶辨當汲む女中もあり屏風の小蔭に休むもあり。庭に並べし据風呂のフシ竈賑ふ其の氣色。詞五右衛門宿の主に近付き。泊のお衆に人はお雇ひなされまいか。何處のお衆でござるぞ明日のお立ちで御座らうといへば。ヲ、因幡から和州へお越しなさるゝ衆。若旦那は四條の道場迄今宵お着きななさるゝ筈。まだ四五日も御逗留。お國よりの雇人は京でお暇下され。又これより京者をお雇ひとやら聞いた。入るが定なら肝煎らう但慥な請人があるかや。地それ合點なら後におじや宰領衆に引合せう。請人あるかと言ひければ。詞いやそれは氣遣なさるゝな。打見こそは此の體なれ申すは過言がましいが。角屋敷引廻して五間に七間の二階藏。地朝晩見て居る西隣三疊敷の御主。後に來ましょ頼みますとフシ笑ひてこそは歸りけれ。地先走の若黨小橋の方より驅け來り。詞若旦那大炊之助様。地只今お着きといふより早く。七つ道具の宿入の足も。揃ひて三重いさぎよしフシ。母上表に。地出向ひこれく其のまゝ乗物はへとありければ。憚り御免候へと乗物の戸を明けて。詞明日上着と存じ候へども。旅宿の御徒然心許なく御顔ばせを見んため。夜を日について急がせ候。地扱某は四條の道場と申す所に宿取らせ候へば。一先づ落付き下々にも

休息させ更けて又。お見舞ひ申し上げんと申さるゝ。ヲ、母が旅寢を大事にかけ道中急ぎの孝行。満足申した嬉しうおじやる。其方の行跡丁寧の心入。見るにつけても憲法めは不義不孝の奴かなと。思へば胸が痛いぞや。詞それにつき夜もすがら語り度い事もあり。其方は此の儘此處にゐて荷物其の外下々は。地道場とやらんへ歸されよ乗物直にと立ち給へば。兎も角も御意次第。いざお先へと色代あり。オクリ乗物へ奥へぞ通しける。地殿様は此の所にお泊りお侍衆中間衆は。四條の道場のお宿へ参れとの御意なりと。いふ聲に下人どもサア是からこつちの正月だ。可内四五介合點か。なんでも今夜はあんばいよしでもふち喰つて。二合半切の煙食酒頭割に十文出し。地比丘尼呼んで念佛講。丸太節でしよけるべい。フシ押せくくとて歸りけり。地暮過ぎ行けば石川五右衛門雇の談合せんために。鏡屋が見世のさき御亭様くくと奥を見入つて立つたる所に。葛籠片々腰元二人昇いて出で。詞なう七藏く。七藏は何處へ行きやつたと。地西東見る折から。五右衛門思はず何の御用でござるといふ。詞ム、お國から雇ひの人足七藏とは其方か。やい。イヤ七藏とは其方の事か。あゝあゝく私七藏。地お國からお供致しましたと。心ならずも答ゆれば。詞ハテあの人はいさよろくと何が性根に入るぞいの。此のお葛籠

はお召替お上下も入つてある。四條の道場へ持つていて宰領衆に渡しやと言へば。五右衛門合點は行かねども引上げて見て。是はよつ程重たい物お金でも入れましたか。いや／＼お金は入らぬ。お差替のお脇差小刀も入れてある。地封を改め渡しややと。言ふより始めて五右衛門も。天の與へと思ふ氣のフツつきそめぬるこそうたてけれ。地ぶらさけては行かれまい棒を借つて肩けん。乗物の息杖二本。紐に通して足早に出でて行きけるが。流石の五右衛門を恐ろしく。胸もおどれば小橋の上にどうど下し腰打かけて。調ム、ウ何とせうなあ。思へば／＼うまい事。いや／＼是でも盗めば盗人なり。此の石川五右衛門がとても盗人になるからは。異國の盗妬本朝の熊坂にも勝つてこそは本望なれ。是程しきの小盗生中に置いてくれうか。いや／＼何の道にも稽古あり。沙彌から長老になるものなし。稽古の爲に見ようか。地善と悪との道二筋一足の踏み違へ。どうかかうかと思案なれば又女中の聲として。調新五平殿新五平殿とぞ呼うだりけり。ヤア是は徒士か若黨か地侍分合點と。葛籠を橋の欄干の外面に押隠し。上着を解いて打ちかけ羽織丈に裾端折り。息杖二本大小に柄は手拭ぐる／＼巻き。さしも利發にひつからけ。大跨ぎに手を振つて。調ハツア只今お召しなさるゝは拙者事でござりますかと。見世

の先にぞ躡ひける。ム、御一門衆からお雇ひの新五平殿といふお徒士衆は此方が。なか／＼拙者新五平と申す者でござります。殿様より此のお刀筒お預けぢや。地四條の道場居間の床に立て置いて。御番なされと仰せられ則ち鍵もお渡しと。青貝蒔繪の刀筒。渡せば五右衛門打ちかたけ。先から持て来る大仕合殊に鍵迄請取つて。盗みの口が明いて來たと心は生き／＼はいはいと。元の小橋に立歸り溜息ついて。重ね／＼の福徳只取る程の得はなし。初手は怖し二度目はまゝよ。三度目からはする／＼此の拍子ではまだ取れる。嵩高では如何なり夜明迄にゆるると。運んで取らんと川べりに下りオクリ繋ぎ捨てたる高瀬舟。地苦の下に刀筒葛籠押込み立上らんとする所に又腰元の聲高く。髭の候介御用がある。髭は何處にぞ候介はるやらぬか。調なう髭々と頻りに呼ぶ。ヤア下部の奴心得た。又してやつたと帯を解き下着きりゝと襦袢に。帯はつつ込み後下りに鬢かきさけ。裾三のつ迄ひつからけ。ない／＼と言つて出でけるが。ヤア忘れた髭が無い。ぬつぺりでは時が明くまいエ、何とがな。これ幸と辻行燈の火を一つ。御無心といひさまに指に油煙を隠し取る。是も盗みの内ならん頼けた鎌髭鼻の下。推當に作り髭ひけよ／＼と呼ひかけられ。ひけは是にと出でにける。調ぞんざいなあの人は。面々の受取

の袂箱はかまはずに何をしてゐて呼ばしやるぞ。四條の道場のお宿へ。地持つて行きやと叱らるゝを幸に。顔を傾け迷惑さうに。眞面目に持つて出でて行くこれ〱今の過怠に。調宿入りの下馬先して一振ふつて持つて見しや。ない〱。角内押つ立てろ。躡ふんつけ手先を揃へ。願つき出せ作り髭。鍋墨こそけて地うちかけてつくや火うちの石川が。後は釜煎り釜の下猛火の。種とぞ。三重〱聞えける。フシ大和源氏の。庶流とかや龍門殿と名も高く系圖正しき家なれども。先君御死去の後家督たるべき男子なく。舞樂の前和琴の前姉妹二人の姫君さへ。姉の舞樂は繼しき仲御繼母と不和なれば。掣取も延引あり叔父遠坂舍人看坊にて。年月を送られしが因幡の國香春の總領。大炊之介顯定入家の取組と、のひて今日吉日の掣入と。式三献の飾り物。フシ兄弟立出で見給ひて。地なう姉様此の高砂の尉と姥。調共白髪と成る迄の祝ひ事は聞えたが。地なぜに子はござんせぬ不思議さよとありければ。調舞樂の前打笑ひ。あの高砂の謠を聞きやらぬか。地をさむる手には壽福を抱きと謠はぬか。壽福とは子寶を。フシだく心よと宣へば。地ム、出來た〱そんならやがて姉様も。子寶をだいたり今宵は殿御ををさむる手に。抱付かしやんしよと。フシ言ひ捨て走り入り給へば。地ヲ、千秋樂には撫でさすらう。悪口言ひめ

覺えてゐよと追ひかけ奥に。三重〱入り給ふ。地執權舟越總馬叔父繼母の側に寄り。調小聲に成つて申すやう。内々は御妹和琴の姫世取にせんとの御企。然るに此の度大炊之助姉姫への御談合。如何あらんと申せども御分別ありとの事。如何様の御分別かは存せねども。今夜これへ呼び入れて掣姑の御盃。總領娘の夫なれば。大炊之助は龍門の家の世繼と申すもの。我等は合點參らす御思案如何と叫べば。叔父舍人打笑ひム、扱はお袋未だ話しめされぬか。こりや總馬。大炊之助が内證に間者を入れて聞いたれば。是も繼母がかりにて。幼い時に繼母が片足を打折つて。跛を隠してゐるといふ。龍門家の譽大内御遊の警固の家。五體の内指一本でも不具なれば參内院參叶ひ難し。地隨分足に氣をつけて隠し跛を見付け出し。追付け禁中更衣の御能の警固の役を某が勤むるからは。我龍門の家督にて和琴の姫と夫婦になれば。妹が總領に立ち姉の舞樂は跋めと。一所に館を追出し知行所の在郷に。三人扶持か二人扶持付けて追籠め置く思案。なんと悪いか〱と言へば繼母もに〱〱と。調掣の母御も繼母なれば。此の巧みを聞いては先にも腹の立たぬ事。繼子の片足打折る程のお袋ならば自らとも心が合はう。地近付になつて話したら女夫ながら打殺す。思案のあるまい物でもなしと語れば總馬もうなづき合ひ。一段

の御分別其の儀にて候はば叔父御様は山屋敷に。人数を揃へ御控へ候べし。お袋様と某は座敷に出でてあひしらひ。見付け次第に御注進仕らん。大勢どつと取かけ。姉御諸共追出し。妹君を家督にそなへ今夜中に御屋形すゞぎ上げ申すべし。ヲ、出来たく、定めて足を隠すべし。長廊下を歩かせて随分恥を見付け出し。知らせを待つと座を立つて。天神山い山屋敷忍びて。人数を 三重へ集めけり。地又關の若侍只今掣君大炊之助殿。御出でなりと申し上ぐればそれと。繼母主従目くばせし、フシ迎ひにこそは出でにけれ。地掣は出立きらやかに少しも臆せずすらくと。疊觸りの尋常さ大小の指しこなし。肩衣襟つき袴腰つくり付けたる如くなれば。各案に相違して怪轉したる其の顔色。地掣はなほもしとやかに。詞ム、彼方は御老母 姑御前候な。是迄のお迎ひ恐入り候。執權舟越總馬とはお手前か。祝儀の座敷はどこ許ぞ。地案内がてら先へくと述べければ。いや案内迄も候はず座敷に飛越溝もなし。氣遣なしにお通りさり乍ら。龍門一家の者どもは兩足達者に生れ付き。高敷居中敷居上段下段の間所多く。上り下りさぞ御太儀御用心あれといふ。ヤ扱こそ聞きしに違はず。彼奴ばら掣を働るよな。地此の方より鬨りかやし心底を試さんと態とちがくちがくちんく。千鳥足してやうくと

フシ座敷にはたと直りける。主従目引き袖を引きチ、目出たいく、謠へく。ウタヒ秋の夜の盃。かけも傾く入江にけれ立つ。あし元はよろくと。地足元はよろくと。三國一と二三遍フシ押返し舞ひ謠ひ。地さぞ叔父御様御満足。先づ御知らせ申さんと。オクリ山やし、きへぞ走りける。地又立爾の若侍あわただしく。詞只今香春大炊之助と名乗つて。以前の出立に寸分かはらぬ掣殿御出でし故。同じ人が二人あらうか。罷り歸れと申せども。聞入れもせず是へ推参仕ると。地言ひもあへぬに大炊之助顯定。つかくと立入つて座敷をきつと見渡せば。刀脇差衣裳袴に至る迄。我が身に少しも變らぬ男真中に坐したりけり。ヤア京三條の旅宿の盗人ごさんなれ。掣入の見參に盗人揃めて姑一家に手柄を見せんとつかくと寄りよく見ればこは如何に。腹變りの弟久太郎憲法なり。思ひがけなき大炊之助。呆れて咎むる詞もなく。フシ溜息。ついて坐しるたり。地憲法は豫てより思ひ設けし思案の上。少しも騒がずこれ 姑の前。詞祝言の盃は何とて延引なさるゝぞ。但し頭から姫の閨へ參らうかと。言はせも果てず大炊之助いやこれ姑殿。因幡の國淀山の城主の末孫。香春大炊之助顯定といふ。龍門の家の姉掣は日本國に某一人。詞何とて祝言の盃は延引ある。押かけて姫の閨へ罷り通る

と立たんとす。憲法どこへと膝押直し言はれぬ事を長々と。名乗だてめさつて赤恥かいて取返しがるまい。龍門の家の入婿家督は某嗣ぐからは。姑御前を始め叔父御であらうが執權であらうが。身が下知は背かせぬ。一日でも家を嗣げば此の家は我が物。其の後は誰にでも譲り度い者に身が譲る。似せ事して化顯れ他人は堪忍致すまい。はやお歸りやれ〜と。フシ苦々しくあひしらふ。地ヤアいき盗人の騙め似せ事とは己れが事。此の家に望みならば一旦家督を某嗣ぎ。骨肉の好みあり其の後は己れにくれう。道知らずめ立つてうせまいか。いや〜其方の器量で此家は今宵一夜もつがれまい。チ、ついで見せたら何とする。チ、見物致し度いどの眼で此の眼で。地見事見るか見せるかと互に膝立てぎしみ合ふ。兄は跛を隠さんため袴を長く仕立させ。右に足駄を履いたるもせいて忘る、膝まくり。憲法姑に見せじとて身を捻ぢ振つて陰になりそれ。それ〜と我が膝を。叩いて教ゆる隙間より繼母きつと見。見たぞ〜聲姑の對面の晴の座敷へ高足駄。地禮儀を知らぬ不具者此方は騙め二人共に叶はぬぞ。皆寄つて引きすり出せと猛りかゝれば大炊之助。自身の瑕顯す上からは誰をか恥ぢん。彼奴を引きすり出せば出せ。我に於ては動かぬと股立高く捻ぢ上ぐる。憲法もつつ立つて合點づくで歸れば

歸る。引きすり出せとは誰が事と。地弟は兄を庇へども兄は弟の心を知らず。さけしみ合ひたる勢は、フシ危かりける有様なり。地老母は斯くと聞くよりも徒歩跣足にて走りつき。二人が中へ分け入り給へば兄は足駄を脱ぎ捨てて。あつと敬ひ手をつけば弟も蹲り。おなつかしやとばかりにてステ顔を見上げて泣き居たり。別れて久しき我が子を見て、フシ母も心は亂るれども。地さあらぬ體にてア、是は姫君達の母御様か。詞そもじ様へも嫁君へも儀式の對面致す筈。かゝる無禮の有様はお恥かしやさり乍ら。地我人子を持つ親の身は。人に思はぬ慮外もして。跡で訛言、フシするばかり。地料簡して御免候へや。詞やれ憲法め。己れを勘當せし時に言ひ合めた母が詞。はや忘れて此の體か。地妾も聖人賢人の身ではなし。打明けていふ時はあの大炊之助よりも。腹に十月の宿貸した己れが不便は勝るなり。其の己れを勘當せしは先立ち給ふ佛達への。奉公といひ世間の道。いとほしや先殿の臨終の枕の下兄の大炊は身も不具。町人か出家にして。弟を總領に香春の家をとばかりにて。死病も憂へぬ兵の。御涙に咽び入り終らせ給ふ御顔ばせ。此のお心を察して見れば。妾が心あさましく繼子あたりが辛うても。御遺言の上なりと妾がうき名を。庇はせ給ふ殿御の慈悲ステ忘れられうか忘れうか。地それよりはなほ疎ら